

堀金の宝

編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会



はじめに

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会 原 明芳

堀金村は、昭和三〇年四月に、烏川村と三田村が合併してできあがる。

江戸時代の頃は七村に分かれており、そのうち「堀金」に通じる名前を持つ村が三村あった。ところが明治時代になると、これら村々は烏川村、及び小倉を含めた科布村の二つにまとまることとなる。つまり、このときに地図上からは「堀金」の名が消えたのである。

一方、堀金地域の学校は、江戸時代の旧村単位に存在したが、明治一九年四月にそれらが合併し、二つの村の組合立として「村立堀金学校」が発足する。明治二年に町村制実施によって、尋常小学校は一村一学区になったが、烏川・科布両村の意向により、それまで通り組合立のまま堀金学校が維持される。明治三年にも、小学校令の改正によって一村一尋常小学校が求められたが、明治二六年に科布村から小倉が抜けた三田村と烏川村は、なんとか文部省を説得し「堀金尋常小学校」が継続することができた。

今、安曇野市内には一〇の小学校がある。多くが町村合併を重ねる中で統合を繰り返し返しているが、堀金小学校だけが創立から一〇〇年を超えて存続している。

つまり、中世に歴史に登場した「堀金」は、自治体の名

前から消えても、小学校の名前として明治時代から繋がれてきたのである。今、安曇野市の一地域となつてからも、堀金の名は消えることなく未来へと受け継がれていく。そしてその未来を担うのは、歴史ある小学校で学ぶ子どもたちであるのは言うまでもない。

令和六年三月



堀金の宝

「目次」

はじめに	3
関連地図	7
第1章 堀金をつくる自然	
1 堀金の大地の形	8
2 国営アルプスあづみの公園と周辺の自然	12
3 草原の青い星 オオルリシジミ	18
4 県営烏川溪谷緑地	22
5 北アルプスの自然史 安曇野の山岳環境と景観	28
6 田多井のシダレザクラと早春の生きものたち	36
第2章 掘り出された堀金の歴史	
1 縄文・弥生時代の堀金	38
2 古墳に埋葬された人々 穂高古墳群の一角の群集墳	42
3 古代安曇郡 堀金地域の開発とムラの暮らし	44
第3章 中近世の開発と信仰	
1 堀金氏の栄枯盛衰	48

2	二つの山城を訪ねて 岩原城と田多井城	54
3	山口家	60
4	描かれた江戸時代の堀金	64
5	堀金の用水路 烏川扇状地の開発	68
6	拾ヶ堰開削への挑戦	72
7	烏川山の林業・入会慣行	78
8	山の信仰と麓の寺院	80
9	田尻不動堂の目赤不動	86
10	神社本殿小ばなし	88

第4章 堀金に息づく伝統と伝承

1	砂渡山神社の担ぎブネ	90
2	集落をつなぐまつり 川口の道祖神まつりと観音堂まつり	93
3	新屋の馬頭観音講	96
4	さんぞこ・にぞこ	98
5	疱瘡と駒形神社	100

第5章 堀金の偉人たち

1	出会いと対話に生きた臼井吉見	102
2	佐藤嘉市 常念校長とよばれた教育者	110
3	斎藤茂 研成義塾に学んだ「野の哲人」	114
4	日本産業革命の一翼を担った臥雲辰致	116
5	山口蒼輪	120

6	不屈の農民文学者 山田多賀市	122
7	ウォルター・ウェストン 常念に魅せられて	125

第6章 近代く時代の移ろいの中で

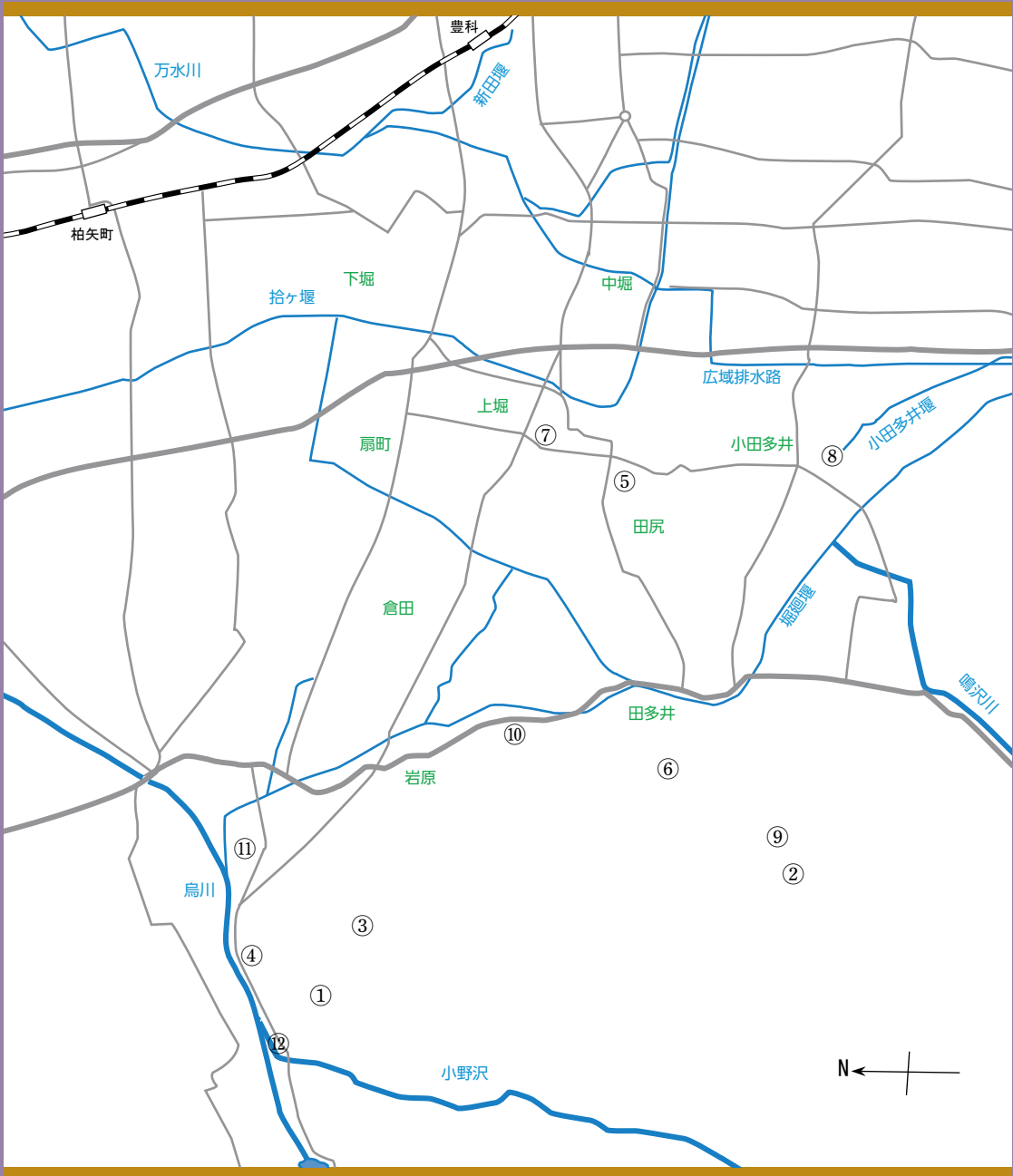
1	堀金村ができるまで	128
2	常念岳の観光	132
3	烏川の水力発電所 電力需要をまかなった安曇野の水力発電	134
4	戦争を記憶するもの	138
5	戦禍からの入植 新たな開墾地	142
6	須砂渡修練所から啼鳥山荘へ	144
7	新たな時代の子夜明け 堀金学校	148

第7章 堀金の今

1	堀金から日本の食卓へ 安曇米	152
2	安曇野を水害から救う排水路 溢水災害から堀金を守る	156
3	ほりがね物産センター	158
4	新たな観光資源の開発	160
5	過去を紐解き、未来へ活かす 安曇野市文書館	164
6	脈々と受け継がれる学校林	168
7	地域へ飛び出し、地域に学ぶ子どもたち	172

参考文献	178
------	-----

『堀金の宝』 関連地図



本書で紹介する主な社寺・史跡・自然のみどころスポット

- ①岩原城跡 ②田多井城跡 ③安楽寺跡 ④砂渡山神社 ⑤田尻不動堂 ⑥田多井観音堂
 ⑦自性寺 ⑧小田多井八幡神社 ⑨田多井賀茂神社 ⑩新屋の馬頭観音講
 ⑪国営アルプスあづみの公園 ⑫県営烏川溪谷緑地

1 堀金の大地の形

堀金の地形

堀金は安曇野市の西に位置し、その大部分が烏川扇状地の上にある。田尻区から上堀区、下堀区にかけては梓川の浸食を受けた扇状地段丘崖が見られる。扇町区、倉田区、岩原区と西に進むにつれて土地の傾斜は急になり、国営アルプスあづみの公園がある岩原区の間際は棚田、段々畑が広がる。山地は手前から角蔵山（一一六三・六メートル）、鍋冠山（二一九四・二メートル）と徐々に高くなり、そのさらに西側に大滝山（南峰で二六一四・六メートル）や蝶ヶ岳（二六七七メートル）、常念岳（二八五七メートル）といった北アルプスが連なる。

烏川扇状地 その形状

常念岳と蝶ヶ岳の山間の清流が集まり、里に流れ出る烏川であるが、その過程で大量の土砂を削り運搬してくる。そうしてできた地形が烏川扇状地である。堀金を真上から見るとその大部分が烏川扇状地の南半分にある。扇頂は本沢と崩沢からの流れが合流する地点、ちょうど三股登山補導所から一歩ほど下流の地点にまで達する。扇端は長年の



堀金を東側上空から見た写真。若干だが烏川扇状地の傾斜が分かる。写真山間から右側に伸びている緑は烏川の河畔林である。左下から右側に向かって拾ヶ堰が伸びている

浸食作用により分かりづらいが、小田多井区から上堀、下堀区を通り北へ弓なりに伸びている。扇状地の南側は田多井公民館付近から流れる深沢を境に黒沢川扇状地と接している。同様に扇状地の北側は穂高の富田、豊里区で中房川扇状地と重なり合っている。

烏川扇状地も周辺の扇状地と同じように、扇中央付近で表流水が地下に浸透し伏流水となる。地下に浸透した水の流れる穂高川近辺や豊科の重柳区、三川合流部などで湧水として湧き出ている。また、現在は三郷の黒沢川のような典型的な末無川の形状ではないが、扇状地の上を流れる河川の性質上、昔は大雨時の水害が頻繁に発生したと想像できる。

烏川扇状地は扇状地面が古いものから四つに分かれている。最も古い扇状地面には穂高カントリークラブやほりでーゆー四季の郷がある。角張った礫の含まれる礫層で形成されており、当時の烏川が急峻な地形に囲まれていたことがうかがえる。またこの扇状地面の形成された更新世後期（数万年前）は御嶽山などの火山の活動期であったことから、上部が風化した火山灰によるローム層（赤土）に約三分之二に覆われている。二番目に古い扇状地面は岩原地区から南東部に向かって烏川扇状地の南側全体を覆っている。須砂渡付近が最高地点であり、同地点で最も古い扇状地面より三〇センチほど低い。勾配はより緩やかになり、形成する地



2つ目に古い扇状地面と3つ目に古い扇状地面の境は急斜面になっている。写真は黄色丸の地点で北側を撮ったもの

層に含まれる砂礫は小さい。砂混じりの火山灰土や上を薄く覆うローム層の存在から当扇状地面の形成時は火山活動

による降灰があったと考えられる。三番目に古い扇状地面は穂高の塚原地区から柏原地区方向へ広がっており、ローム層はなく表面に砂礫が多く露出している。一番新しい扇状地面は川窪沢川の合流付近から穂高川との合流部までほとんど烏川に沿って広がっている。現在の河床礫と同等の礫からできている。

また、烏川の浸食作用による段丘崖を、烏川橋付近から上流側で特に明瞭に見ることができる。この周辺には複数の段丘崖が存在しており、その落差を利用して、烏川上流に存在する三ヶ所の水力発電所が稼働している。例えば、第一発電所では一〇〇㍎、第二発電所では五〇㍎ほど水が落下している。

堀金の地層

堀金の大地はほとんどが更新世に堆積した第四紀層であり、平坦地の地層には主に三つの特徴的な層が見られる。最も浅い層は地表から三一〜三八㍎までの砂礫層であり、丸みを帯びた石を含み、部分的に薄いローム層を挟む。その下、深さ八五〜一一六㍎までの部分には厚い粘土の混じった礫層がある。間には薄い砂礫、ローム、粘土混じりの砂、小砂利の各層が挟まれている。さらにその下の一四〇㍎まで砂を主体とした層があり、粘土や小砂利が混



前常念岳の手前のガレ場から東側を見た。市の西側の山々は標高 2,000 ～ 3,000m 級になる。この急峻な地形が大きな烏川扇状地や落差のある段丘崖を形成した

じっている。これらの地層を形成する礫は常念岳や蝶ヶ岳といった北アルプスから流れてきたものであり、より下側の基盤岩を形成している花崗岩かこうや堆積岩と同じものと考えられる。

産業技術総合研究所の活断層データベースによると、山

間は角蔵山の西側を南北に断層が走っている。穂高の富士尾山方面からは常念岳断層（鹿島―満願寺断層）が伸び、中房温泉方面からは浅川山を通して信濃坂断層が伸びている。信濃坂断層は須砂渡発電所の南東側、ほりでーゆー四季の郷からは南西側の斜面で常念岳断層にぶつかり、以降南側は常念岳断層が北黒沢と南黒沢の合流付近に向かって伸びている。

堀金の岩石

この後の項でも触れるが、北アルプスは常念岳山頂の約一・四億南側を境に、北は約六四〇〇万年前の火成岩、南は約一億五〇〇〇万年前の堆積岩で形成されている。火成岩のエリアからは花崗岩が、堆積岩のエリアからは泥岩、砂岩、チャートなどが削り出されてくる。二つの岩相の境界では火成岩と堆積岩が接触してできた接触変成岩（ホルンフェルス）も見られ、同様に削り出されてくる。ただ、堆積岩の分布域が浅川山周辺まで張り出しているため、烏川流域は大部分を堆積岩が占めている。その河川敷には前述のような有色の岩石が多く、黒っぽい河川敷が「烏」川の由来になっている。なお、この堆積岩は付加体と呼ばれ、明科や豊科の大口沢区など市の東側で見られる堆積岩と性質が異なる。市の東山は約二五〇〇万年前のフォッサマダ

ナの海でできた堆積岩からなるが、西山で見られる付加体は形成過程で地中の高圧・高温状態に晒されており、東山の岩石よりも比較的硬い岩石になっている。また、大洋の海底に降り積もった有孔虫の遺骸から形成されるチャートが含まれていることも特徴の一つといえる。チャートについては本書発刊の前年に発刊された『三郷の宝』に詳しい記述があるため、そちらも一読いただきたい。

（高山裕司）



穂高川と烏川の合流地点。上（北）から流れてくる穂高川の河床の白さと比べて、烏川の河床が黒味を帯びていることが分かる

2 国営アルプスあづみの公園と周辺の自然

自然観察の入門の場

国営アルプスあづみの公園は、田園文化ゾーンと里山文化ゾーンの二つのエリアに分かれており、田園文化ゾーンは整備された園路や芝生でカジュアルに生きものの観察が楽しめる場となっている。特にフジバカマに集まるアサギマダラは呼び物になっており、シーズンになるとたくさん見物客が訪れる。そのほか、池では赤トンボの仲間を中心に様々なトンボが観察でき、随所に流れる小川ではオニ



フジバカマで吸蜜するアサギマダラ



赤トンボの一種 ミヤマアカネ



自然観察会



オオルリシジミ放蝶イベント

ヤンマのオスたちが縄張り争いを繰り広げ、雑木林では樹液酒場が一夏のにぎわいを見せる。環境教育や自然体験の場としても活用されており、中でも毎年開催されるオオルリシジミ関連のイベントは、今や全国で四ヶ所にしか残っていない絶滅危惧種オオルリシジミを間近で観察し、その生態や保護について学ぶことができる貴重な機会となっている。

生きものと共存できるよう計画的に整備された公園ではあるが、中には意図しない場所に棲み着く生きものもい

里山文化ゾーンに残る棚田の自然

里山文化ゾーンには開園以前からの棚田や岩原堰が保存されている。水田跡は良好な湿地となっており、ヤマアカガエルやアカハライモリのほか、多くの水生昆虫たちの姿

きたハエをせっせと巣穴に運び込んでいた。本来は河川敷や砂浜などの砂地に生息するが、近年は公園の砂場で確認される例が増えてきている。良好な砂地が減少しているため、人工的な環境に活路を見出そうとしているのだろう。直接掴んだりしない限り刺されることはない。公園などで見つけた場合は温かく見守りたいものである。



獲物を抱えながら穴を掘るニッポンハナダカバチ。田園文化ゾーンのマシユマロドームを訪れた時、周辺に整備された砂場で小さなハチが飛んでいることに気が付いた。砂地に生息するニッポンハナダカバチである。ミツバチやスズメバチのような社会性はないが、砂地に掘った穴で幼虫を育てるといって一風変わった習性を持つ。この日も狩って



獲物を捕えたノスリ

水田跡に造成されたビオトープ池は、もともと伏流水の染み出しが作る小さな池だった。アカハライモリなどの水生生物が暮らしやすいよう公園職員が手作業で泥上げや草刈りなどの管理を行っていたが、令和二年（二〇二〇）、市レッドデータブックで当時絶滅危惧Ⅰ類に選定されていたクロゲンゴロウが生息していることが分かり、翌年ビオ



アカハライモリ

も見られる。またノスリやフクロウなどの猛禽類も現れ、運が良ければ狩りの場面に遭遇することもあるかもしれない。里山文化ゾーンは一見何もない場所に思えるかもしれないが、水田環境を好む多種多様な生きものに出会える場所となっている。



ゲンゴロウ（左）とクロゲンゴロウ（右）。どちらも市内では危機的状況



タイコウチ

トープ池として整備された。クロゲンゴロウの市内での記録は実に約九〇年ぶりであった。その後もクロゲンゴロウは安定して生息が確認されており、最近ではゲンゴロウ（ナミゲンゴロウ）が飛来し、幼虫や新成虫も確認された。ゲンゴロウは全国的にクロゲンゴロウよりも希少で、安曇野市内でも近年急激に数を減らして

いる。そのほかにもコオイムシやタイコウチ、ミズカマキリなど多様な水生昆虫が高密度に生息しており、ホットスポットと言うべき池となっている。生きものと触れ合える水辺としても貴重な場所であり、年に数回行われる観察会には毎回多くの参加者が集まる。

植物で特徴的なものは、早春に咲く「春植物」たちである。四月初旬には先陣を切ってアマナが開花する。枯野に紛れて遠目には花が咲いていることさえ分からないが、近づいてみると白いチューリップ状の花が一面に咲き誇り、見事というほかはない。昔から山菜として食用にされ、甘味があるところから「甘菜」の名になったが、今では多くの都県で希少種となっている。その他にもキバナノアマナやヤマエンゴサク、アズマイチゲなどの群落が続々と開花していく。

一方、夏から秋にかけても清楚な草花が見られる。ツルフジバカマはつる性のマメ科植物で、小花を集めた紫色の花を咲かせる。近年は外来種のアノマリスが取って代わってしまい、ほとんど見る機会がなく



アマナ群落



アズマイチゲ



ヤマエンゴサク



ツルボ群落（圃場整備前）

なっている。このツルフジバカマを食草としているのが、ヒメシロチョウと昼飛性の蛾、ベニモンマダラである。両種ともツルフジバカマの減少に伴って、市内ではほとんど見かけられなくなっており、里山文化ゾーンが最後の砦のような存在である。ブラシのようなピンクの花をつけるのがキジカクシ科のツルボで、園内



ツルフジバカマ



ヒメシロチョウ



ベニモンマダラ

に少なからず自生している。国営公園の開園前、近くの水田にはツルボが一面に咲く畦道があった。その後、圃場整備の範囲に掛かったため、このツルボたちは国営公園内に移植されている。

こうした水田環境は全国的に減少しており、その生物多様性保全が課題となっている。県内随一の米どころである安曇野も例外ではなく、市内の水稲作付面積は過去五〇年間で半減している。また稲作の近代化によって生きものが住みにくい環境になってしまった水田も多く、市のレッドデータブックには水田環境を好む動植物が名を連ねている。



「再生」の好例となったビオトープ池

人間が暮らしていく上で開発が避けられないのであれば、豊かな生物多様性が残る環境を維持したり、代替地として再生、あるいは創出したりすることが必要ではないだろうか。広大な水田環境と共に多くの生きものが残る里山文化ゾーンは、その答えの一つとして今後ますます注目を集めるだろう。

「安曇野」の名がつけられた植物たち

その他に、公園の周辺には安曇野で発見され、学名にも和名にも安曇野の名を冠した植物がある。どれも分布が限られており、県や市の絶滅危惧種にも選定されている。自生しているところは周辺環境とともに大切にしたい植物である。

アズミノヘラオモダカ

Alisma canaliculatum var. *azuminoense*

一九八四年に旧豊科町で発見され、ヘラオモダカの変種として発表された植物。ヘラオモダカはため池などで普通



アズミノヘラオモダカ（オモダカ科）



アズミトリカブト（キンポウゲ科）

に見られる植物だが、本種はヘラオモダカに比べて花茎がかなり低く、花序が密集していることが特徴である。

アズミトリカブト *Aconitum azumiense*

一九八八年頃、堀金村誌編纂のための植物調査の折に採集され、新種として発表された植物。発見当時から分布が限られていた上に、近縁種との間に交雑を起こしやすく、現在はほとんど見ることができない。

アズミノナライシダ *Archniodes × azuminoensis*

一九九八年に旧堀金村で発見されたシダ植物。ホソバナライシダとシノブカグマの二種を親とする雑種とされる。この二種は県内に広く分布するが、雑種は非常に少なく、安曇野市内でしか確認されていない。

(斉藤雄太、那須野雅好、松田貴子)



アズミノナライシダ（オシダ科）
の標本（豊科郷土博物館蔵）



国営アルプスあづみの公園堀金口付近から北方向を望む

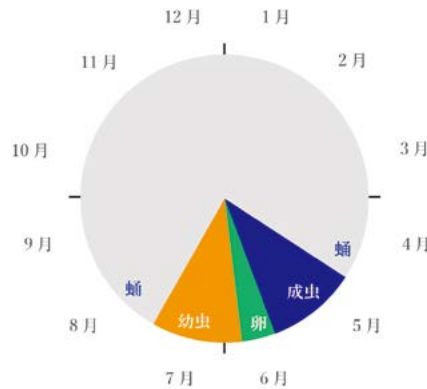
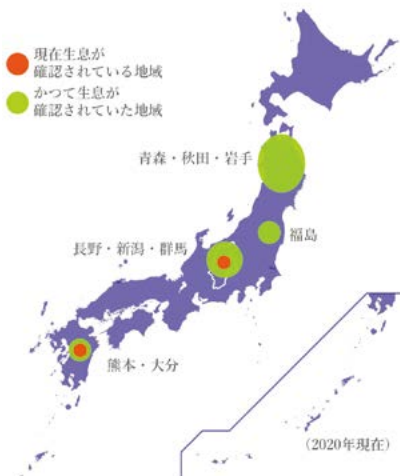
3 草原の青い星 オオルリシジミ

オオルリシジミとは

オオルリシジミは、その名の通りルリ色の翅が美しい大型のシジミチョウである。その本州亜種は、青森、岩手、福島、東北地方と長野県を中心とする中部・関東地方に分布していたが、東北地方は一九七〇年代までに、中部地方も安曇野を含む長野県内三ヶ所を除いて絶滅したとされる。このほか、九州の阿蘇・九重山系の火山草原にオオルリシジミ九州亜種が分布している。

オオルリシジミは年一回、五月から六月にかけて発生する。幼虫はマメ科の多年生草クララの花つぼみだけを食べて育ち、六月から七月上旬には土の中に潜って蛹になる。そして夏、秋、冬を蛹のまま過ごし、初夏に土の隙間から這い出て翅を広げる。田淵行男は著書の中でオオルリシジミを「草原の青い星」と呼び、その青い輝きが失われることを嘆いている。

オオルリシジミが絶滅寸前まで追い込まれた背景には、幼虫の食草となるクララの減少と草原環境の荒廃がある。農耕を牛馬の力に頼っていた時代は、飼料を確保するため



オオルリシジミの生息地と生活環



常念岳を背景に飛ぶオオルリシジミ

の草地があちこちにあり、そこにはクララがよく見られたものだった。それが時代の流れの中で失われ、オオルリシジミも一蓮托生の運命をたどることになる。平成三年（一九九一）を最後にオオルリシジミは安曇野から姿を消したのである。

オオルリシジミを育んだ 安曇野の原風景

オオルリシジミの生息環境とはどのようなものだったのだろうか。写真（左下）は平成三年春のオオルリシジミ生息地を含む岩原地区の水田風景である。左側の岩原堰には、常念岳や蝶ヶ岳から流れ出る烏川から引水された冷たい水が流れている。そのため堰の近くから田に直接水を取り入



岩原堰と「ヌルメ」（平成3年）



安曇野最後とも思われたが…（平成2年（1990））

れるのではなく、上流で取水し、「ヌルメ」と呼ばれる細い水路を通して水を温めてから田に通していた。このため田の周りには広い畦や土手が造られ、そこにクララを含む草原植生が形成されたのである。

クララは、「ウジゴロシ」の別称が残るように殺虫効果があり、暮らしに欠かせない有毒植物であった。人々はクララを水田や堰の周りに植え、生活に利用しており、このことがオオルリシジミの生息に繋がっていた。オオルリシジミは人の暮らしと共に生きてきた蝶といえるだろう。

絶滅を免れたオオルリシジミと保護団体の設立



人工飼育の様子

一度は絶えたと思われた安曇野のオオルリシジミであるが、平成六年（一九九四）に旧堀金村の工場団地の一角で再発見された。翌年には関係者が「安曇野オオルリシジミ保護対策会議」を設立し、保護活動が始まった。平成一一年（一九九九）には、国営アルプスあづみの公園計画地にオオルリシジミの保護区が設置された。

この場所は以前オオルリシジミが生息していた場所であり、生息環境や幼虫の食草であるクララがそのまま残っていたのである。対策会議では人工飼育の技術を取り入れ、たくさん蝶を育てることに成功した。保護区へ放蝶したところ、多くの蝶が乱舞する光景がよみがえった。

難しい保護活動

ところがこの「放蝶」の取り組みはすぐに困難に直面した。たくさん蝶が飛び、交尾、産卵も順調で、クララの穂先には多くの卵が確認されたにもかかわらず、終齢に至るまでにほとんどの幼虫がいなくなってしまったのである。アシナガバチなどの眼に見える天敵以外の要因が考えられたため、信州大学の村寛志教授の研究室に依頼して、減少要因を特定する研究が進められた。その結果、メアカタマゴバチによる卵への寄生率が高く、その割合は六〜七割に達していたことが判明した。最善策と思われる放蝶には「天敵を引き寄せてしまう」と



春先に行われる保護区の野焼き

いう思わぬ副作用があったのである。その後、「野焼き」が天敵に対して有効であるという研究結果を得たことにより、保護区で継続した野焼きが行われるようになり、安定した自然発生に繋がっている。

安曇野市初 動物の天然記念物指定



交尾するオオルリシジミ

安曇野市は、令和四年（二〇二二）三月に「安曇野のオオルリシジミ」を動物で初めて天然記念物に指定した。さらに特筆すべきは、オオルリシジミの「取り扱いマニュアル」ともいうべき「保存活用計画」とセットでの指定となった事である。天然記念物に指定することによりオオルリシジミへの関心を深める契機とし、この計画の中に保存と活用の取り扱いを明文化した。計画には天然記念物の何を守ればよいか（本質的価値）を明らかにし、オオルリシジミだけでなく食草のクララを含めた草原環境の保全を行うことがうたわれている。良好な草原環境の維持は、オオルリシジミだけでなく草原の生物多様性にも

繋がるのだ。

市民と協働で守る天然記念物に

オオルリシジミは人の暮らしとともに生きてきた蝶であり、この蝶のことを学んでいくと先人の暮らしや安曇野の原風景にまでたどり着く。現在、オオルリシジミは市民との協働による保護活動が活発に行われていて、堀金地域の皆さんが中心となり、クララの苗の配布やパトロール、啓発活動が行われている。近年は保護区の外でも発生が確認されるなど、協働の成果が出てきている。

これからも「草原の青い星」が安曇野に舞い続けることを願ってやまない。
（那須野雅好）



市民活動によるクララ苗の配布

県営烏川溪谷緑地



溪谷緑地でくつろぐ人々

県営烏川溪谷緑地（以下「溪谷緑地」）は烏川を中心に堀金・穂高地区にまたがって設置された県営の都市公園である。現在は水辺エリアと森林エリアを合わせた約五〇鈔が供用区域となっている。この公園の特色は、北アルプスを源流とする烏川溪谷の多様で豊かな自然環境を体験できることにあり、全国的にも稀な自然観察のための都市公園である。特に、堀金地域にある水辺エリアには管理・運営の基地となる環境管理棟があり、スタッフが常駐している。烏川の旬の自然情報の発信や「からのすの学校」などの自然講座の開催、子どもたちを中心とした自然観察会の開催など、年間を通じて多様なプログラムを提供している。

溪谷緑地は野鳥の宝庫

溪谷緑地は野鳥の観察に適しており、特に夏鳥が渡来する時期になると多くの野鳥愛好家がカメラを携え



オオルリ



キビタキ

てやって来る。お目当てはオオルリやキビタキ。両種とも美しい色彩を持つ野鳥で、新緑を背景に思い思いにシャッターを切る。また、オオルリの美しいさえずりが溪谷に響き渡るほか、ウグイス、コマドリが姿を見せるため、運が良ければ「日本三鳴鳥」全てに出会うことも夢ではない。園内を流れる烏川と、ビオトープの池や水路では、水辺に生息するミソサザイとカワガラスを見ることができ。ミソサザイは最も小型の鳥類の一種で、地味な色合いも手伝って見つけるのもひと苦労であるが、小さな体から出る

とは思えない高音のさえずりが居場所を教えてくれる。カワガラスは烏川の岸に沿って歩き、時には潜水しながら川底に生息するカワゲラなどの川虫を探す姿を見ることができる。またかわいい顔で人気のエナガや、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマガラなどのカラ類が年間を通じて生息している。ゴジュウカラは「左官鳥」とも呼ばれる壁塗りの名人で、園内のキツツキの穴などに泥土を運び込み、巣を整える様子も観察された。鈴生りのエゴノキの実に飛びつき啄むのはヤマガラで、警戒心が薄いため間近で観察できる。その様子はまるでお菓子を運んでいるようにも見える。

マヒワやヤマドリ、キツツキの仲間は冬場に目立つ鳥で



ミソサザイ



カワガラス



ゴジュウカラ



ヤマガラ

ある。マヒワはハンノキの種を好んで食べる。雪の上に食べ残した種が無数に落ちていたので、マヒワの来訪を知ることができると言われる。ヤマドリは「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」と百人一首に詠まれた鳥で、雪の上を走る姿を見るにつけその尾羽の長さを実感するところとなる。



エナガ



ヤマドリ

また、溪谷緑地でムササビが保護されたことがあった。「ドビー」と名付けられたそのムササビは一時、溪谷緑地のアイドルとなったがその後自然



マヒワ

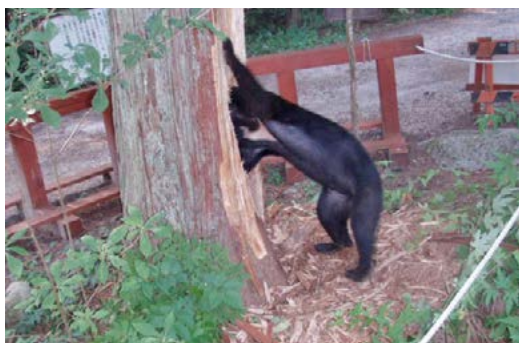
稀にツキノワグマも姿を見せる。一五年ほど前のこと、スギの洞の隙間に営巣していたニホンミツバチの巣を見つけ、その穴を広げるべく周囲を破壊する様子が観察された。近年、サルやクマは人と近いところで活動する傾向があるので注意が必要である。

活動する哺乳類

多種多様な昆虫

四月に入ると溪谷緑地にも遅めの春がやってくる。ダンコウバイやキブシなどが先駆けて黄色の花を咲かせる。特に園内のキブシには成虫で越冬したチョウが待ちかねたようにやってきて蜜を吸う。タ

に放たれている。



ツキノワグマ



ニホンザル



ムササビ



クジャクチョウ

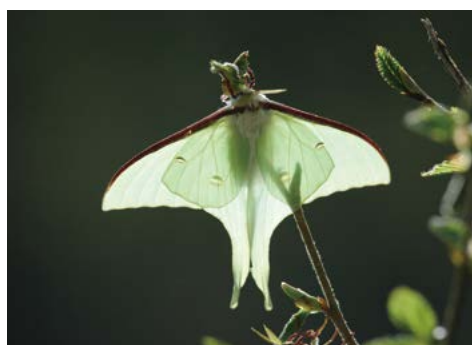


ルリタテハ

テハチョウの仲間が多く、クジャクチョウはすっかり色あせた姿で越冬の厳しさを感じさせる一方、ルリタテハは越冬前と変わらぬ美しい瑠璃色を披露する。

初夏からは多くの種類の昆虫が見られる。オナガミズアオは幼虫がハンノキで育つヤマユガの大型種で、透き通るような水色の翅が美しい。なかなか見られない希少種でもある。溪流沿いの環境を好むアオバセリも美しさでは引けをとらない。幼虫の特徴的な頭部の模様は、天敵を遠ざけるために毒をもつテントウムシに擬態していると考えられている。コムラサキは、ヤナギ類を食草とする夏の渓谷緑地を代表するチョウである。見る角度によって青紫色の輝き方が変化する「構造色」を持つため、子どもたちに

見せると驚きの歓声があがる。子どもたちが驚く虫と言え、ハイイロセダカモクメもそのひとつだ。ハイイロセダカモクメはヤガ科のガで、成虫は取り立てて特徴的というわけではないが、特異なのは幼虫である。幼虫はヨモギを主な食草としているが、その姿はヨモギの花そのものと言っているほどそっくりなのである。自分がヨモギに似て



オナガミズアオ



コムラサキ



アオバセリ

いるかどうかなど確かめようがなく、ましてややり直しができるわけもないのに、どうしてここまで似せることができるのだろうか。昆虫の多様な進化の一端を教えてくれる存在である。

渓谷緑地は水生昆虫の宝庫でもある。川底を網ですくえば、食用にもなる「川虫」のカワゲラやトビケラの幼虫が顔を出す。水辺エリアを代表する川虫のひとつにヨツ



ヨツメトビケラ

メトビケラがいる。幼虫は池の底で砂粒を丹念に綴った筒状の巣を造り、他の小昆虫などを食べて育つ。六月になると四枚の翅に白や黄色の斑紋を描いた成虫が群れて飛ぶ。トビケラはチョウやガと共通の祖先から進化したといわれるが、たしかに飛ぶ姿はチョウそっくりである。



ハイイロセダカモクメ

敷地内のビオトープでは、緩やかな細流に生息するオニヤンマや、樹林に囲まれた湿地を好むタカネトンボが占有飛行する姿を観察することができ。タカネトンボの胸部はまばゆい緑色を帯びた金属光沢でおおわれており、その美しさに目を奪われる。



タカネトンボ

環境教育の場

渓谷緑地では敷地内を流れる溪流を活用した水辺観察会が盛んに行われている。対象は主に小さな水生昆虫であるが、時折ヨシノボリ類などの魚がとれることもあり、宝探しのような面白さがある。

カゲロウ類の幼虫などの水生昆虫や貝類などは底生動物と呼ばれ、水質によって生息する種類が異なることから、どんな底生動物が生息しているかを調べることで、その川の水質がわかる。例えば、渓谷緑地内の溪流で多く見られるヒラタカゲロウ類は、有機物が少ない河川等を好み、流れのない淀んだ池などでは見られない。反対に、有機物の



水辺観察会の様子



ヒラタカゲロウ類の幼虫



必要な道具はすべて揃っている

多い場所を好むタニシ類は溪流では見られない。このような性質を利用した調査は全国各地で行われている。また、底生動物は肉食魚や小型肉食動物の餌としても重要であり、河川生態系の屋台骨とも言うべき存在でもある。水辺観察会を通してこうした生きものの存在を知ること、河川環境や河川にまつわる生態

系について学ぶことができるのである。市内でこうした観察会を安全に実施できる場所は極めて少ない。

環境管理事務所に併設されているレクチャールームには、主に敷地内で回収された動物たちを活用した剥製や標本などが所狭しと並べられており、地域の自然環境や野生生物について学ぶ絶好の場所となっている。特に鳥類の展示は充実しており、同じ種類の剥製と骨格標本が並んで展示されている様子は他にあまり例がない。そのほかにも様々な趣向が凝らされているので、時間を忘れて楽しむことができる。図鑑などの資料も充実しており、県内有数の野生生物資料室と言っても過言ではないだろう。

(那須野雅好、斉藤雄太)



レクチャールーム

5 北アルプスの自然史

安曇野の山岳環境と景観

北アルプスの地形

堀金から見た西山は通称前山と呼ばれる標高一〇〇〇級の山々とその後ろに控える二〇〇〇〜三〇〇〇級の北アルプスからなる。特に常念岳は烏川の上流に位置しており綺麗に尖った象徴的な形状をしている。

前述したように、常念岳山頂の少し南側を境に、北は花崗岩、南は堆積岩で形成されている。常念岳周辺の地質は形成過程が二段階に分かれている。

一つ目は常念岳の南側に広がる堆積岩で、約一億五〇〇〇万年前に大陸側から大洋に流れ出た砂岩や泥岩が、大陸プレートに押し付けられるようにして形成された。これは付加体と呼ばれるものである。常念岳周辺から上高地方面へと広がっていく付加体は「美濃帯」と呼ばれる地質帯に属している。堆積岩の中にはチャートや石灰岩といった大洋由来の岩石も含まれている。

二つ目は約六四〇〇万年前、先ほどの堆積岩の地層中に大量のマグマが上昇し貫入した過程である。上昇してきたマグマはマグマだまりを作り、それが冷えて常念岳から北

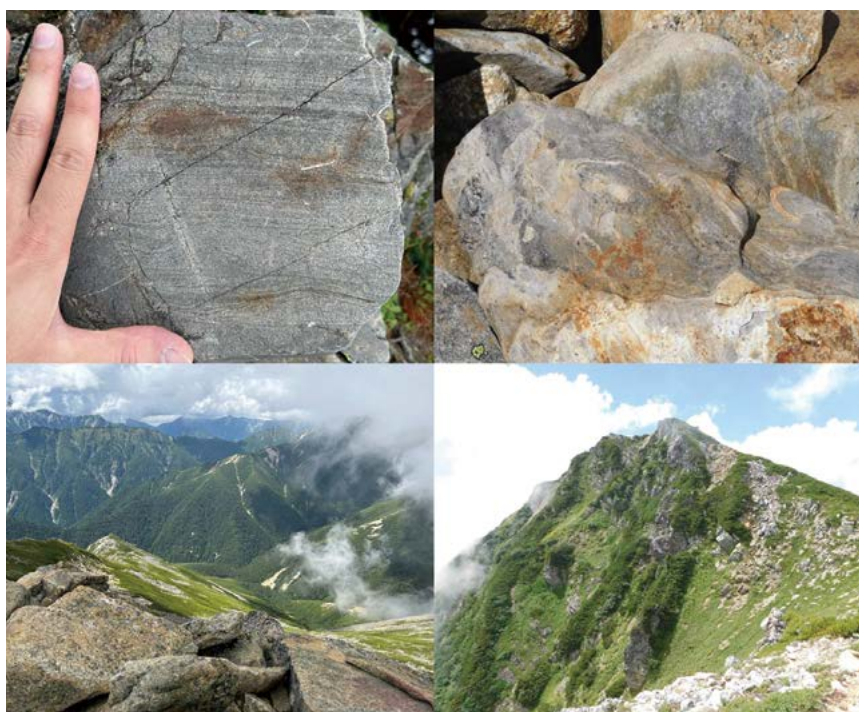


(右上) 前常念岳の花崗岩。(左上・左下) 蝶ヶ岳の堆積岩。(右下) このような四角形の一边が大きい割れ目を「方状節理」という

側に広がる花崗岩になった。常念岳山頂付近ではマグマがゆっくり冷えて固まることで形成された割れ目の大きな四角い花崗岩を見ることが出来る。この他に特徴的な岩石として、マグマ貫入時に砂岩や泥岩が高温に晒されることで変成岩に変わった「ホルンフェルス」が見られる。ホルンフェルスはドイツ語で「牛角のように硬い岩」という意味であり、高温の作用により変成前よりも硬い岩石に生まれ変わっている。このホルンフェルスに山頂付近が覆われていることで、下部の浸食されやすい泥岩や砂岩が守られ、今日の常念岳は美しい三角形になっているのである。

他に特徴的なこととして、北アルプスは稜線の西側斜面が緩やかで東側斜面が急な崖になっている箇所が多い。これは「非対称山稜」と呼ばれ、冬の偏西風の影響や日射量の違いによるものである。偏西風によって風上の西側斜面の雪は吹き飛ばされ、風下の東側斜面に積もる。これにより東側斜面は雪解け水が多くなり、より浸食されやすくなる。浸食で急崖になったことで浸食速度はさらに早まる。西側斜面が凍結破砕作用（岩の割れ目内の水分が凍ることで岩を破砕する作用）によって、大量の岩屑に覆われてなどらかになっていることも東西斜面の傾きの違いを明瞭にしている。

また、稜線に並走するように、斜面上に長さ数十メートルから数百メートルの窪地が見られることがあり、「二重山稜」と呼ば



(右上・左上) ホルンフェルス。ラメをまぶしたような光沢感をもつものもある。
(右下) 常念岳山頂の東側の急崖。(左下) 常念岳山頂の西側は東側より傾斜が緩やかである

れている。この成因にはいくつかの説がある。ひとつは、斜面上に残った残雪が融けて地中に浸透する際に、土壌が運び去られたことで生じた窪地であるという説。そのためこの地形は、「雪窪」や船底で押し潰されたような形から「舟

窪」とも呼ばれる。また他に北アルプスの急激な隆起により、山体が中心部に落ち込み重力断層が生じたことによる断層崖であるという説もある。

いずれにせよ、山岳のスケールの大きさを実感できる地形である。

雪解けとともに開花する高山植物たち

標高およそ一三六〇以上の三股から蝶ヶ岳を目指して歩い

てみよう。梅雨の時期の登山は天気悩まされるが、高山植物たちが雪解けとともに開花していく様子を観察することができるとがでる。

まめうち^{だいち}平周辺の登山道沿い、そこかしこで星のような花を咲かせているのはオサバグサ。日本固有の植物で、葉はシダ植物を思わせるような羽状に切れ込んだ形をしており、これを機織り機のおき（箴）に見立てて名付けられた。蝶ヶ岳〜大滝山（霞沢岳まで）の地質は堆積岩で構成されており、なだらかな稜線で窪地も点在する。窪地には雪が



オサバグサ（ケマンソウ科）



キヌガサソウ（シュロソウ科）



ミツバオウレン（キンポウゲ科）と
イワカガミ（イワウメ科）

遅くまで残るため土壌水分が高くなり、時には湿地や池が形成されている。比較的湿ったところには、キヌガサソウやサンカヨウ、ハクサンイチゲ等の高山植物が群落をつくっている。このように高山植物は標高や地形によって雪解けのタイミングが異なり、多様な植物の開花がみられることも大きな魅力である。

稜線沿いではかわいらしいミツバオウレンの群落も見られる。ただし、六〇七月の登山は積雪状況によって登山道のコンディションは大きく変化する。十分注意して進もう。

まめうち平の倒木更新

蝶ヶ岳に向かう登山道、標高およそ一九〇〇mに位置するまめうち平は「平」という名の通り緩斜面で、風当たりも弱いため、常緑針葉樹のシラビソやオオシラビソが大きな樹林を作っている。

近年、まめうち平ではこうした針葉樹の大径木の倒木が数多く見られるようになった。根ごと倒れた樹木を観察すると、意外と根が浅い。このため樹高が高くなり、強風によって倒れやすくなっているのではないかと考えられる。さらに大きな樹冠を形成しているために、木が倒れると一帯が明るくなり、オサバグサやゴゼンタチバナなどの林縁の植物がにぎやかに咲きはじめている。また周辺ではシラ

ビソやオオシラビソの幼樹が勢いを増して成長しているようすを観察することができる。

まめうち平でひと休みしながら、亜高山帯の天然林の倒木更新を観察してみてもいいだろう。



まめうち平の倒木更新のようす

ハイマツ帯の働き者

標高約二五〇〇以上の地域を高山帯と言い、寒さや強風、乾燥といった過酷な環境に耐える生きものたちが独特の生態系を形成している。中でも地を這うように枝を伸ばすハイマツはその植生の代表であり、その分布域はハイマツ帯とも呼ばれ、ライチョウをはじめ多くの生きものを支えている。

星空のような模様からその名が付いたホシガラスはハイマツの実を貯える習性があり、晩夏には松ぼっくりを運ぶ姿が至る所で見られる。昆虫なども食べる雑食性の鳥であるが、なぜハイマツの実を貯えるのだろうか。



ハイマツの実を運ぶホシガラス

ホシガラスはヘビなどの天敵を避けるため、まだ深い雪に閉ざされている三月頃に巣を造り始めるが、そのような時期には餌も少ない。そこで役に立つのが夏の間に貯めておいたハイマツの実というわけだ。こうした習性はハイマツにとっても利点がある。ハイマツの実はいくつかに分けて貯える

られるが、中には忘れられてしまうものもある。そうした実から芽吹くことで、ハイマツも分布を拡大することができるのである。豊かなハイマツ帯の環境はホシガラスによって保たれていると言えるだろう。

遺されたチョウの楽園

安曇野は環境の多様性に富み、多種多様なチョウ類が生息するが、常念岳・蝶ヶ岳一帯の高山帯でも高山蝶をはじめ様々なチョウに出会うことができる。

高山帯の春は遅い。六月下旬、ようやく姿を現すのはタカネヒカゲである。国内では北アルプスと八ヶ岳にのみ生息し、北アルプスでは比較的広範囲で見ることができ、少々地味かもしれないが、ライチョウと似通っている、たとえば愛着を持つ人も増えるかもしれない。

この色あいは、砂礫地を主な棲み処とする彼らにとっては保護色として機能するのである。タカネヒカゲは



ハイマツ仙人（タカネヒカゲ）

に耐えるように石の上などでじっとしていることが多いが、近づくとも敏感に反応して素早く逃げるため、なかなかじつくりと観察させてくれない。このような振る舞いも実に仙人らしい。

季節の歩みが遅い高山帯も、七月後半ともなると現れるチョウの種類も増えてくる。山地に住むタテハチョウの仲間やミヤマカラスアゲハのほか、旅をするチョウとして知られるアサギマダラ、山頂で占有行動をするキア



タカネヒカゲの生息環境

一生を通して標高二五〇〇以上でのみ生息する生粋の高山蝶で、幼虫は成虫になるまでに二回越冬し、足掛け三年かけて成虫になる。気温が低い高山帯では幼虫が成長できる期間が短いめだろう。田淵行男はこのチョウに畏敬の念を込めて「ハイマツ仙人」との称号を贈っている。身に纏うもの

を選ばず、過酷な環境下に身を置くその生息は、まさに仙人を思わせる。あまり飛び回ることではなく、風



ミヤマモンキチョウ



登山靴に止まるベニヒカゲ

ゲハの姿も見られるようになる。風で吹き上げられてきたのか里山に住むチョウたちも入り交じり、おおよそ八月末にかけてひと時の賑やかなシーズンを迎える。登山者の中には、人懐っこいベニヒカゲの歓迎を受ける人もいるかもしれない。そんな中、一際目を引くのはミヤマモンキチョウであろう。平地で見られるモンキチョウと近縁でよく似た姿をしているが、くつきりとしたピンク色の縁どりで容易に判別できる。よく見ると触角から頭部、脚先までピンク色を纏っており、その可憐な姿から田淵行男は「山の娘」と呼んだ。国内では北アルプスと浅間山付近のみに生息し、

安曇野市内では概ね標高二五〇〇以上の花畑などに颯爽と現れ、オスがメスを追い掛け回す求愛行動や吸蜜する姿を目にすることができ、時には吸蜜を争ってハチを追いかうこともあるおてんば娘である。

山の紋章・雪形

山に積もった雪が解けるにしたがって浮かび上がる模様を人物や動物などの形に見立てたものを雪形ゆきがたと言う。里の人々は雪形から季節の移ろいを読み取り、農作業を始める目安としてきた。雪形が山の名前の由来となったとされる例も多い。

安曇野で見られる雪形でも最も親しまれているのは常念岳に現れる「常念坊」であろう。常念坊にまつわる民話が複数存在していることからその人気ぶりがうかがえる。雪形という言葉が全国に知られるきっかけとなった『山の紋章・雪形』では、托鉢をする常念坊の民話が紹介されている。ほかに、五合徳利を持って大量の酒を求める民話も有名である。

蝶ヶ岳に現れる「白い蝶」は、雪が解けて中央に黒い筋(胴体)が現れることで完成する。里の人々はこれを「蝶の背が割れた」と言い、田植えの目安にしたという。雪形が現れる場所は、蝶ヶ岳山頂直下の大滝山への分岐付近で、夏



「万能鍬」と「常念坊」

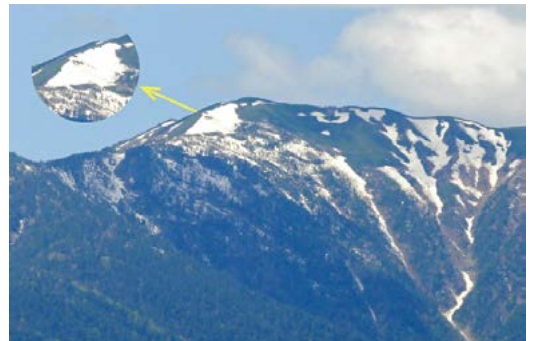
には高山蝶をはじめたくさん
のチョウが舞う花畑となる。
登山で訪れることがあれば、
そこに現れる巨大なチョウの
姿に思いを馳せてみるのも一
興だ。

楽園に迫る危機

高山帯の生きものの多く
は、氷河時代に日本に分布を
広げ、その後の温暖化に伴っ



蝶ヶ岳には「黒い蝶」の雪形も現れる



背が割れ始めた「白い蝶」



「白い蝶」が現れるお花畑

イトを設定し、基礎的なデータを収集する調査を平成一五年（二〇〇三）から実施している。蝶ヶ岳周辺はそのサイトの一つとなっており、平成三〇年（二〇一八）に公表された報告書では、標高の低い場所に生息する種の出現割合が増加傾向にあることが指摘されている。蝶ヶ岳周辺では、主に平地に生息するモンキチョウも見られるが、モンキチョウはミヤマモンキチョウと交尾することが確認されているため、温暖化の進行に伴って高山帯に現れるモンキ

て冷涼な高山帯にとり遺され現在に至っている。彼らにとって高山帯は最後の楽園と言えるだろう。そんな楽園にも危機が迫っている。

環境省では、自然環境の変化をとらえるため、全国約一〇〇〇ヶ所にモニタリングサ

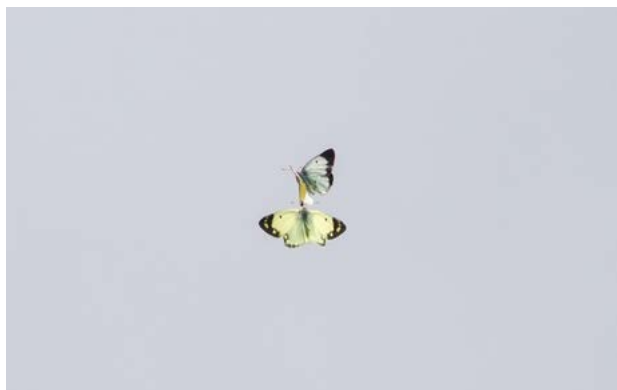
チョウが増えれば、ミヤマモンキチョウ同士の交尾機会が奪われ、繁殖に影響が出ることが懸念される。

もう一つはニホンジカである。近年北アルプスの高山帯でも目撃されるようになってきており、食害や踏みつけなどにより高山植物そのものももちろんそれらを利用する高山蝶などにも影響が出ることが心配されている。

高山帯に遺された彼らにはこれ以上行き場がない。彼らがこのまま生き続けるために我々に何ができるだろうか。最後に田淵行男著『高山蝶』より扉に記された一節を引用してこの項を閉じたい。

この地史の落し子たちに安らかな旅を続けさせねばならぬ

（高山裕司、松田貴子、斉藤雄太）



ミヤマモンキチョウ♀（上）に求愛する
モンキチョウ♂（下）

空に広がるシダレザクラの開花

安曇野市内には数多くのシダレザクラの古木があり、空いっぱい枝を広げた満開の桜は見事な景観をみせてくれる。シダレザクラはイトザクラ（糸桜）とも言われ、名木とされる樹木が多い。野生種であるエドヒガンの中から、枝の成長が早く下向きに垂れる形質が選ばれ、人の手によってつくられた栽培品種である。

堀金には田多井などに見事なシダレザクラ群がみられる。これらのシダレザクラは墓地に多く、その墓の家々によって代々守られてきたことがわかる。

春のはかない生き物たちの生活史

人々の暮らしのそばで次々と桜が咲き、春の訪れを知らせる頃、里山の雑木林ではカタクリやアズマイチゲなどの可憐な花たちが春を彩りはじめる。

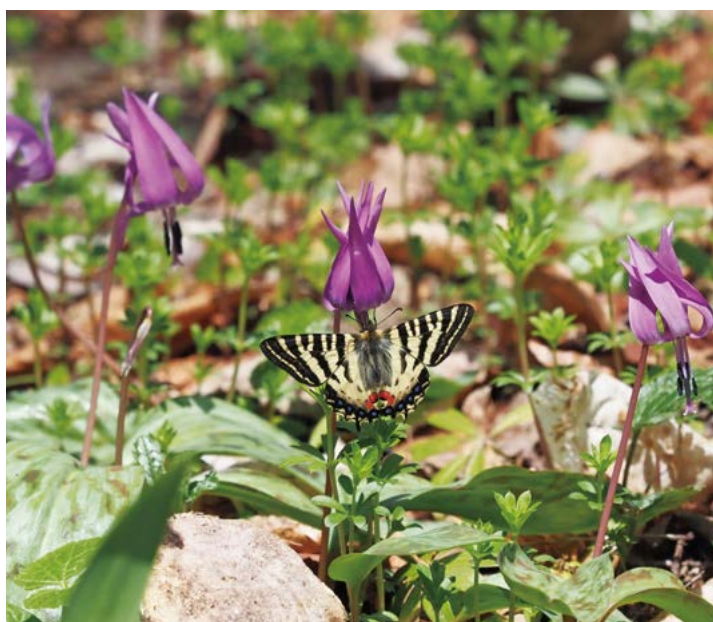
早春に花を咲かせる草花は春植物、スプリング・エフェメラル（春のはかない命）と呼ばれ、独特の生活史をもつ



田多井観音堂のシダレザクラ



春植物のアズマイチゲ



カタクリを吸蜜するヒメギフチョウ

ている。春植物たちは、寒さや積雪といったリスクを負いながら、他の植物たちが芽吹く前にいち早く葉を広げ開花する。このため小さな植物でも、春の陽光を浴びて光合成ができる。そしてコナラなど上層の落葉広葉樹がすっかり葉を広げる六月頃には、もう結実して地上部はすっかり枯れてしまうのだ。

かつて人々がコナラの雑木林で薪や炭や肥料となる材料を得ていた時代、樹林は若く、林床はすっきりした明るい

環境が広がっていた。そこに春植物は群落をつくる。

春植物の受粉を担う昆虫類としてもっとも有名なのは、「春の女神」とも呼ばれるヒメギフチョウだろう。春植物やスミレ類、サクラ類の開花に合わせて羽化し、春の日差しの中で吸蜜に飛び回っている。食草のウスバサイシンに産み付けられた卵から孵化した幼虫は夏には成熟し、落ち葉の裏で蛹となり、再び春を待つのである。

このように雑木林には早春に照準を合わせた生態系が息づいている。現在、使われなくなった雑木林では植物が繁茂して暗くなり、春植物は次第に姿を消している。しかし部分的に明るい林が残っていたり、人の手によって維持されているところもあり、そこで彼らは毎年、命をつないでいる。

(松田貴子)

縄文・弥生時代の堀金



縄文・弥生時代のおもな遺跡

山麓の縄文人

堀金で最も古い人類の痕跡は、田多井山麓で見つかったいくつかの小さな縄文土器破片である。これらは尖底土器と呼ばれる土器で、底は尖っており平坦な場所に置こうとしても転がってしまい不便である。堀金では約七〇〇年前の尖底土器の破片は見つかるものの、この時代の人々が暮らしたムラの跡は、まだ見つからない。



尖底土器のかげら

これらの古い土器のかげらは、田多井の西方にあたる東峠付近の山中でも採集された記録がある。実は、筆者も東峠付近で黒曜石のかげらを見つけたことがある。黒曜石は産地が限られており安曇野市周辺では産出しない。安曇野市内で見つかる黒曜石は、きつと縄文・弥生時代の人々が和田峠や八ヶ岳の周辺から運んできたものだろう。



そり表遺跡出土の土偶脚部（縄文時代後期）

そり表遺跡は、田多井集落の東の、現在は水田になっている一帯に広がる縄文時代・平安時代の集落跡で、隣接する遺跡を含めると東西八〇〇^{メートル}、南北三五〇^{メートル}にもなる。昭和六二年（一九八七）に堀金村教育委員会が試掘調査を行い、この遺跡に人々が暮らした時代ごとの場所の移り変わりが捉えられた。遺跡の西側には縄文時代中期前半（約

もしかしたら、持ち運びやすいとされる尖底土器や石器素材として携行できる黒曜石の塊は、生活用具一式を持ち歩いて移動しながら暮らす人々には都合がよかったのではないだろうか。遊動から定住へと生活スタイルが移り変わる頃に堀金を訪れた縄文人が、田多井や岩原の山中・山麓に住み着いて、次第にムラが形成されていったのかもしれない。

拠点的な縄文集落の出現——そり表遺跡・田多井北村遺跡

そり表遺跡は、田多井集

三〇〇〇年前）、東側には中期後半（約二五〇〇年前）の堅穴建物跡が密集しており、それらの間に弥生時代の墓や平安時代の集落などが形づくられ、様々な時代の遺物が出土した。写真は、縄文時代後期（約四〇〇〇年前）の土偶の脚の部分の破片である。

田多井北村遺跡は、そり表遺跡の北西約五〇〇^{メートル}付近に広がる縄文時代の集落跡である。ここで平成二四年（二〇一二）に試掘調査をしたところ、現代の水田の土のすぐ下から縄文時代の堅穴建物跡や柱の痕跡などが姿を見せた。全面的な発掘はしていないが、ここにも縄文人の生活の跡が確実に存在していることが分かった。

しばしば縄文時代の集落は、水の得やすさや地形のなだらかさによって立地が決まると考えられる。市内で遺跡の話をすると「この辺りは、川が近い」「土手の下に湧水がある」などとよく耳にするのはこの考えである。筆者は近頃それに加えて、人と人、集団と集団、といったネットワークも集落の立地と存続に大きく影響しているのではないかと考えている。そり表遺跡の一帯は、非常に大きな縄文時代中期の集落だったと推定できる。規模が大きく、存続期間が長く、墓域や祭祀の場所を有し、希少な遺物が出土する遺跡を、考古学では拠点集落と呼ぶ。将来、そり表遺跡が拠点集落である確証が得られれば、松本盆地の縄文集落のネットワーク解明に一步近づくことだろう。

ところで、現在、遺跡の中央に流れている深沢は、歴史的に人々の生活にとって重要な水利だったようで、堀金三田では深沢に沿って原始・古代の集落跡が点在する。次は、この深沢の上流にさかのぼってみたい。

不思議な縄文遺跡―神沢遺跡・賀茂神社南遺跡

深沢の上流、賀茂神社の周辺には神沢遺跡、賀茂神社南遺跡がある。神沢遺跡は、これまでに豊科高校、堀金村教育委員会が発掘しており、縄文時代後・晩期（約

三五〇〇～三〇〇〇年前）



三角壙形土製品（縄文時代中期後半）
左：東小倉遺跡 右：そり表遺跡

の土器片が多量に出土した。縄文時代中期の土器が躍動的な「動」の美を持つとすると、後・晩期の土器は優美な「静」の美をまとうている。ところが神沢遺跡の出土土器は、ほとんどが文様を持たず、小さな破片ばかりである。竪穴建物跡も見つかっておらず、遺跡立地も沢沿いの起伏にとんだ地形で平坦面は少ない。通

常の集落とは異質の不思議な遺跡である。

賀茂神社南遺跡は、発掘調査されたことはないが、縄文時代中期と晩期の遺物が採集されている。この遺跡の出土遺物で目を引くのは縄文時代中期の三角壙形土製品である。この土製品は、粘土で作られた片手に乗るくらいの大さきの三角柱で、側面にはステッチのようにいくつもの列点によって楕円やS字の文様が描かれている。安曇野では、賀茂神社南遺跡のほか、東小倉遺跡（三郷小倉）、ほうろく屋敷遺跡（明科南陸郷）だけで見つかっている珍しい遺物で、何に使われたのかは分かっていない。

弥生文化の普及―そり表遺跡の再葬墓

単純すぎるかもしれないが、長野県の弥生文化は墓のあり方をたどると理解しやすい。まず弥生時代の初めに、再葬墓と呼ばれる土器を骨壺（棺）として使う墓が採用される。次に弥生時代の中頃を過ぎると、礫床木棺墓という礫敷きと木の棺を使用する特徴的な墓が現れる。そして弥生時代の終わりが近付くと方形や円形の周溝墓が見られる。それぞれの墓の成り立ちでは、文化的な背景が異なると考えられ、使われた土器や副葬品の質と量にも違いがある。

先述のそり表遺跡からは、弥生時代初頭（約二五〇〇



そり表遺跡再葬墓の土器(弥生時代前期)

年前)の再葬墓が見つかっている。再葬墓とは、いったん白骨化した遺体を二次的に壺などの土器に収める葬法であり、棺として使われる土器は東海地方や東北地方などといった遠隔地の特徴(形や文様)を持つものもある。

そり表遺跡の再葬墓の壺は、表面が条痕じょうこんと呼ばれる筋状の痕跡で埋め尽くされている。弥生時代初頭には、東海地方で条痕を多用する土器が流行した。そり表遺跡出土の壺は、細部まで東海地方の条痕によく似ているため、彼の地から直接運ばれてきた可能性がありそうだ。

農耕社会のひろがり―田多井出土の石包丁から

石包丁いしばうちょうという弥生文化に特有の石器がある。石包丁はこれまでの研究によって稲の穂摘みのための道具であることがわかっていく。手のひらに収まる程度の大きさの平らな石片に孔あなを開けて紐を通し、片手に握って熟した稲穂だけを摘み取るのに使われたようである。稲作は弥生文化の

重要な要素であり、石包丁は弥生時代の人々にとってなくてはならない石器だったはずだ。長野県で石包丁がよく使われたのは、弥生時代中期後半から鉄製品が普及する後期までで、出土数はそれほど多くはない。



おもそう遺跡出土の石包丁

この石包丁が、田多井の山麓にある、おもそう遺跡から出土している。全体的に四角い形とやや内側に反った刃部は南信の石包丁の特徴を示す。しかし、南信の石包丁は一つ孔が多く、おもそう遺跡の石包丁にある二つ孔からは北信の影響を感じる。一見すると水稻栽培に不向きな山麓からの出土といい、長野県の北と南の特徴を併せ持っている点といい、この地の弥生時代の人々の生活を想像するのにとても興味深い石器である。

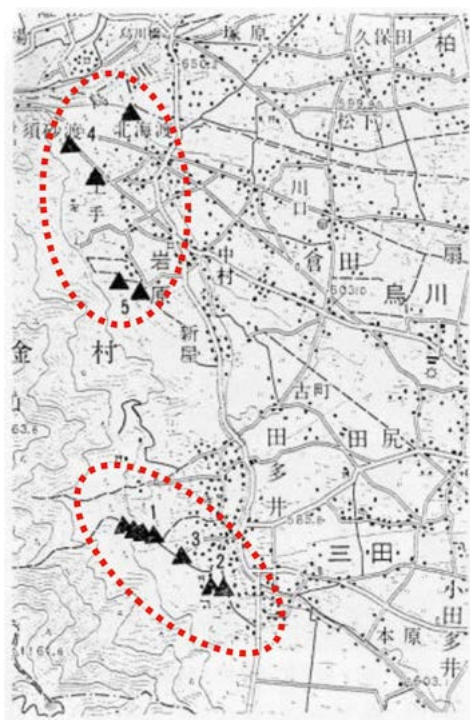
(土屋和章)

2 古墳に埋葬された人々

穂高古墳群の一角の群集墳

西山山麓沿いには、安曇野市を中心とする、一〇〇基余

りの小円墳がある。これらの古墳は、烏川・中房川などの河川や沢筋の上流周辺に支群と呼ばれる一〇か所ほどのかたまりをもって分布している。築造は、古墳時代終末期となる七世紀からで、奈良時代となる八世紀前半まで墳墓として利用されている。狭い地区に密集してつくられる小古墳は、古墳時代後期から全国各地に群集墳として拡大しており、地域ごとに独自のルールをもって墓制が成立してい



古墳の分布と2つの支群（『堀金村誌上巻 P326』より一部改変）

る。

穂高古墳群と総称されるこの地の群集墳は、七世紀前後に突如として出現し県内有数の規模で展開する。そして、どの古墳も墳丘・石室の規模と形態が同一で、埋葬品の種類にも共通点が多いことが特徴である。

堀金には須砂渡口南古墳、岩原古墳、前の髪古墳、古城下古墳の四基のみが現状で確認できる。しかし、過去

の記録からは岩原地区に五基、田多井地区に八基ほどの古墳があったことがわかる。これら一三基の古墳は、岩原の山麓と田多井の沢筋に支群となつて分布していた状況となり、穂高古墳群と同じ立地を示している。

本地区にある古墳の規模や横穴式石室の構造は、前の髪古墳から知ることができ。石室は、玄室と羨道



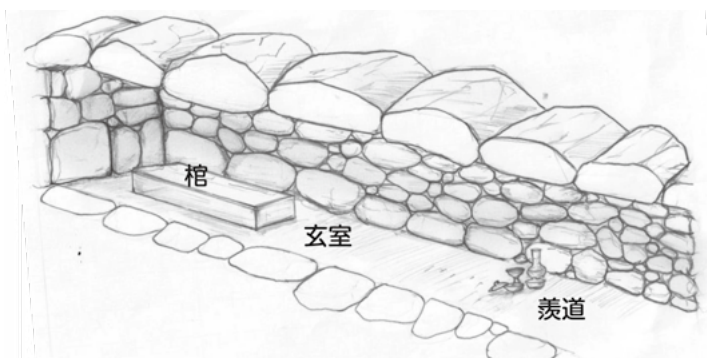
前の髪古墳石室（復元）

が明確に区分されない無袖式の構造であり、全長は約七呎、幅約一呎、高さ約一・五呎を測る。墳丘の大きさは、石室長から径一〇〜一五呎ほどと推定される。

穂高古墳群は、数基の古墳を除き標高六〇〇呎以上の高地に位置し、墳丘が直径一五呎前後の円墳、石室が長さ七呎前後の無袖式の形態である。このことから堀金の古墳は、穂高古墳群と同一のシステム（構造）で成立したことになる。つまり堀金を含めた西山山麓

一帯の古墳が同一集団によって築造されたことがわかる。また、集団は複数の小集団で構成され、それぞれが特定の河川や沢の領域に墓域をもっている。更に集団内の人間関係及び集団相互の関係は、格差や優劣の差が少なかったことを読み取ることができる。

埋葬された人々について、副葬品を手掛かりに解明してみよう。古城下古墳の石室内からは、須恵器・土師器の容



横穴式石室模式図

器のほか、直刀五振、馬具の轡、耳飾りとなる金環が出土している。したがって埋葬された人物は、騎馬に関わる武人集団の一員としての姿が浮かびあがる。彼らは広汎な扇状地を活用して馬飼いを生業とし、武人としても大和政権と関わりをもっていたことが推測される。

古城下・岩原古墳では、多数の須恵器が出土している。前の髪古墳では、石室入り口から三呎入った地点に高坏・坏などの食器類が固まった状態で発掘されている。穂高古墳群でも同様に、石室内に須恵器を並べて置く風習が顕著に見られる。これらから埋葬に際して死者に食物が供えられたことがわかり、「あの世の食物を口にした者はこの世に戻ることをできないという考え方」『黄泉戸喫』が広がっていたことを示している。



前の髪古墳から出土した須恵器

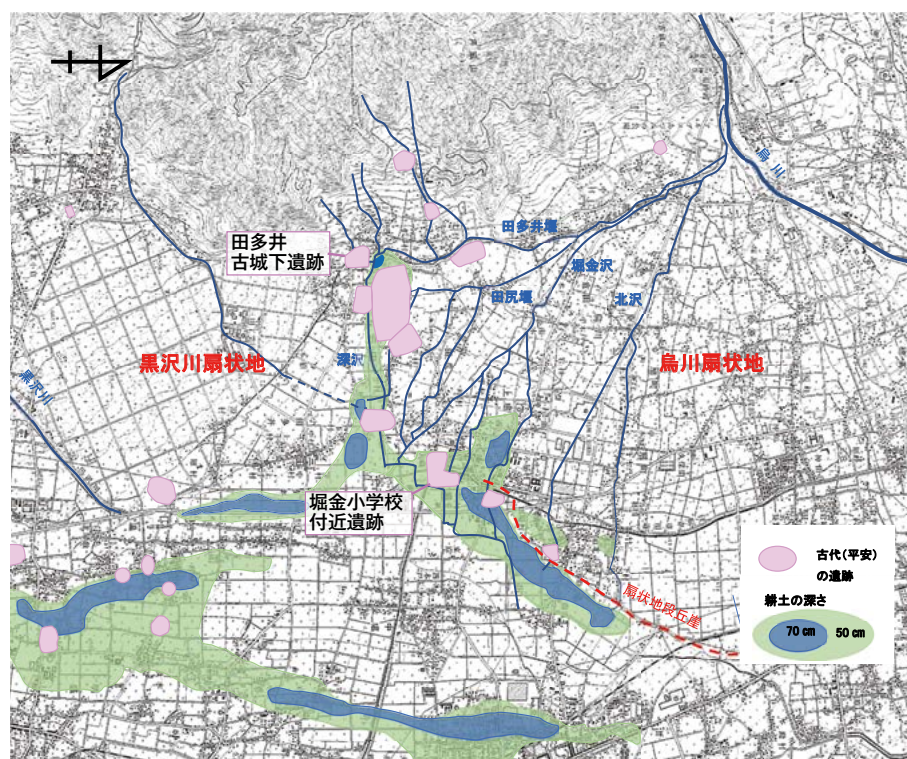
（臼居直之）

安曇野市の古代の開発に不可欠な水源は、常念岳、蝶ヶ岳に源を発する烏川による部分が多い。堀金地域のお大半は、その烏川の扇状地の南側半分にあたり、その扇状地南東の扇端は、梓川などの横からの浸食を受け段丘崖となっている。古代から中世の遺跡の多くは、その南側の扇端部の田多井から田尻、上堀・下堀と段丘上に点在する。当時の人々は、烏川から分流した北沢、堀金沢等を引水して、段丘上には集落を、段丘下を水田・畑の耕作域として開発していたと考えられている。

しかし、堀金地域は、これまで遺跡付近での大きな開発がなく、発掘調査の機会も少なかったため、古代の遺跡の詳しい様子を知る資料はあまり多くはなかった。

そんな中、二二〇〇平方メートルという広範囲にわたり唯一発掘調査が行われたのが、堀金小学校付近遺跡である。ここでは、平成一五年（二〇〇三）九月から一七年（二〇〇五）四月にかけ、小学校の建て替え工事に伴い発掘調査が行われている。

当初、小学校東側の岩田天神南遺跡では、ほ場整備事業に先立ち、昭和四二年（一九六七）に、発掘調査が行わ



堀金の地形と古代の遺跡

れ、四五年（一九七〇）のほ場整備中には広範囲からたくさんの土器が出土したことが知られていた。そして、この発掘によって遺跡範囲が北と西側まで広がっていることがはっきりしたため、岩田天神南遺跡も含め、堀金小学校付近遺跡と名称変更をして調査を行っている。その結果、平安時代前半から後半にかけての堀金地域を代表する大きなムラであったことがわかってきた。

このムラは、烏川扇状地南東の扇端に位置し、集落の南を流れる深沢の水を利用して営まれたムラと推察されている。深沢は中世以降、田多井堰から水を補水しているが、平安時代頃は、田多井集落に流れ込む何本かの沢水等を集水していた沢と考えられる。

発掘された竪穴住居は一三軒である。これらの住居址は、同時に存在していたのではなく、古い時代の住居址は九世紀半ば、新しい時代の住居址は一一世紀半ばと、二〇〇年近く続くムラであったこともわかってきた。当時は、土師器、内面黒色土器、須恵器、灰釉陶器といった焼き物を、用途に応じ使い分けている。これら焼き物は比較的近い場所で生産されているものもあれば、灰釉陶器のように東海地方で生産され入ってきている焼き物もある。住居址からは、煮炊き用鍋として使っていた土師器の甕、貯蔵用の容器として使っていた須恵器の甕・壺、食膳用の器として使っていた須恵器・土師器・内面黒色土器・灰釉陶器の坏、

碗、皿等が出土している。その他、一一号住居址からは、生活に使う煮炊具、貯蔵具、食膳具以外に、墓址のお供え用を使用することが多い灰釉陶器の小瓶（写真）等が出土している。（報告書によると住居址内の南西に直径六〇センチ、深さ三〇センチの穴があり、焼けた土と石と一緒に陶器の壺が入っていたとの記述がある。）このことから、住居址が廃絶し埋まってしまった後に、お墓が築かれた可能性がある。この時代、一般の人の多くは、『羅生門』に描かれているように、死ぬと野に遺棄された。お墓に葬られるのは、ある程度身分の高い一部の人に限られ、興味深い。



堀金小学校付近遺跡 11号住居址から出土した灰釉陶器の小瓶



5号住居址出土の鉄鎌と、0号住居址出土の刀子

また、当時、貴重で簡単に所有することができなかった鉄製の道具も何点か出土している。九世紀終わり頃の五号住居址からは、鉄製の鎌が、後述する八号住居址からは鎌が、一一世紀半ばの四号住居址からは苧引金具が、一〇号住居址からは刀子が出土している。まず、鉄鎌については、この時代、住居址内から出土することはあまりなく、単に農業を営んでいたのではないという一面が垣間見られる遺物である。次に鎌であるが、これもすべての家で所有で

きたわけではなくある程度財のある家の持ち物といえる。続いて苧引金具である。苧引金具は布を製作する過程でカラムシや麻の皮を引き繊維を抽出するための使用する道具である。正倉院御物の中に、八世紀中ごろ安曇郡前科郷の安曇部真羊が調布一端と布袴を献上

している記録があるが、このムラでもカラムシ等を使い、布を製作していた証である。最後に、刀子である。携帯し雑用等の刃物として用いられた小刀であるが、このほかに、木簡などに字を書いて消す場合に削る道具、いわば消しゴムの役割にも使われたと言われている。よって字を書ける者がいる証ともいえる。

最後に、この発掘調査において最も注目された遺物がある。九世紀半ば頃の八号住居址から出土した三点の墨書土器である。墨は、写真のとおり、千年たっても消えずに残る。それでは何と書いてあったのか。右からひとつ目が「○道寺」とあるが最初の文字が「惣」か「想」か判然としない。ふたつ目は「瓜持」または「氏持」のようだが二文字目の「持」はあまり見ない字で、詳細はわからない。最後のひとつは墨が薄くなっているが、「寺」である。当時は、今のように漢字の辞書や教科書があるわけではないが、三点とも、「寺」という文字にこだわりのように思える。刀子の箇所でも述べたが、当時文字を書くことができた人は、田舎ではごく一部の人で、それなりの身分であったことが想像できる。墨書土器について専門書を紐解くと、「平安時代になると土器に墨書あるいは篋書された土器が出土することがある。これらの土器を墨書土器、刻書土器と呼んでいる。一般的に墨書土器に示されている文字は、そのムラがどんな場所にあり、どんな生業をしていたムラ

か、その器の所有、あるいはその所有者の身分・名前、地名、方位、数量、年紀、吉祥句や占いに關する文字、習書や戲書などがわかる」とされている。以上の点を踏まえると、寺に關係するムラ、または家であったのではないかということが推察される。寺については、七世紀の後半に明科に、いわゆる明科廃寺が建立され、古代安曇郡へも仏教



堀金小学校付近遺跡
8号住居址出土
墨書土器



が入ってくる。それから約二〇〇年後、安曇郡内のムラにも信仰施設があってもおかしくない。その他に墨書土器は、岩田天神南遺跡から「東一」、田多井古城下遺跡から「人」という文字の書かれた器が出土している。

最後に堀金小学校付近遺跡のムラとほぼ同時代、九世紀後半の住居址が発見されている田多井古城下遺跡にふれた。田多井地域は、西山からの自然流である寺沢、中沢、こやぶろ沢、城が沢、神沢、和合沢等の小河川で形成された小さな扇状地の扇端に、田多井古城下遺跡をはじめとする平安時代の集落遺跡が分布している。これらの集落は、前述の小河川と扇状地扇端にある湧水を水源として水田耕作していたと推察される。古城下遺跡は、溝掘りによる部分的な発掘調査であったため、集落全体の様相をつかむことはできていないが、平安時代九世紀後半の住居址が二軒と、二間×五間の比較的大きな掘立柱建物址が一棟発見されている。発見された住居址からは、堀金小学校付近遺跡と同様に、食膳具、煮炊き具が出土している。

以上のように、堀金地域にムラができて、その周辺開発が始まるのは、平安時代の九世紀後半からといえる。しかし堀金地域の西山山麓には数基の古墳が確認されていることから、今後の調査によっては、さらに古い集落が発見される可能性を秘めている。

(山下泰水、寺島俊郎)

1 堀金氏の栄枯盛衰

この画像は権利の関係により、
データ版ではご覧いただけません。

「仁科親類被官」の起請文（生島足島神社蔵）

上田市下之郷の生島足島神社には、武田信玄に忠誠を誓った安曇郡の部将たちの起請文が伝わっている。

曰く、信玄様に対し奉り、逆心謀叛を企てないこと、長尾輝虎（上杉謙信）が如何なる勧誘を仕掛けてきても同意しないこと、甲州・信州・西上野の諸侍が逆心を企てたとしても、自分たちは信玄様の御前で奉公すること、等々。

起請文とは、神仏を勧請して認められた誓約書のこと。これらの誓約に違えた時は、仏教世界の天上に住む梵天・帝釈天や四天王をはじめ、内海外海の龍王龍神、また京や関東、甲州や信州をはじめとする日本国中の神仏の御罰を蒙り、今生においては「黒癩」「白癩」と呼ばれたハンセン病を患い、来世では無間地獄に落ちる・・・と、なんとも恐ろしい呪いの言葉が綴られている。

起請文は、現在の和歌山県にある熊野那智大社が発行した神札「牛玉宝印」を翻して書かれた。表に刷り出された「那智瀧宝印」の文字は、夥しい数の鳥で形作られ、宝珠形の朱印とともに強烈な呪力が込められていた。

永禄一〇年（一五六七）八月の日付の下に名を連ねたのは、堀金平大夫盛広、古厩平三盛隆、渋田見源介政長、澤

この画像は権利の関係により、
データ版ではご覧いただけません。

渡兵部助盛則、日岐盛次、穂高左京亮盛棟、等々力豊前守定厚、野口尾張守政親、関右近助政直、小宮山大蔵丞政知といった「仁科親類被官」の面々である。各々の氏名の下には花押(サイン)が据えられ、血判が捺された。彼ら「仁科親類被官」の筆頭に、堀金の地を名字に冠した平大夫盛広の名がみえる。

仁科氏の一族として

仁科氏は、現在の大町市に拠点を構えた信州屈指の国衆である。国衆とは、惣領と呼ばれる本家の当主を中心にまとまり、周辺地域に一族を分出させて、勢力を広げた在地領主のことである。仁科氏は戦国時代までに、安曇郡北部に留まらず、その南部にまで勢力を拡げていた。くだんの堀金氏、古厩氏、穂高氏、渋田見氏、日岐氏そして澤渡氏なども、それぞれ安曇野市内にあった堀金、古厩、穂高、池田町の渋田見、生坂村の日岐、白馬村の沢渡の各郷に分出した「親類」であった。

堀金氏は仁科氏から分かれてのち、三代続いたと伝えられる。初代の安芸守盛公、二代目の安芸守政氏、そして三代目が先の平大夫盛広だという。仁科氏の一族は、共通して実名に「盛」の字を冠したが、政氏は当時の惣領であった仁科上野介盛政から一字をもらったと思われる。

堀金氏の来住

堀金氏が名乗りの地とした堀金郷は、仁科氏一族の勢力の最南端にあった。もともとこの一帯は、現在の豊科地域北部に館を構えていた細萱氏の勢力下にあった。

岩原の大同寺の薬師堂には、かつて木造薬師如来立像が安置されていた。戦前に焼失しているが、『堀金村誌』には、その仏像と、厨子の写真が掲載されている。これによれば、戦国時代前期の永正一六年（一五一九）に細萱治部少輔大伴高知なる人物が大旦那となり、熊倉周防守という大工によって修造されたとある。またそのころの大同寺の住持は、平瀬（松本市島内）にあった法住寺に住む憲綱という僧侶であった。堀金氏が来住する以前は、細萱氏が奈良井川の西岸から岩原まで勢力下に置いていた。堀金氏の来住は、永正年間より後のことである。

堀金氏の居館は現在の堀金小学校の北西にあった。この附近の大庭という小字は、年貢を集める場所であったことから名づけられたという。江戸時代には館跡の隣に郷蔵が置かれた。

さらに、館から南へ延びた道では、市が開かれたという。現在、道祖神が立てられている場所には、市神が祭られていたとも伝えられている。またその南には、小林寺や大学院などという修験系の寺院が並んでいた。

堀金氏の来住から江戸時代にかけて町場がつくれ、堀金郷とそれに続く上堀金村の中心地として発展していったことがうかがえる。

武田氏の安曇平侵攻

堀金氏が甲州の戦国大名武田晴信（のちの信玄）に属したのは、天文

二〇年（一五五二）のことである。武田氏はこれより一〇年ほど前から本格的に信州への勢力拡大に乗り出していた。この間、諏方郡を治めていた諏方頼重を滅ぼし、さらに東信の村上義清にも攻勢をかけている。天文一七年（一五四八）には、塩尻峠附近の戦いで信濃守護の小笠原長時を破り、松本平にも徐々に侵攻の手を伸ばしていた。仁科氏一族の中では、武田氏へ臣属するか抵抗するかの



堀金氏館跡（上堀）



丹生子城背後の堀切（大町市社）

去就が分かれていたようだ。天文一九年（一五五〇）には、前述の仁科上野介盛政が、その父または祖父とみられる仁科道外を伴って武田氏に出仕する。このころ盛政はまだ仁科氏の惣領ではなかった。だが武田氏の家臣が記した『高白斎記』の記述から、道外と盛政の拠点は、農具川東岸の仁科御厨と呼ばれた地域にあったと思われる。この一帯

には、仁科神明宮や覚園寺（現在の覚音寺）など、仁科氏が代々崇敬・帰依してきた社寺が点在しており、ここを宛行われた盛政たちが一族の中でも重要な地位にあったことが推察される。

このころ惣領家の当主であった修理亮盛康は、現在の大町市街地を含む仁科庄一帯を支配していたが、

まだ武田氏に臣従の意思を示していない。だから道外と盛政の武田氏への帰属は、盛康らにとっては喉元に匕首を突きつけられたようなもので、非常に大きな脅威であったことだろう。

これは武田氏に反抗する国衆たちとしても同様であったらしい。天文二〇年一〇月、反武田の最大勢力であった村上義清が小県郡を出陣。同月一四日に仁科御厨の中にあつた丹生子城を攻め落とした。農具川東岸の山上には、この丹生子をはじめ、曾根原、青木そして大町地方最大の山城遺構が残る木舟城などが点在している。これらの山城は、道外や盛政らの勢力下にあつたと考えるのが妥当であろう。義清が遠方の小県郡からわざわざ城攻めに出向いたことから、反武田勢力にとつての脅威の程がうかがわれる。

武田晴信は、翌一五日にこの急報を受け、甲府を出陣し、安曇郡へと進軍をはじめた。あわせて仁科氏の一族にも調略を仕掛けていたようである。この策動に乗ったのが、堀金氏であつた。

一〇月二一日、堀金氏は深志城に出向き、晴信に拝謁した。『高白斎記』には「ホリカネ出仕」とある。仁科勢力の南の前線が崩されたのである。

これが引き金となつたものか、武田勢の安曇郡への攻勢が始まる。一〇月二四日、安曇郡の前線で抵抗を続けていた平瀬城が二〇四人もの戦死者を出して落城。三日後、武

田勢は余勢を駆って、安曇郡の小岩嶽城を攻撃した。『高白斎記』には、「小岩竹宿城放火」とある。宿城は山城の直下の平地を指すものであろうか。武田勢は放火のみで引き揚げたが、このことは、仁科惣領家を中心とする安曇郡の反武田勢力が小岩嶽城まで大きく後退してしまったことを意味する。

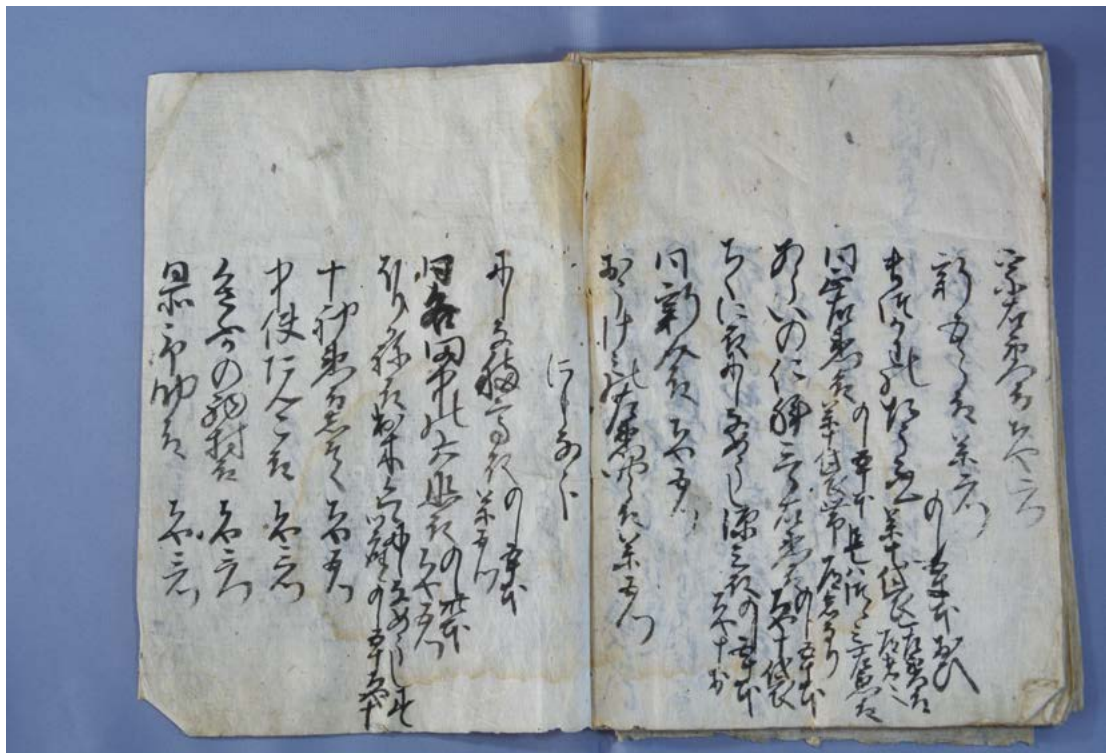
翌天文二一年八月一二日、武田氏はなおも抵抗を続ける小岩嶽城に力攻めを加えた。城方では五〇〇人もの戦死者を出し、城主が自害して落城。城内に避難していた女性や老人、子どもたちの多くが略奪された。

翌天文二二年閏正月、仁科惣領家の盛康はついに武田氏への臣属を決断する。『高白斎記』には「仁科匠作始テ出仕」と書かれている。「匠作」とは盛康の官途である修理亮の中国風の呼び名である。

仁科氏一族による反武田の組織的な抵抗は、小岩嶽城の戦いが最後であった。そのきつかけとなった堀金氏の武田氏への帰属は、結果的に仁科氏の行く末を決定づけた行動であったと言える。

堀金氏、なぞの退去

現在、堀金地域に堀金姓を名乗る旧家はない。安曇野市内で堀金同姓の家々がみられるのは、主に豊科の踏入・寺



「しなの>国道者之御祓くはり日記」(部分)(松本城管理事務所蔵)

所一帯である。

仁科氏の中では一足早く武田氏に属し、一族の命運を決定づけた堀金氏。一時は「仁科親類被官」の筆頭に名を連ねるほど、一族内での地位が高まっていたようだが、その後何があったのだろうか。

松本城管理事務所には、伊勢内宮の御師である宇治七郎右衛門尉久家が信州の檀家を記したリスト「しなのゝ国道者之御祓くはり日記」が所蔵されている。武田氏が滅亡する前年の天正九年（一五八一）に書かれたものである。

御師とは、自らが属する神社への参詣の案内や祈祷などを行う職業のことで、各地に檀那（檀家）を抱えていた。

久家が記した「御祓くはり日記」には、仁科氏の面々も檀那として挙げられている。だが堀金氏については、「ほりかね殿 出木候ハ」とある。堀金氏の跡を継ぐ人ができたなら（その人物に御札や土産物を配る）、と

いう意味である。裏を返せば、もうこの時点で堀金氏は堀金郷にいなかったということだが、一体何があったのか。それ以上は史料的な限界があり、わからない。

しかし堀金氏三代目・盛広のその後の足跡は、富山県の寺に伝わっている。

砺波市庄川町にある浄土真宗寺院・堀金城山勧歸寺に、一体の阿弥陀如来像が安置されている。



木造阿弥陀如来立像
（砺波市指定文化財）
（勧歸寺蔵）

信州から越中にやってきた盛広が持ち込んだものという。盛広は最初に越中水島（現在の小矢部市）の和沢山勝満寺で出家して順照と名乗った。のちにこの阿弥陀如来像を携えて勧歸寺に移り、この寺の住職として生涯を終えたといわれる。

一時は「仁科親類被官」の筆頭として一族に重きをなしていた堀金氏。わずかに残る文献などからも、その栄枯盛衰を垣間見ることができる。

（逸見大悟）

2 二つの山城を訪ねて

岩原城と田多井城

近年、山城がブームを迎えている。それまで誰も見向きもしなかった山奥の遺構に、なぜ注目が集まるのだろうか。瓦屋根や漆喰の白壁を備えた壮麗な天守が聳えているわけでもなく、精巧に組まれた重厚な石垣がみられるわけでもない。

武士と百姓との境界線がまだ曖昧だった中世、常平生は田畑を経営し、戦時には弓箭きゅうせんを帯して出陣する、血と汗と土にまみれた地侍たちの姿が偲ばれるからなのかもしれない。



岩原城遠景（中央のピーク）

堀金地域にも二つの山城が残っている。岩原城と田多井城である。そこで、この二城を実際に歩いて感じたみどころを紹介したい。

空堀が特徴的な岩原城

堀金靈園よりさらに奥、安楽寺跡を通り過ぎて舗装道路を進むと、岩原城の説明板がみえる。ここが「岩原自然と文化を守り育てる会」が中心となつて整備された登攀路とうはんろの入口である。岩原城には、尾根の南側の急斜面にも小さな平場の遺構が残っているが、崩れやすい。そのため登山者が踏んで傷めないように、遺構の少ない斜面を九十九折に登って、無理なく尾根までたどり着くように配慮されている。また枝打ちや草刈りなどの維持管理でも、必要以上に地形を改変しないように心がけている。登山者と山城遺構のいづれにも気を配った山道の整備である。

この山道を登って尾根に至る。尾根は登りやすい、ということは攻められやすい。そのため曲輪くるわと呼ばれる平場や、堀切ほりきりなどの防御施設が多数設けられている。岩原城の尾根

に出たら、まずは主郭へと急がず、少し尾根道を下ってみよう。

すると、二重の大きな堀切が現れる。尾根道を攻め登ってきた寄せ手を足止めするものだろう。これより下、立岩（権現岩）まで曲輪や堀が連続する。この尾根道が大手（城の正面）である。

二重堀切から上にもいくつかの曲輪を経て再び堀があり、ここから少し急な坂を登ると、やや広めの曲輪に出て、標高九五〇㍎の主郭に至る。眺望は、高い木に遮られてい

るところもあるが、穂高牧や明科の押野山などを望むことができる。近年立てられた説明板もある。

だが岩原城の防御はこれで終わりではない。主郭の奥の土塁の高まりに立って下を覗くと、一〇㍎以上の深さがある大きな堀切に圧倒される。主郭の背後は、三重の深い堀で尾根を寸断することで、厳重に守られている。ここか



大手の二重堀切



岩原城の主郭



主郭搦手の大堀切



主郭北斜面の畝状堅堀

ら奥に平坦な尾根道が続いていることから、城の搦手（裏側）、角蔵山方面からの逆落としを警戒するために掘られたものと考えられる。このような、主郭の背後を守る深い堀切は、明科の塔原城や松本市島内の平瀬城など、近隣の山城にもみられる。

防御施設は、主郭の前後の尾根だけではない。やや傾斜の緩い主郭北側の斜面には、三、四筋の畝状堅堀が設けられている。堅堀

は、傾斜に対して直交するのではなく、傾斜に沿って掘る堀のことである。何本かの堅堀を畝状に配することで、寄せ手の横の動きを封じるものと言われている。

ほかの山城も併せて考えると、尾根の側面で傾斜が緩く

なっている箇所に掘られることが多いようだ。尾根だけでなく、側面の緩傾斜地からの攻撃にも対処できる山城に仕上げられていることがわかる。

山城では、城方が高所に立つことで敵情が把握しやすくなる。さらに、寄せ手は足場の悪い斜面を登らなくてはならないが、城方は尾根や曲輪のような平らな場所で迎え撃つことができる。山城の空堀では、水を張ることこそできないが、寄せ手の前後または左右の動きを封じる効果があり、これだけでも城方に優位な戦闘が展開できる。

もともと、岩原城が最初から幾重もの堀や曲輪を設けた厳しい防御を敷いていたわけではなかっただろう。初めは戦時の避難場所としての性格が強かったようだが、時代が下り、個々の戦闘が激しさを増し大規模化するにつれて、武器としての側面が強化されていったと考えてよい。

岩原城の城主は？

岩原城は戦国時代の記録には全く登場しない。築城はもちろん廃城の時期も不明である。

おそらく数十年にわたって使用されたものと思われるが、これほど厳重に設けられた堀などをみると、戦国時代の中ごろから後期には使用されていたものと推測される。武田氏が安曇郡に侵攻してきた天文二〇年代（一五五一—

五五)か、あるいは武田氏の滅亡後、戦闘がさらに激しさを増してきた天正一〇年(一五八二)以降であろうか。

ただ、城主については、江戸時代に松本藩が編纂した地誌『信府統記』に記載がある。曰く、山麓の安楽寺には、この辺りの「地頭」であった堀金氏が、この城山を寄進する旨を記した書付が残っているという。このことから「彼の堀金氏の要害なるべし」と推測している。

確かに、堀金氏が支配した時代もある(五〇頁参照)。だが山麓の大同寺や安楽寺は、堀金氏来住より前の細萱氏の時代から存立しており(八〇頁参照)、岩原城の原型のような砦も当時からあったのかもしれない。その一方で、堀金氏は武田氏が滅亡する前には当地を離れており(五三頁参照)、それ以後も使用されたとすると、松本城主となった小笠原氏の関係者が手を加えて現在まで残された形になった可能性もある。

戦国時代の中期以降の特徴をよく残す山城であるだけに、城の履歴や堀金氏との関係など、興味は尽きない。

田多井城の防御施設

田多井城は賀茂神社の西方、こやぶろ沢と神沢にはさまれた尾根の中腹にある。この山城を訪れた筆者は、神社の裏手の林道のカーブをいくつか曲がった先で神沢を渡り、

尾根の南側斜面に取りつくようにして登った。傾斜に沿って堀切と見まがう幅の広い溝が残っている。かつて山から伐り出した木を滑らせて落したアラシの跡である。

尾根より少し下の斜面からは大きな岩が露出し、その周囲や尾根沿いにいくつかの平場が点々と残る。主郭の手前



田多井城の主郭と背後の土塁

には、岩原城のような堀切は見当たらない。ただし、尾根の北側に細長い平場がみられ、尾根上の主郭を守る帯曲輪と思われる。

尾根上の曲輪を足がかりに登っていくと、標高八四〇[㊦]の主郭に至る。東西二一[㊦]、南北一四[㊦]ほどの広さがあり、三方を土塁に囲まれている。特に背後にそそり立つ高さ四[㊦]ほどの土塁は、圧巻である。東に向かって緩く傾斜した尾根の自然地形を掘り下げて平らな広い主郭を築き、その土の一部を土塁として盛り上げたのだろう。



主郭掘手の堀跡

この背後に二筋の堀切が認められるが、いずれもさほど深くはない。ただ、尾根の北側の斜面に向かって長く伸びている。神沢側の南斜面に比べて北のこやぶろ沢側の方が傾斜が緩く、攻められやすいと考えたものだろう。前述の北斜面の帯曲輪も

同様の意図で設けられたのかもしれない。

『堀金村誌』では、小規模な掘割や、簡単な縄張りから、天文年代（一五三二―一五五）に、武田氏の信州侵攻によって軍事的緊張が高まる以前に築城されたものかもしれない、と考察している。

田多井城の防衛線

田多井城の東方にあり、賀茂神社の南方に突き出た琴平山の尾根には、見張り台と伝えられる平場がある。田多井城の峰が周囲より奥まって視界が利かないため、南側への監視として設けられたと考えられている。

また賀茂神社入口の手前には、「田多井古城」と呼ばれる小さな城跡がある。築城時期はわからないが、その名のお



田多井城東方・琴平山の尾根の見張り台

田多井氏の館？

『信府統記』には、この田多井城に田多井大隅^{おおすみ}という城主がいた、と記されている。その館かどうかは不明だが、山麓線沿いに館跡があった。田多井古城近くにあることから「田多井古城下居館」と呼ばれている。当地の小地名に



田多井古城

り田多井城以前に使用された城かも知れないし、田多井城の前衛の砦なのかも知れない。

考古学的な所見を待たねばならない。

特徴的なのは、小丘の中心を穿つてくぼみをつくっていることだ。信濃史学会編『信州の山城』などでは、古墳を利用して築いた山城と推測されているが、ここが本当に古墳であつたかどうかは、

「城下」と「との畑」があり、近くには「ばんしょう田」^(耕物師屋)「いもじや」など、職人に因んだ地名も残る。

山麓線の道路建設にあたり、「との畑」地籍で発掘調査が行われ、地下一層から薬研堀の跡が発見された。幅・深さがそれぞれ二層ほどある堀跡は、現在は道路の下に埋まっているが、ここから西と南に延びていたという。

天正七年（一五七九）の諏方^{すわ}上社の造営にあたり、信州国内の郷村への費用の割り当てを記した「上諏方造宮帳」には、西牧の上野郷の代官として「田多井安右衛門尉」^{やすえもん}の名が載る。武田氏によって田多井郷から異動させられたとみられ、後任の代官は青柳氏が担当している。

堀金地域の城館について、多くを語ってくれる史料はない。だがわずかに残る文献や、現在残る遺構を手がかりに、その歴史に想いを馳せるのも、また楽しいものだろう。

（逸見大悟）



田多井古城下居館跡

3 山口家

大庄屋山口家

山口家は慶長一七年（一六一二）、堀金郷が岩原村・上堀金村・下堀金村に分かれた年から、江戸期を通じて岩原村の庄屋を務めている。また、安永七年（一七七八）から安永九年（一七八〇）まで山口与惣兵衛よそべえが三年間、寛政七年（一七九五）から文化五年（一八〇八）まで孫の彦兵衛が一四年間、長尾組（現在の三郷・堀金地域）大庄屋を務めている。その間の庄屋役は別家で務めている。また、彦兵衛は大庄屋任命前に数年間下堀金村越庄屋こしじょうやを兼ねている。

大庄屋は郡奉行こおりぶぎょうから任命され、その任務は、組内村々庄屋の監督、村々からの願書の取次、藩から村々への文書の受領と配付、年貢徴収の総括、宗門改めの総括、訴訟・請願の処理、普請等の人足割、争論の裁決等、村行政全般にわたる。また、大庄屋は組内村々が抱える問題解決の先頭に立った。一例をあげると、山口与惣兵衛は、当時松本藩の統制下で不自由していた領内の塩流通の自由化実現を主導している（山口家文書）。



山口家

なお、彦兵衛の後に長尾組最後の大庄屋を務めたのが小田多井新田村の丸山円十郎である。丸山家も江戸期を通じて同村の庄屋を務めている。

山口家は屋敷を岩原城址の直下、安曇平を一望に見渡す西山の麓に構え、背後には烏川用水（農業用水・生活用水を供給）および広大な入会林（燃料・肥料・飼料を供給）というライフラインの要衝を抱えており、その管理を担う立場にあった。また、飛騨越えの間道の要衝に位置していたことも見逃せない。

明治維新时期は当主が岩原村の名主・戸長を務めながら、五箇条の御誓文に基づき藩に開設された議事下局の議員に選出され（大庄屋役は廃止）、後に烏川村の戸長・村長を務めている。

そして、山口誠象氏が烏川村初代公選村長を経て堀金村初代村長を務め、堀金地域発展の礎を築いた。

江戸期を通じて家業は農林業であったが、中期以降は作問稼（副業）として酒造業を営んでいた。文政八年（二八二五）に大町組四ヶ条（北安曇郡白馬村）で起こった赤藁騒動では、酒屋として暴徒の打毀しの被害に遭っており、その顛末は『赤藁談』（信濃資料叢書第一九巻収録）に詳しい。その際、庄屋を務めていた別家も同様に被害に遭っている。



山口家の庭園

県名勝山口家庭園

かつて松本藩主を迎えた一〇畳七間続きの座敷（現在は一部改築され三間）に面した庭園は、天和と貞享（一六八一～一六八八）年間の作庭と伝わる。

池泉は、全体に「心」という字をあらわし、東西にやや長く、出島・亀島・板橋・切石橋を配し、東北角に滝を組

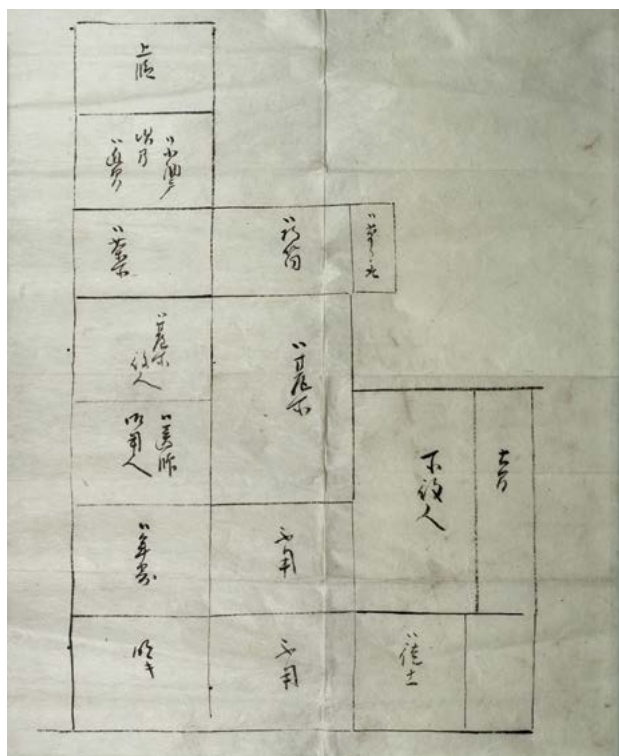
み込んで、池水は東南に流している。滝の石組みは桃山期の手法で、配石の妙を伝えている。

また、北西部に五重層塔を配し、それに続く後方の杉^{ひのき}の借景が庭園の奥深さを醸し出している。

元禄年間に建てたと伝えられる母屋と共によく保存され、文化財的価値が極めて高い。

平成二十一年（二〇〇九）四月三〇日に長野県名勝に指定されている。

その重厚で趣のある風情から、同家は何度か映画のロケ



山口家文書に残された間取り図

地にもなっている。

上の図は、藩主が山口家を訪れた際の間取り図である。庭園に面して座敷上座から、次の順番で部屋割がされている。

- ① 上段（殿様）
- ② 次間（小納戸・御近習）
- ③ 御茶所
- ④ 御台所役人
- ⑤ 御医師・御用人
- ⑥ 御年寄
- ⑥（空き）

訪れた時期は明記されていないが、文書に記された松本藩の職制から戸田期のことで、大庄屋を務めた期間中（二七七八〜一八〇八年）と推察される。

山口家文書

江戸期を通じて庄屋役を務め、また二度の大庄屋を務めたこと、そして明治期に名主・戸長・村長を務めたことから、同家には二〇〇年以上にわたる大量の古文書が残されている。その数は現在調査中であるが一万二〇〇〇点に及ぶと推察される（令和六年一月三十一日時点）。

行政文書の内容は村政全般にわたり、江戸期を通じて岩原村がどのように変化していったか知ることができる。また、大庄屋を務めていたことから、当該期間の長尾組内の動き、そして代官所等藩役人とのやり取りがつぶさに分かる。また、明治維新期の文書からは、農村が封建制から脱

却し近代化していった過程を辿ることができる。

家政面においても当時の生活・生業・習俗等を知ることができる文書が多数残されており、それは忘れ去られつつある農村文化を現在に留める貴重な役割を持つ。

周辺地域の絵図も多数残されており、文書と併せ読むことで、近代化により失われた地域の原風景や地勢を復元することが可能である。

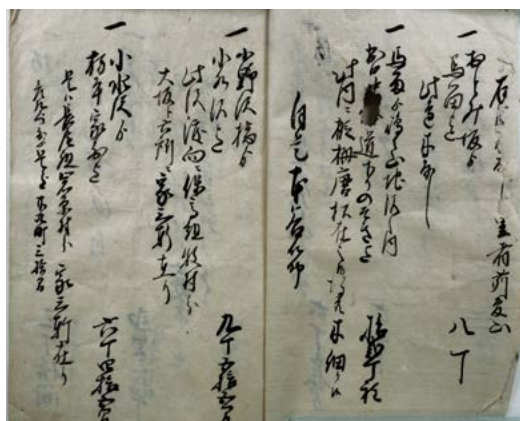
また、文書群を通じて、下書・覚書（メモ）・書簡が大量に残されていることも大きな特徴として挙げられる。中には、文書が成案になる意思過程や物事の動きを知ることができる貴重な文書も見受けられる。

研究者、学生、そして地域住民が地域の歴史・文化を知る上で、大きく寄与するであろう文書群である。

（丸山潔）



「岩原村絵図」



「鳥川山沢付道程覚」（一部）



山口家文書（安曇野市文書館）

描かれた江戸時代の堀金

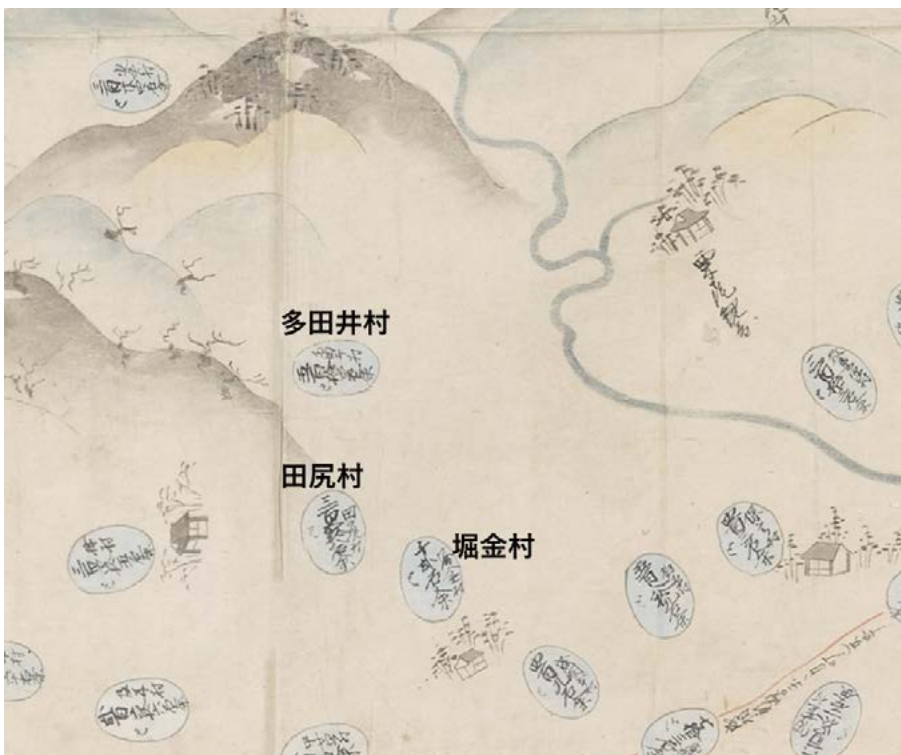
正保国絵図・元禄国絵図

江戸幕府は、正保元年（一六四四）に命令を出して各国の地図の作成を命じた。信濃国は松代藩が中心となつて作成し、慶安四年（一六五一）には、幕府に納入された。一方元禄国絵図は五代将軍綱吉の治世の元禄一〇年（二六九七）に正保国絵図の改訂が各国に命じられ、元禄一五年（一七〇二）までに幕府に納められたものである。

堀金地域の村は、『正保国絵図』には「堀金村」「田尻村」「多田井村」（当時はこのように表記した）があるが、『元禄国絵図』には、「田尻村」「田多井村」「小田多井村」「上堀村」「下堀村」「中堀村」「岩原村」と大きく増加する。

他の絵図には、「堀金の内 岩原村」「小田多井新田村」「中堀新田村」などと記されることもある。

一七世紀中頃から後半にかけて立地や規模でいくつかの村に分かれたり、村として独立したり、開墾のため入植して村ができあがったことがわかる。



正保国絵図部分（上田市立博物館蔵）

右下に「長尾組絵図」とはいる。描かれているのは、江戸時代の松本藩の支配単位である組、長尾組の範囲である。現在の堀金地域と三郷地域と重なる。

右下の△の色凡例が『保高組絵図』（『豊科の宝』参照）と同じである。保高組絵図には、犀川対岸の明科地区が、「御料」、天領（幕府直轄地）として記されており、松本藩主が水野氏から戸田氏に代わった享保一〇年（一七二五）以降に作成されたと考えられている。それと同じ凡例を用いていることから、長尾組絵図の描かれたのもほぼ同じ時期であると考えられる。

長尾組絵図



元禄国絵図部分（上田市立博物館蔵）



長尾組絵図（長野県立歴史館蔵）

長尾組絵図では、西山を背後に、手前に村々を描いている。最も高く描かれるのは「常念ヶ嶽」で、まるで長尾組のシンボルのような扱いである。その南に「蝶ヶ嶽」が描かれている。幕府の命令で制作された国絵図には、目印のように蝶ヶ嶽だけが注記されている。その北に「一ノ沢嶽」、その間から「烏川」が流れ下る。そこには多くの沢が流れ



長尾組絵図 西山の部分

込み、それぞれに名称がはいる。なお南の「兄増り」と記されるのは、形状から鍋冠山であろう。

木々は、山の標高の高い場所と、寺社の部分にしかない。この当時、山は、草の生える芝山、小さな雑木の柴山、薪に使う木をとる薪山などとして当時の人々がさかんに利用しているため大きな木々は生えていなかった。なお、小倉村の東に「室山」が描かれ「御林」とはいる。これは松本藩が管理した山林であった。御林の資源を使用するためには制限が多く、松本藩の許可が必要であった。ただ、一部に木がなくわざわざ「畑」と記した部分がある。明治時代になると、ここは国が管理する国有林となり、「小倉官林」と呼ばれた。

描かれた長尾組の村々

平地の部分には、村の位置、それを結ぶ道、河川や水路、寺社が描かれる。絵地図の北には「烏川」の上流部、南には「黒沢」（黒沢川）が描かれる。大正時代は住吉神社あたりまで流路があったが、この頃は室山の「御林」の中で消えてしまっている。

堀金地区の村は、「田多井村」、「田尻村」、「小田多井新田」、「岩原村」、「上堀金村」、「下堀金村」、「中堀新田」と小判形に囲んで村の名前が記される。村々は道（朱線）で結ば

れ、田多井村と田尻村の道には「十四丁四十七間」(一丁(六〇間)は一・一〇畝、一間は一・八畝)とあるから、計算すると、一六二四畝である。それぞれの村には、神社があり、祭神とともに鳥居と鎮守の森である社叢が描かれる。ちなみに田尻村が「住吉明神」、上堀金村は「穂高明神」であり、現在と異なっている。

寺は三つあり、それぞれに建物と木々が描かれる。岩原村の西の山中に安樂寺(曹洞宗)、大同寺(真言宗)がある。田多井村には観音寺、さらに上堀金村に小林寺(真言宗)が描かれているが、いずれも明治初年の廃仏毀釈によって廃寺となってしまう。なお、安樂寺は大きなお寺であったためか、門が描かれている。このように絵図で門が描かれるお寺は、三郷地区の浄心寺(現在と場所は違う)、平福寺、観音堂だけである。

なお、安樂寺の背後の山には、「城」、さらに「城主不知」とはいる。戦国時代の山城の城主も、一五〇年たつて忘れ去られてしまっている。

(原明芳)



長尾組絵図 堀金の村々

5

堀金の用水路

烏川扇状地の開発



空から見た堀金地域

安曇野の地は梓川左岸に位置し、小河川の扇状地が重なるように広がっている。堀金・穂高にまたがる烏川扇状地では、古くから自然流を利用した用水路があり、用水に沿った比較的狭い地域を潤してきた。

やがて自然流だけでなく、扇頂付近で取水して傾斜に沿って水を流す、「縦堰」が開発され始める。縦堰は耕地面積の拡大と共に距離を伸ばし、水がより遠くへ運ばれるようになった。しかし縦堰はあくまで標高に沿った水路であり、多くの耕

地を潤すには限界があった。そのため烏川扇状地の扇央部には未開拓の土地が広く残っていた。

それを解決しようとしたのが、土地の傾斜を横切るように流れる「横堰」である。この横堰を引くには、梓川扇状地に元々あった縦堰である立田堰、横沢堰、温堰、庄野堰などから水を引いてくる「西水」と、奈良井川や犀川から直接水を得ようとする「東水」の二つの手法があった。

市内でも特に広い扇状地である烏川流域は、水の浸透しやすい、水利に恵まれない土地である。ゆえにこの一帯の開発には、西水と東水を活用した横堰は必須であった。

堀金を潤す堰

堀金地域では岩原堰、田尻堰・田多井堰、上堀金・下堀金堰（現・扇町堰）が烏川から取水している幹線堰である。須砂渡で取水されたこれらの堰は、穂高方面へ流れる「下川」と別れて「上川」として分水され、更にその先で各堰へと別れる。明和期（一七六四～一七七二年）には大岩の下で二口取水し、分水前に一旦合流し下堀・上堀・岩原方

面と田尻・田多井へそれぞれ配水する仕組みになっていた。限られた水を使用するため番水が行われていたが、下流まで水が届かず苦勞したという。

一方、堀金南部の中堀や小田多井では、梓川から取水した温堰・住吉堰・小田多井堰などが利用されている。かつては上流の村々を潤して残された少しの水を使わざるを得なかった。また堰普請の時など、堀金から三郷や梓川地籍まではるばる出かけていく必要があり、大変だった。

しかしこれらの烏川、梓川から取水した堰だけでは、両河川とも十分な水があったわけではないため、堀金全域を潤すには充分ではなかった。そのため堀金の中央部あたりには、江戸時代中期まで未開発の山林や平地林が広がっていたという。

この慢性的な水不足を解消するため、「東水」である犀川・奈良井川水系から取水する構想が、歴史の中でいくつも考えられてきた。矢原堰（豊科・穂高地域）・新田堰（豊科地域）・勘左衛門堰（豊科・堀金地域）・拾ヶ堰（豊科・堀金・穂高地域）などがそれである。

とりわけ拾ヶ堰は七二頁でも述べる通り、堀金を含む広範囲を潤すこととなる安曇野でも屈指の横堰である。この開削には堀金の平倉六郎右衛門が携わっていたことは周知の事実であるが、その後の歴史の中でも堀金地域の人物が重要な役割を果たしている。大正九年（一九二〇）五月に

初めて施工された、拾ヶ堰が梓川を潜るサイフォン工事は、コンクリートサイフォンの優位性を提案した烏川村出身の青柳工学博士と、工事を命がけで成功させた烏川村長の黒岩重義という、堀金ゆかりの二人が大きく関わり成し遂げられた。

倉田村の開発と倉田堰

このように、堀金一帯は昔から、「開発できる土地があるのに水に恵まれない」という場所だった。そこで先人たちは、驚きの方法で水を確保した。それは、「他の地域へ流れる筈の水を、最上流部で流路を変えることで、自分たちの方へ引き込む」というものである。そうして引かれた水路が、倉田堰と新堀堰として現在も活用されている。

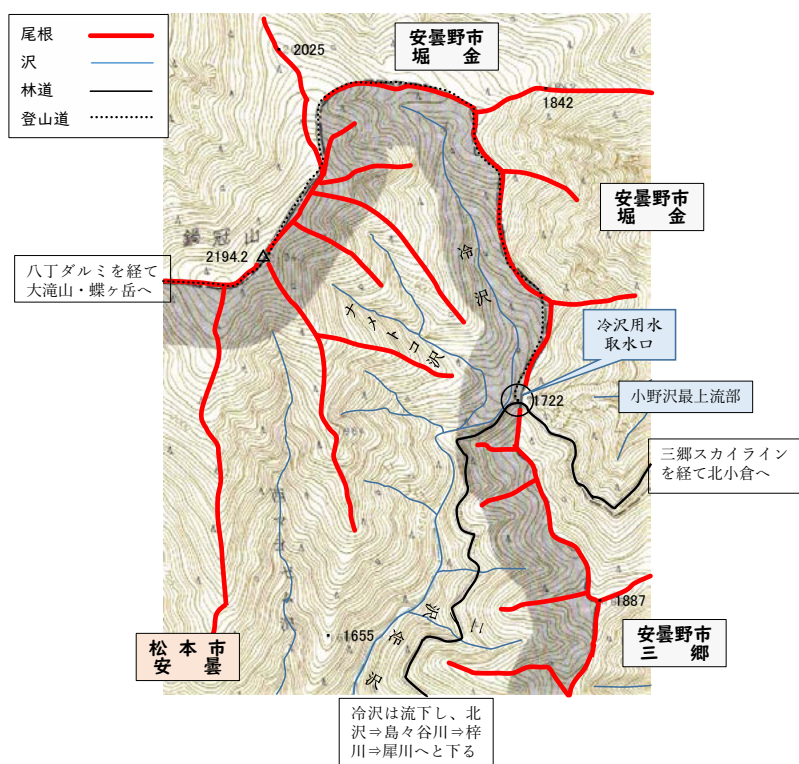
倉田堰は、烏川から分水し、長さ一八町（約一九八〇メートル）、幅二尺（約六〇センチ）の堰である。

倉田村は上堀金村に宝



県営烏川溪谷緑地内にあるかつての倉田堰跡

永二年（一七〇五）に開発された。もっぱら畑作中心の村落で、若干の開田はあっても、用水はほとんど飲み水だけしか使用することができなかった。そのため、寛政一〇年（二七九八）に田用水獲得のため願書を出した。しかし烏川用水は既に限界に達していたため、村民の願いは受け入



れられなかった。そこで当時の人々が考えたのが、鍋冠山の西を南に流れ、島々谷へ下る冷沢（現在は松本市安曇）の水を、尾根を越し烏川へと繋がる小野沢（安曇野市堀金）へ掘り切り廻し、烏川の水利権を得ることであった。梓川谷の入り四ヶ村は杣仕事そまの村であることや島々までは耕作地がほとんどなかったこともあり、沢水を使うことが容易にできると考えたのである。

そして文化七年（一八一〇）に願書を提出。翌年の文化八年（一八一二）には、藩の役人による検分が行われた。この計画は、倉田堰の取入口が烏川の最上流になることから、烏川から水を引いている村々から反対されたが、藩が取り成している。倉田堰は同年六月に工事が始まり、八月



倉田区公民館にあるパネル



水神祭の様子



現在の新堀堰

に完成した。完成した日は水神祭の日とされ、現在も四月末の休日に日にちを変え、倉田区の住民により行われている。また倉田区の公民館には、倉田堰について伝えるパネルが掲示してある。当時の人々の苦勞をしのぶとともに、その功績を今に伝えている。

新堀堰（堀廻堰） しんぼりせぎ ぼりまわしせぎ

倉田堰と同じように、新堀堰もまた上流で水路を変えた堰だ。新堀堰は堀廻堰ともいい、温堰の支堰の小田多井堰

から分水し、長さ三〇町（約三三〇〇㍎）、幅二間（約三・六㍎）の堰である。標高六〇〇㍎の等高線に沿って流れる横堰で、樽川に落ち掛け堰に流入している。

新堀堰は嘉永五年（二八五二）に開削が始まった。小田多井堰を分水し、小田多井堰の悪水（不要水）だけを引き取って、田多井村・田尻村・上堀金村・下堀金村の土地を潤そうとい

うものであったが、温堰との水利権などが問題となり工事は中断された。その後、文久元年（一八六一）に工事が再開され、三月一二日から四月一四日の約一ヶ月間、合計四万四〇〇〇人を動員して完成した。

その後、明治五年（一八七二）には、飛騨野麦谷の戸雑沢の水を信州側の大野川村前川に引き落としたことにより、新堀堰は梓川掛り温堰の水利権を得ることができたのである。

国営事業でかなった願い

河川からは遠く、水を得る努力を重ねてきた人々の思いが最終的に結実したのは、国営事業によるものだった。これは昭和五二年（一九七七）に完成した、梓川上流のダムの水を梓川扇状地にくまなく配水するという大事業だ。この事業の中で、従来の水路の改修や、扇頂部への灌漑が実現し、堀金全域に水が行きわたるようになった。

人がこの地に住むようになってから、ずっと水を求め続けた堀金。歴史に刻まれた様々な努力は、今、一面に広がる豊かな穀倉地帯として実っている。この実りがこの先も続いていくよう、願ってやまない。

（松澤果穂、千村裕一）

6 拾ヶ堰開削への挑戦



北アルプスに向かって流れる拾ヶ堰（中萱・じてんしゃひろば）

常念岳に向かって悠々と流れる拾ヶ堰。今や安曇野市内の代表的な景観として親しまれている。全長約一五㍎の間、およそ標高五七〇㍎の等高線上を流れる安曇野最大の横堰である。

江戸時代後期の文化一三年（一八一六）に開削された拾ヶ堰は、「柏原堰」とも呼ばれていた。中世の柏原郷では、現在の穂高柏原の北部を中心に開発が進んでいたが、南部の開田は近世を待たねばならなかった。原因の一つに、土中のリン酸の欠乏があったという。当時の人々は化学的な知識こそ持ち合わせてはいなかったが、梓川や奈良井川からの引水によって土質が改善されることは、長年の経験から知っていたらしい。

これに着目したのが、保高組大庄屋代番の等々力孫一郎と、柏原村の庄屋を務めた中島輪兵衛である。二人は奈良井川から引水する長大な堰の開削を思い立った。

当時「木曽川」と呼ばれた奈良井川からの引水を計画したのは、梓川の水量が不足していたからだ。梓川兩岸には、すでに一〇を超える堰の取入口が設けられていた。しかも右岸域の堰の多くは、排水が梓川に戻されずに、奈良井川

水系に流れ出ていた。そこで輪兵衛は、奈良井川から取り入れた「東水」を柏原まで送ろうと考えたのだった。だがそのためには、測量・土木に関する高い技術と知識が必要だ。「柏原堰」開削の主唱者に柏原村の住民ではない平倉六郎右衛門が加わっていたのは、その知識や経験を買われたからだろう。

平倉六郎右衛門は、下堀金村の作世話役の任にあった。作世話役とは、松本藩が寛政三年（一七九一）に村々に置かせた役職で、江戸幕府の寛政の改革に倣って行われた政治改革の一環であった。その役割は、農村内をこまめに巡回し、村民に耕作へ精を出すことや、「作間稼ぎ」といって農閑期の副業を営むことを勧めるほか、村内に悪地や無耕作地が出ないようにして村内の産業開発を進めることにあった。

中島輪兵衛が柏原村への堰の開削を計画していたころ、六郎右衛門は作世話役としてすでに大きな業績を残している。勘左衛門堰の大改修を行っていたのである。

勘左衛門堰の改修に学ぶ

勘左衛門堰は、貞享二年（一六八五）に開削された横堰である。「木曾川荒井前小麦測」、現在の松本市荒井附近で奈良井川の水を取り入れたこの堰は、同市島内の村々を灌

漑したのち梓川を横切り、流末は成相本村・町村の両村に至っていた。

しかし横堰のため、次第に流れが滞り、やがて水が届かなくなると、成相両村では長い間不作に苦しめられていた。奈良井川から島内を流れ、梓川に至る水路もいつしか使われなくなり、梓川から取水していた時期もあったようだ。そこで天明二年（一七八二）、小麦測から梓川の西岸まで改修工事が行われ、再び奈良井川からの導水が可能になった。

そして寛政一〇年（一七九八）には、さらなる大改修が行われる。この工事の担当人を務めたのが、六郎右衛門であった。この改修により、吉野・新田町の両村にも水が送



勘左衛門堰の流路跡（下堀）

られることになった。

だがさらに驚くべきは、堰筋が下堀金村まで延伸されたことだろう。成相両村への送水が限界だった従来からすれば、さらに数遠先の村の田まで灌漑するようになったのであり、飛躍的な進歩である。

現在の勘左衛門堰は、中堀集落の北で除沢よけざわに落ち、下堀には至っていない。だが下堀の段丘の下には今もその堰跡が残り、拾ヶ堰などの水が流れ下って水田を潤している。

勘左衛門堰改修の成功のカギは、土地の水平と傾斜を見極める技術にあっただろう。拾ヶ堰の開削工事は、その技術と経験を発展的に継承したものとみてよい。



勘左衛門堰の落ち口（中堀）

拾ヶ堰の開削に挑む①——堰筋の見極め

文化九年（一八一二）二月二日、中島輪兵衛と平倉六郎右衛門は、等々力孫一郎の家を訪れた。ここで三人は、堰の流路について相談している。

その詳細は省くが、完成時よりもやや低い場所を流路として想定していたようだ。その後の実地測量で、現在の流路へと調整していったのである。

だが、奈良井川から取り入れた水を、どこを目がけて流していくか、堰筋のポイントとなる各地点が見直されていく中、当初から変わらなかった場所がある。輪兵衛たちが「家岸の巾」と呼んでいた場所、これこそ拾ヶ堰が西から北へと流路を変える、通称「大曲り」の場所である。「巾」とは段丘のこと。大曲りの東方から流れてきて堀金小学校の前をほぼ直角に



通称「大曲り」附近の段丘（上堀）

曲がり、上堀の諏訪社に至る拾ヶ堰は、その北あるいは東にある堀金支所や体育館、道の駅などが集まる一画よりも一段高いところを流れている。この「家岸の巾」を目がけて水を流せば、柏原村まで水を届けることができるかと当初から考えられていたのである。

等々力家での相談ののち、輪兵衛と六郎右衛門は、幾度か養老坂（松本市のアルプス公園附近を通っていた坂）と、三郷小倉の室山に登り、「遠見」をして堰筋の見当をつけた。ここで二人は、この流路で通水が概ね可能であると見極め、孫一郎のもとに報告に出向いている。

標高という概念がまだない時代、開削者たちは五七〇坪という等高線ではなく、「家岸の巾」という途中の目標地点を定めて、取入口から柏原村までの流路を見極めた。標高が高いはずの山の方に向かって水が流れる、一見すると不思議な光景は、「家岸の巾」すなわち現在の大曲りへ水を送るという構想の結果なのである。

これ以降、文化一二年（一八一五）までの間に、実地での調査は行程の一部あるいは全部を含めて、少なくとも九回は行われた。松本藩側も協力的で、治水・利水を担当する川除方^{かわよけかた}の役人らが泊りがけで出張してくることもあり、綿密な検討が重ねられ、堰筋は何度も見直されている。

拾ヶ堰の開削に挑む②——協力と段取り

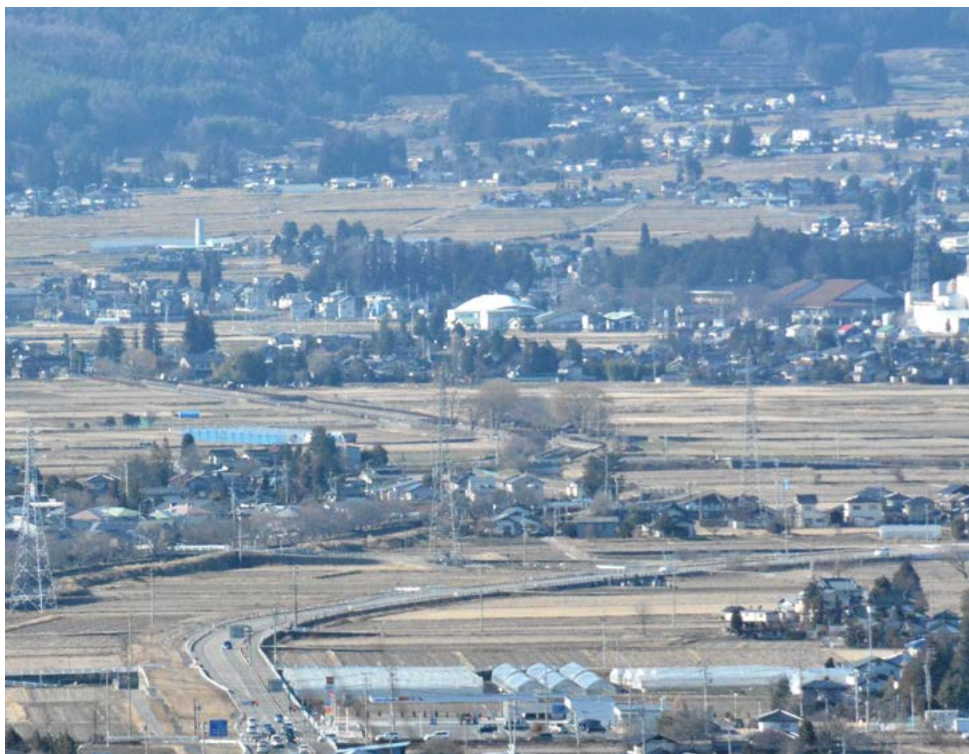
だが長大な堰を新たに開削するという壮大な計画は、百姓たちの間に農地が削られるのではないかという要らざる憶測を呼ぶ。このような動揺の広がりを防ぐため、計画は秘密裡に進められた。

輪兵衛と六郎右衛門が室山で遠見をした際は、「菌取り」（キノコ採り）と称して出かけている。また文化一二年六月一日に、実地検分に来た川除方の役人たちを新橋（松本市新橋）で出迎えるため、両人は「殺生釣^{せつしやうつ}り竿^{さだ}」を持って、釣りに行くふりをして出かけたという。

このような細心の注意が払われたが、周囲の知るところとなったようで、等々力孫一郎は暴漢に襲われて竹槍で足を刺され、後遺症が残ったとも伝えられている。

一方で、新堰の開削には多くの協力者を必要とした。孫一郎は、柏原村庄屋の関与一右衛門だけでなく、等々力村庄屋の白沢民右衛門、吉野村庄屋の岡村勘兵衛にも声をかけたらしい。彼らが計画に積極的に参画したことも知られている。新しい堰からの恩恵を期待したことは言うまでもないが、村や地域全体の発展のために私財や労力を投じることにも厭わなかったのである。

文化一二年一二月に松本藩へ提出した正式な開削願いには、一〇の村々が名を連ねた。すなわち、吉野・成相町・



堀金へと流れる拾ヶ堰（松本市・アルプス公園から撮影）

新田町・上堀金・下堀金・矢原・柏原・保高・保高町・等々力町の各村である（のち弘化二年（一八四五）に中堀新田村も組合加入）。開削直後の文書には「拾ヶ村最合新堰」の名がみえる。「最合」とは、共同して物事を行うことである。もはや柏原村のためだけの堰ではなくなっていた。拾ヶ堰の開削工事は、文化一三年二月に着工、五月まで行われ、微調整ののち、七月三日に通水をみた。開削工事を三ヶ月という短期間に圧縮したのは、土が凍みて固くなる冬場を避け、なおかつ田植えが始まる農繁期の前に終わらせる必要があったからだ。

この突貫工事を速やかに進めるため、工事現場となる堰筋全体が一九一の小さな丁場（区間）に細分された。拾ヶ堰の設計書では、掘削する土量に応じて丁場ごとに必要な人足の数が算出されている。この小区間を、取入口から梓川までを上丁場、梓川左岸から上堀金村までを中丁場、下堀金村から烏川への落ち口までを下丁場と三つにまとめ、上・中・下の大きな帳場ごとに一斉に掘削作業に取り掛かせた。

開削工事には、延べ六万七一二二人が動員された。これには先の一〇ヶ村が属する成相組・長尾組・保高組のほか、周辺の松川組、池田組、上野組からも人足が出されている。大勢の人々を短期間で効果的に動かすために、綿密な計画が立てられていたことだろう。



挑戦はつづく——拾ヶ堰その後

拾ヶ堰は、勘左衛門堰など従来の堰の開削や改修から学び得た経験知を結集し、等々力孫一郎、中島輪兵衛そして平倉六郎右衛門をはじめとする安曇平の人々が心血を注いで築き上げた歴史的遺産である。

だが拾ヶ堰が開削されたからといって、すぐに安曇平の開田が進んだわけではない。ここから枝堰を引き、荒地を開墾して水田を開発する、あるいは畑を田に転換する作業を行わねばならない。このような作業によって、徐々に水田が広げられた。田の面積にしてどれだけ増えたのかはわからないが、一〇ヶ村の合計村高が天保年間（一八三〇—四四）までに一五一四石増加したという集計もある。堰開削前の増加見込みが九五〇石であったから、予定を大幅に上回る成果だ。

拾ヶ堰そのものも、早くも開削の翌年には改修工事が行われ、不具合箇所の改善が図られている。また定期的な堰ざらいはもちろんのこと、長年の使用により生じてきた不具合や破損箇所の補修や改修も必要だった。その度に多くの先人の尽力があったことを忘れてはならない。

平成二八年（二〇一六）には開削二〇〇周年を迎え、世界かんがい施設遺産に登録された拾ヶ堰。今でも多くの人々の生活を潤している。

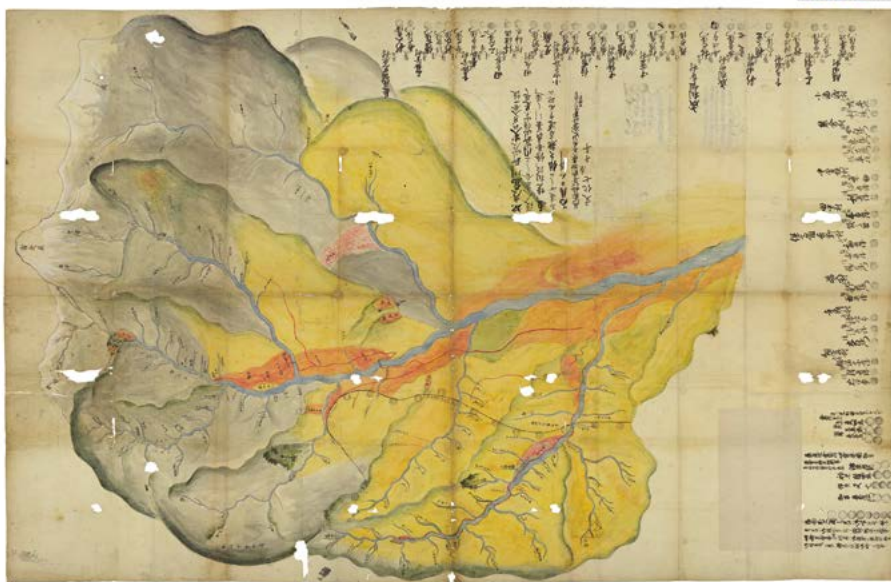
（逸見大悟）

安曇野を象徴する鋭鋒・常念岳から里へ広がる烏川山であるが、大平原付近を境とし、里側と山側で大きく区分される。現在、里側は針葉樹と広葉樹の混合林であるが、赤松・唐松・杉・桧等は大部分が戦後に植林されたものであり、人の手が入った人工林である。対して山側は広葉樹も分布しているが、桧・榧・樅・栂等針葉樹を中心とした自然林である。

下図は江戸時代後期の文化七年（一八一〇）に、前年の入会争論解決の際に描かれた烏川山の絵図である。黄緑に着色された部分が草地の中に広葉樹の低木が広がる地帯、灰色に着色された部分が針葉樹林帯である。

林業

針葉樹林帯は松本藩有林であり、桧・榧等は御用材として厳しく管理されていた。絵図からは、烏川二の沢上流一帯、本沢上流崩沢から下流の一帯が主な供給地だと窺える。伐り出された木材は大平原付近へ集積され、烏川を流して青花見村の土場まで運ばれた。



烏川山入会絵図（安曇野市文書館所蔵 尾日向家文書）

また、村々の堰普請や河川橋梁の修復に必要な材木は、藩の許可を得てここから伐り出された。

入会慣行

江戸時代において、入会林は食物の煮炊き等の燃料となる薪・ぼや、田畑の肥料となる苧敷、そして牛馬の飼料となる馬草・藤葉などの供給地であり、人々が生活していく上で欠くことができない場所であった。

烏川右岸の小野沢上流一帯は、長尾組・成相組・保高組の二三ヶ村の入会地として松本藩から利用を許可されていた。但し、刈り取ることができる品目は村によって異なっており、山本五ヶ村は、薪・ぼや（燃料）・苧敷（肥料）・馬草等（飼料）の全てを刈り取る権利を有しているのに対し、里郷村々はその品目は少なくなっている（下表参照）。これは、古くからの慣行による既得権もあるだろうが、里に下りるほど村境の入会原が広がっており、許可されない品目はそこで賄えたということだろう。

この他、烏川山には村単位で多くの入会林があったが、戦後、燃料については薪がプロパンガス・石油に、肥料は苧敷がれんげ田、さらに化学肥料にとって代われ、また飼料の面においては馬が動力農機具にとって代わられたことで馬草の需要がなくなり、それらの供給地としての入会

林はその歴史的役割を終えた。

なお、余談だが大庄屋山口家には、須砂渡から烏川添いに大平原を経由し、三又付近から大滝山を越えて上河内（上高地）徳沢へ下る道があったことを示す古文書が残されている。江戸時代はここを通じて人々は飛騨へ行き来していたのだろう。もしかしたら、戦国時代末期、失脚して越中へ逃れた堀金平大夫盛広もこの道を辿ったのかもしれない。

（丸山 潔）

村	馬草 (飼料)	苧敷 (肥料)	藤葉 (飼料)	笹茨 (飼料)	薪・ぼや (燃料)
A 山本 3ヶ村	○	○	○	○	○
B 準山本 2ヶ村	○	○	○	○	○
C 里郷長尾 3ヶ村	×	○	○	○	○
D 里郷成相 3ヶ村	×	○	○	○	○
E 里郷 12ヶ村	×	×	×	○	○

烏川山入会慣行（○：刈り取り可 ×：刈り取り不可）

- A 山本3ヶ村

B 準山本2ヶ村

C 里郷長尾3ヶ村

D 里郷成相3ヶ村

E 里郷12ヶ村
- 岩原村・上堀金村・下堀金村（長尾組）

田多井村・田尻村（長尾組）

小田多井村・中堀新田村・中萱村（長尾組）

成相町村・本村・新田町村（成相組）

細萱村・寺所村・踏入村・吉野村（保高組）

熊倉村・小海渡村・飯田村・中曽根村・上鳥羽村・下鳥羽村・真々部村（成相組）

住吉村（長尾組）

8 山の信仰と麓の寺院



立岩（権現岩）と秋葉神社の祠（岩原）

岩原城跡の尾根を下りていくと、立岩（権現岩）が姿を現す。かつて地域の人々が雨乞いの祈りを捧げた巨石である。また城跡から南に続く尾根を登ると、住吉神社の奥社があり、さらに虚空蔵菩薩を祀っていたと思われる角蔵山の山頂にたどり着く。その山麓には、かつて左東寺という真言宗寺院があったというし、須砂渡には山神社がある。また小野沢を遡れば眼病に効験ありといわれたお種の水がある。いずれの社祠も成立時期は不明だが、古くからこの

山一帯が信仰の場であったことは疑いない。

信仰の山という性格を持っていた岩原の古城山。かつてその東麓に二つの寺院があった。立岩山大同寺と宝降山安楽寺である。ともに明治初年の廃仏毀釈により廃絶し、今は山林の中にその痕跡を留めている。

大同寺と薬師信仰

岩原城の直下に「古薬師」と呼ばれる平地がある。

ここの湧水は赤い水で、鉄鉱泉だったらしい。「渋湯」と呼ばれ、湯に沸かして使うと特に皮膚病に効果があったという。大正の終わるか昭和の初めごろまでこの水を利用した湯屋があった。

そしてこの湧水が病に効



大同寺古薬師の平



旧大同寺の薬師堂

くことから、かつてはこの平地に堂が建てられ、薬師如来が祭られていた。この薬師堂を管理していた別当寺が、立岩山大同寺である。江戸時代には同じ真言宗の栗尾山満願寺の末寺になっている。

本尊の薬師如来立像は、昭和九年（一九三四）に焼失してしまったが、『堀金村誌』に写真が載せられている。それによると、仏像を納めた厨子が、戦国時代前期の永正一六年（一五一九）に造られたという。このころにはすでに薬師堂ならびに大同寺が成立しており、現段階では大同寺が堀金地域では最古の寺院であると考えられている。効能のある湧水への素朴な信仰が、薬師信仰と結びつき、靈験あらたかな祈禱系寺院が創建されたものだろう。

現在の薬師堂は、古薬師の平より直線距離にして五〇〇メートルほど東にある。江戸時代の正保四年（一六四七）に大同

寺の境内に移り、さらに延享元年（一七四四）に現在地に移された。現在の建物は昭和六一年（一九八六）に建替えられたものである。このお薬師様も眼病に効果があるとされ、五月と十一月にはお薬師様の縁日が催されている。昔から、病を治すという薬師如来の仏力が信じられてきた堂である。

安楽寺の大伽藍

大庄屋山口家の南に、大きな宝篋印塔や「妙典一千部」と大書された石柱が立っている。以前は大きな松の木もあったが、枯死してしまった。それでも安楽寺の大門としてひととき目を引く一画である。

ここから古城山の方へ入り、旧大同寺の薬師堂の脇を過ぎて堀金霊園の駐車場の入口に至ると、安楽寺の山門の礎石が確認できる。さらに奥に進めば、山林に覆われた高い石垣が現れる。曹洞宗寺院・宝降山安楽寺の石垣である。

これだけでも安楽寺の往時の威容を窺い知ることができ、元禄十一年（一六九八）の古文書によれば、東西二町（約二一八メートル）、南北一町四〇間（約一八二メートル）に及ぶ広大な屋敷が構えられていた。江戸時代後期の絵図には、漆喰で塗られたアーチ型の通路を設えた竜宮造りの鐘楼門も描かれている。また豊科新田の法蔵寺には、かつての



安楽寺大門の松と石造物群（平成 26 年撮影）



安楽寺跡の石垣



法蔵寺の庫裡（新田）



江戸時代後期に描かれた安楽寺の伽藍
山口家文書（安曇野市文書館蔵）

安楽寺の建物が残されている。廃仏毀釈によって廃寺となった安楽寺の庫裡^{くら}が、穂高の商家・小川家に移築されたのち、明治四五年（一九一二）に法蔵寺の庫裡^{くら}として再利用された。その建物の大きさを見ても、往時の大伽藍の有様が偲ばれる。

安樂寺の開山と曹洞宗の教線拡大

松本藩が編纂した地誌『信府統記』によれば、安樂寺は、往古は臨済宗の寺であったが、「南浦玄清（余）大和尚」により曹洞宗として開山され、堀金安芸守盛公が開基したという。だが南浦宗清（余）禪師は永正三年（一五〇六）に示寂したと伝えられている。当時、堀金郷は細萱氏の勢力下にあり、堀金氏が仁科氏から分かれて当地を支配する以前のことである。南浦禪師を開山として迎えたのは、細萱氏だったのかも知れない。

南浦宗清は、能登の總持寺（余）の系列に連なる僧侶である。鎌倉時代末期に創建された諸嶽山總持寺は、曹洞宗の中でも大きな勢力を持ち、現在も永平寺と並ぶ曹洞宗の大本山である。そしてこの法流を受け継いだ禅僧たちが各地で寺院を開いていった。

なかでも相模（神奈川県）の大雄山最乗寺を開山した了庵慧明（余）の法孫には、大町市の神龍山大澤寺を開山した絶方祖裔（余）や、穂高有明の安養山青原寺を開山した蘭如（余）従賀ら（余）がみえる。彼らは美濃（岐阜県南部）の祥雲山龍泰寺の出身で、それぞれの寺も龍泰寺の末寺となっている。

安樂寺の場合は、江戸時代まで甲州の朝陽山清光寺（余）（現在の山梨県北杜市長坂町にある寺）の末寺であった。南浦宗清は、安樂寺にやってくる以前の文明七年（一四七五）

に清光寺を開山しているほか、佐久市望月の城光院も開山したと伝わる。また南浦宗清の師僧たちも甲州や伊豆で禅宗寺院を開山しており、先の最乗寺の法流に連なっているのである。いずれも、室町時代後期に曹洞宗、特に總持寺の流れを汲む教団の教線拡大の中で開山された寺院である。

『堀金村誌』では、前述の大同寺が地頭領主のために加持祈禱を行う祈願所だったのに対し、安樂寺は菩提を弔うための位牌所であったと位置づけられている。

武田氏が安曇郡に侵攻する七〇年以上も前に、甲州の禅宗寺院が当地と関わりを持っていたことは興味深い。

孤峯院と自性寺

總持寺に連なる禅宗寺院とえば、大町市の大洞山靈松寺も忘れてはなるまい。『信府統記』によれば、靈松寺は実峰良秀（余）による開山とある。先の最乗寺とは別の法流にはなるが、やはり總持寺の流れを汲む禅僧である。そして明治初年にこの寺の住職を務めた安達達淳（余）も、堀金とは浅からぬ宿縁を持っていた。

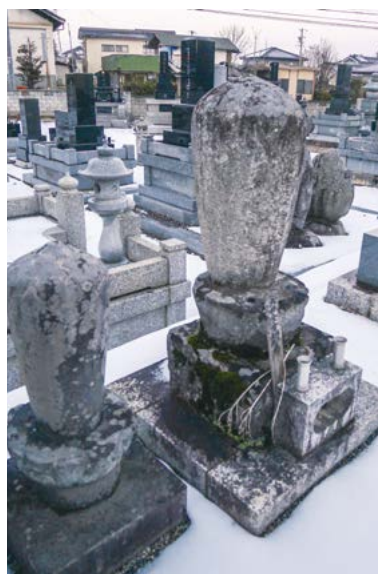
安樂寺に隣接し、その末寺であった臥雲山孤峯院。現在は国営アルプスあづみの公園内の石垣にその跡を留める。安樂寺二代住職・高翁宗松（余）の隠居寺がその始まりだった。



孤峯院跡の石垣（岩原）



現在の自性寺（上堀）



安達達淳の墓（上堀）

ただし、孤峯院は江戸時代の一時期、堀金中学校南側に移転している。その後岩原に戻っていたようだが、明治初年に廃仏毀釈の難に遭う。住職を務めていた智栄^{ちえい}は還俗させられ、その山号を名字として名乗った。のちにガラ紡を發明した臥雲辰致のことである。

ところで、廃仏毀釈の波は霊松寺にも及んだ。住職の達淳は廃寺の説得に來た松本藩の役人に対し、刺し違える覚悟をもって対峙する。藩の役人もその氣迫に押

されたが、結局は抗しきれずに寺を出て、各地を転々とする憂き目を見た。

やがて廃藩置県によって松本藩が廃止され、廃仏毀釈のほとぼりが冷めたころ、達淳は各地の寺院の再興に動く。かつて松本藩知事の戸田光則^{みつひさ}は廃仏毀釈の範を示すため、自らの菩提寺であった全久院を真つ先に廃寺にしていた。この寺を現在地に再興させたのも達淳である。

のちに達淳は堀金の地を訪れ、現在の堀金中学校南側の孤峯院の旧地に寺を建て、自性庵と号した。現在の明亀山自性寺である。

自性寺には「前總持靈松三十世玉翁達淳大和尚禪師」の位牌が安置され、裏の墓地には達淳の墓もある。旧松本藩領内で廃仏毀釈の荒波に耐え、仏教の再興に尽力した僧侶のひとりがこの地に眠っている。

田多井の観音堂

角蔵山東麓の緩斜面には、田多井の集落が広がっている。春四月、緑の山を背にしたその斜面の所々に、いくぶん霞



観音堂（田多井）

がかかって浮かぶ万朶ばんだの桜を望むことができる。田多井集落には、神社や墓地に植えられた桜の巨木が多い。

その桜の名所のひとつに、観音堂がある。江戸時代まで福聚山ふくじゅさん観音寺という寺があった。長尾山平福寺末の真言宗寺院で、本尊十一面観音像を安置した本堂は四間四面の東向きであったという。



十一面観世音菩薩立像
（田多井）

観音堂は、江戸後期までに成立した観音霊場・川西三十四所のひとつとして信仰を集めた、古くは角蔵山の東の支峰、寺山の峰にあったが、のちに麓近くの堂平に下り、さらに現在地へと移ったと伝えられる。

堂平と推定される山中には、旧堀金村で立てた標柱が残っている。豊科郷土博物館の原明芳館長によれば、この場所より少し下にある数段の平地の方が、建物のあった場所として自然なのではないかという。ここにはわずかに沢水も流れており、湧水に対する原初的な信仰が、仏教、特に観音信仰へとつながっていったことだろうか。

岩原・田多井の前山は、雨乞い、湧水、鉱泉などに対する素朴な信仰が、薬師如来や観世音菩薩の利益を祈る祈祷の寺、そして禅に打ち込みつつ祖先を拝する位牌所と、様々に形を変えて展開されてきた山塊である。（逸見大悟）



堂平を流れる沢（田多井）

田尻不動堂の目赤不動

堀金田尻区にある不動堂に、目が赤いことから『目赤不動』として親しまれている不動明王像がある。本堂は西向きで、間口三間、奥行三間あり、昭和三年（一九二八）に前の堂宇が焼失したことに伴い、昭和五年（一九三〇）三月に再建された。

本尊の不動明王像は、総高が一八七センチメートルあり、地元では東京目黒の目黒不動尊、目白の目白不動尊と並んで、日本三不動の一つだともいわれている。また、脇本尊の矜羯羅・制吒迦の二童子は総高一二五センチメートルある。

この不動明王像は、慶長三年（一五九八）地元浅野家の祖、勝覚の代に醍醐寺三宝院より「大学院」の称号を下賜された時に寄進されたと伝えられている。後に、三代円海の享保年代に「正福院」と改められた。はじめこの不動尊は、旧千国街道沿いの北西あたりに堂宇を建てて安置していたと伝えられている。そして、七代長栄の代に安永五年（一七七六）から天明元年（一七八一）までの六ヶ年かけて、上堀金境の現在の不動堂へ通じる道の反対側のあたりに遷されたという。この地には四〇年余り置かれていたが、文政五年（一八二二）財政事情のためこの土地を売却



田尻不動堂



不動明王像（目赤不動）

することとなり、浅野家の屋敷に不動尊ならびに堂宇と庫裡などが移された。

このように不動尊は浅野家に安置されていたが、明治八年（一八七五）に同家墓地の傍に堂宇を建て、そこに不動尊を遷座した。そして田尻区へ奉納され、以後は区で管理するようになった。その後、前述の火災と再建を経て、現在の形となっている。

その後、本尊の不動明王像は、平成二〇年（二〇〇八）一〇月二九日に安曇野市有形文化財に指定された。

（松澤果穂）



不動明王像と脇本尊

10 神社本殿小ばなし

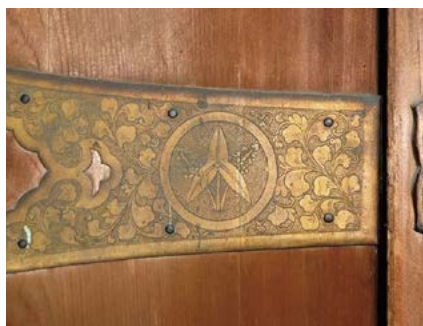
小田多井の八幡神社本殿

一般に、建物の新築や修繕の際には、施工した年や携わった職人の名前が「棟札」に記される。神社や寺などには棟札が大切に保管されていることが多い。小田多井に鎮座する八幡神社本殿（市指定文化財）は、棟札から寛延二年（二七四九）の穂高神社の遷宮の際に払い下げた古殿を移

築した経緯がわかっている（穂高神社の払い下げの本殿の詳細



小田多井の八幡神社本殿



立沢潟が施された金具



棟札



小田多井の八幡神社本殿（幣殿から撮影）

については、本シリーズ『豊科の宝』を参照）。古殿を「再利用」するという行為は、新殿を一から作るより、経済的かつ合理的であるのは明らかで、今風に言うならば、サステイナブルということだろうか。一方、この本殿が穂高神

社の社殿としていつ製作されたかという記録はない。しかし、本殿に使用されている金具には立沢潟の家紋が施されていることから、松本藩主が水野氏の時代につくられたことを物語っているのがおもしろい。

ところで穂高神社から払い下げられた古殿を「再利用」している本殿は市内に九棟あることがわかっている。どれも共通する建築的な特徴がみられ、「穂高造り」などと呼ばれており、安曇野の社寺建

築の重要な要素となっている。今後部材に施された装飾などに認められる違いを時系列で比較研究することにより、「穂高造り」や安曇野における建築の変遷が明らかになると期待されている。

堀金が生んだ名工豊八 田多井の加茂神社本殿

田多井集落より少し小高い森の中に加茂神社はある。境内には立派な桜があり、春に訪れてみるのもいい。

こちらの本殿（市指定文化財）にも棟札がいくつか保管されており、建築年は寛政四年（一七九二）、携わった大



田多井の加茂神社本殿

工の棟梁として岩原村の（浅川）豊八の名が記されている。

この豊八は、大隅流を代表する諏訪の伊藤（柴宮）長左衛門矩重に師事し、安曇

野地域を中心に多くの社寺建築を手がけた名工である。地元

岩原地区には勇壮な担ぎ舟のお祭り（市指定文化財）で有名な砂渡山神社が急峻な斜面に鎮座している。こちらの本殿もやはり豊八が、加茂神社建設と同年に手掛けている。

この他、伊藤長左衛門と豊八のコンビは、豊科新田にある周岳山信楽院法蔵寺の山門（長野県指定文化財）を、寛政元年（一七八九）に完成させている。

豊八が手がけた彫刻はどれも隆々しく、見る者を圧倒させる。地元大工の存在を誇示しているかのようなのである。

（堀久士）



山神社本殿の木鼻の獅子

1 砂渡山神社の担ぎブネ

砂渡山神社

岩原の氏神、砂渡山神社は入会村の人々が薪炭などを取りに山に入る際、山での安全を祈願するためにまつられたものである。烏川右岸の鍋冠山などは、江戸時代から堀金だけでなく豊科の村々も入会として利用していた。山神社はその山の口でもあったので、昭和初め頃までは、山の口が開く正月一七日に初山神のまつりが行われていた。

言い伝えでは、山神社の神は、烏川が増水した時に流されてきた祠を岩原の人たちが引き上げたものだという。また、もとは烏川の対岸にある穂高牧でまつられていた神であったともいう。そのため現在でも山神社のまつりは、牧の氏子総代が牧大明神の幟を持って来なければ始まらない。

もともと岩原の氏神は上堀の諏訪社だった。しかし、山神社の神は山の安全だけでなく、蚕の豊作やお産の神様として岩原の人々に産土神のようにまつられてきた歴史があり、昭和三八年（一九六三）に正式に岩原の氏神となった。山神社のフネまつりは、かつては夏、それから秋に変わり、現在は四月最終土・日曜日に行われる。夏から秋に変わっ



た理由はわからないが、秋から春に変わったのは、夜宮（宵祭り）が寒かったことと、養蚕が盛んだった頃に一〇月の祭日はちょうど秋蚕が忙しい時期と重なったためだという。

岩原のフネは、県道四九五号線と大庄屋山口家の門前を通る道とが交わるフナハリバと呼ぶ場所で作られる。青年団がフネの中心部分である櫓と担ぎ棒でもある腕木を組み、縄で前後に張り出す刎木を取りつける。フネが形作られるとヒノキやサワラの若木と幕でフネを飾りつける。刎木などは区有林などから調達する

安曇野で唯一の担ぎブネ

安曇野のまつりではよくフネと呼ばれる山車やブタイが曳き出される。その中で岩原のフネは唯一、車輪のない担ぎブネである。飾りは幕とヒノキなどの葉だけだが、重く、担ぐには三〇〜四〇人の男性が必要である。また、まつりの終わりにフネを転がすことも、安曇野ではほかに例がない。

四月二十九日の本祭り、大勢の氏子の男性たちに担がれたフネは、フナハリバからフナツキバのセンドイシへと向かう。お囃子はなく、太鼓に合わせた「ワッショイ ワッショイ」という声が響き渡る。フネはセンドイシを三周後、山神社へと一気に担ぎ上げられる。

平成一〇年からは、子どもたちが担ぐ、小ぶりの子どもブネが先行するようになった。子どもブネは山神社の入り口までで担ぎ終わるが、大人のフネは境内に担ぎ込まれ、オフリョウイシと呼ぶ岩の前に安置される。神事が終わり、フネの担ぎ手たちがお祓いを受けると、牧諏訪神社の氏子総代が持つ幟を先頭に、氏子、フネの順にオフリョウイシを三周する。その後、フネは境内の奥から入り口に向かって転がされる。山神社の境内は傾斜していて奥に建つ社殿に向かって高くなっている。坂を転がされたフネは時に刎木が折れ、入り口の車道にはみ出すまで転がされることも



センドイシのある場所は、かつては牧地区へと渡る烏川の渡し場であり、山神社の神が引き上げられた場所だという

ある。

岐路に立つフネまつり

岩原では子どもたちが楽しめるようにと、子どもブネを作ったり、地元出身者のみならず、新しく移り住んだ住民も分け隔てなくまつりに参加している。宵祭りには、ビンゴ大会などをおこなってまつりを盛り上げる工夫をこらし

たことで、多くの住民が参加して楽しむまつりになった。しかし、令和元年（二〇一九）のコロナ禍からまつりにフネを出せない状態が続いている。三〇代、四〇代の担ぎ手が減少していること、フネが出せないことでまつりの寄付金が集まらないことなどが影響しているという。

安曇野で唯一のフネが、存続の岐路に立たされている。

（宮本尚子）



牧大明神の幟を先頭にオフリョウイシを回るフネ



境内の坂を転がされるフネ まつりのクライマックス



子どものフネが登場したことで、フネを子どもブネ、大人ブネと区別して呼ぶようになった

2

集落をつなぐまつり

川口の道祖神まつりと観音堂まつり



道祖神碑の前で一杯

川口のまつりと差し回し

下堀西交差点から豊科大天井岳線（県道四九五号線）を西へ向かって二・一キロメートルほど行つたところ、道の南側に小さな堂がある。堂は観音堂と呼ばれ、中には聖観音菩薩がまつられている。さらに進むと、北側には道祖神碑や二十三夜塔などがまつられている。堂も碑も川口（かわぐち）という集落でおまつりしているものだ。

観音堂のまつりは秋、道祖神のまつりは早春に行われ、まつりにかかるお金は「差し回し」で集金する。

川口は約四〇軒の集落で、南北でおよそ半分に分かれている。南と北で一軒ずつがまつりの当番になる。当番になった家では、一戸ほどの長さのわら縄にまつりの会計と集金額、それに氏名を書いた紙を挟んで回す。これを差し回しと呼ぶ。明治時代から行われてきた集金方法だ。差し回しが回ってきた家では、布や障子紙に包んだ小銭を、撚（よ）ったわら縄の間に挟んで次の家に回す。今ではあまり見られない集金方法なので、当番で回した家の中には記念にとってあるという家もある。



酒宴のつまみは煮干しやすめるめなど

一月に行われる
観音堂まつりでは、観音堂をきれいにしてから燈明を灯し、花やミカンなどをお供えする。夕方になると集落の人々がお参りをしに堂に来る。かつては、御供の餅とミカンを撒いたという。
コロナ禍で最初

道祖神まつりは午後六時くらいから始められる。まだ春が浅く陽が落ちると肌寒いため、火を焚いて暖を取る。当番の家では、酒と煮干し、漬物や煮物などのつまみを用意する。時間になると少しずつ人が集まりだし、酒宴が始まる。酒宴は、暗くなっても続き、早春の宵闇のなか、よもやま話に花が咲く。

川口の道祖神碑は文字碑と双体道祖神碑の二体。ほかに、念仏供養塔、天神宮文字碑、二十三夜塔や木造の祠もある。祠は疱瘡神ぼろこと言い伝えられており、八王子様と呼ぶ人もい



観音堂にお参りする集落の人々

の緊急事態宣言の出た令和二年（二〇二〇）からは、道祖神まつりではお参りした人に酒とつまみを配ることにして、まつりでの飲食は控えている。観音堂まつりも時間を区切ってお参りするようにした。令和三年（二〇二三）の観音堂まつりは一月一五日午後四時から五時までにお参りしてもらうようにしたところ、一人がお参りに訪れたという。ミカンなどの供物は袋に入れて配った。

コロナ禍下でまつりのかたちは変わっても、昔ながらの差し回しで費用を集めることは変わらないという。

川口という集落

江戸時代末期に建てられた道祖神碑や二十三夜塔には、「川口村中」と刻まれている。しかし、川口は当時から今まで、村や区として成立したことはなく、現在も行政区では岩原・倉田・扇町とに分かれている。

川口は、江戸時代に近隣の村々の出身者が切り拓いた土地である。扇状地の扇央部にあたり、扇央特有の礫が多く水がしみこむ土地のため、水田には向かない。それどころか、暮らしの水を得るにも大変な土地でもある。開墾するには相応の苦労があっただろう。『堀金村誌』によれば、隣り合う集落、扇町が水田化されたのは、拾ヶ堰が開通した文化一四年（一八一七）以降である。奈良井川から取水し、



差し回しで集金した祭費

水量豊富な拾ヶ堰が開通したことで、下堀堰に余剰の水が生まれ、その水で開田することができた。扇町では、開村当初、飲料水を手に入れるにも遠くまで汲みに行ったというから、おそらく川口も同じ状況で、拾ヶ堰開通後によりやく水田ができ始めたのではないだろうか。

川口の人々は、同じ土地に暮らす仲間として、互いに助け合って暮らしてきた。行政区では分かれているとはいえ、川口の人々は今でもまつりを通して集落としてのつながりを持ち続けている。

（宮本尚子）

3 新屋の馬頭観音講



田んぼの中の馬頭観音を祭る

かつて農作業やモノを運搬するとき、馬は重要な労働力であった。馬一頭が発揮する仕事率を一馬力といい、人間の四倍の力があるとされている。人が何人がかりかでないければならない田起こしなどの仕事も、馬に犁^{すき}をつけて行えば人力だけで行うよりはかなり短い時間で終わらせることができる。したがって、多くの農家では馬を飼い、農業に使っていた。

また多くの家の入り口近くには馬屋^{うまや}が設けられ、敷き藁をしいた中で飼育していた。田仕事などの後、自分たちが休んでぼた餅などを食べたりするときは馬にも与えて休ませていたという。馬は家族同様であり、その健康状態も常に気にかけて毎日を暮らしていたのである。

そして、馬が死ぬと、馬捨て場に埋めて馬頭観音を建てて供養した。馬頭観音は石像の上に馬の顔が載った像容が多くみられるが、「馬頭観音」と刻まれた文字碑もみられる。これらは、家の入り口などに立てられていたり、道の辻に道祖神などとともに祀られていたりする。ちなみに、『これぞ安曇野 岩原のタカラ』に載せられた、「タカラマップ」によれば、岩原だけで一二基の馬頭観音が存在するとされ



馬頭観音講の幟

ている。もちろん、馬頭観音はほかの地域でもよく目にすることができる。それだけ、馬の飼育と利用が盛んであったことがうかがえる。

馬だけでなく牛も同様で、牛を飼育している場合は死んだときに「大日如来」^{だいにちてよら}と刻んだ石碑を建てる事が多く、馬頭観音と同じ場所に祭られている光景も目にすることが

できる。

岩原区の新屋には「馬頭観世音」と刻まれた大きな石碑が建てられており、毎年三月二〇日頃、その碑に参拝したのち、碑の前で飲食をすするお祭りが行われている。昭和二五年（一九五〇）には四〇数軒の参加があったが、現在は一〇軒ほどに減少している。馬も牛も農作業の労力として使用されることはなくなっているが、かつて自分たちの暮らしの助けになってくれた動物への感謝の気持ちは、現在の人々にも受け継がれ、その信仰も伝承されているようだ。

（倉石あつ子）



川口の観音堂前の馬頭観音碑



さんぞこ・にぞこ（村上紀子画）

世の中には物覚えのいい人もいれば悪い人もいる。要領のいい人、悪い人、器用な人、不器用な人さまざまである。お坊さんのお経などは、繰り返し繰り返し毎日詠むことによつて覚え、唱えられるし、漢籍なども繰り返し読んで諳んじることができるようになり、そうなるという意味も理解できようになるのだという。

さて、堀金の岩原には、「さんぞこ」「にぞこ」と呼ばれる池がある。この不思議な名前には、物覚えの悪い子どもに関する、恐ろしい話が伝わっている。

むかしむかし、岩原の安楽寺には近在の子どもたちがお坊さんになるために、あるいは字問をするために、小僧として弟子入りして住んでおりました。何人かいる小僧の中には、なかなかお坊さんの言うことが理解できずに叱られたり、うまくお経が詠めなかったりする子もいました。

ある日、なかなかうまく仕事や修行ができない小僧に腹を立てたお坊さんは、その小僧を寺の前の池に投げ込んでしまいました。小僧は一度浮かび上がりましたが、また沈められてしまい、もう一度浮かび上がったのですが、また

沈められて、とうとうそのまま浮き上がってきませんでした。

三度目に沈んでしまったのでその池を「三度湖」「三度底」と呼びました。また、他の小僧も別の池に投げ込まれ二度目に沈んでしまったので、その池を「二度湖」「二度底」と呼んだそうです。今でも池の底から小僧さんの声が聞こえてくるといいます。

どうしてこんな恐ろしい話が寺のお坊さんにかかわる話として生まれたのかは不明である。この池は田んぼの用水として、ムラの人々が作った人工のため池である。寺とム



藪に埋もれた現在のさんぞこ

ラの家々との間に何か争いごとでもあって、こんな話が生まれたのだろうか。あるいは、危険な池に子どもを近づけないための作り話だろうか。いずれにしても、亡くなった人の霊を弔う立場にあるお坊さんの所業とは思えない言い伝えである。

現在も池はあるが、特にさんぞこの方は藪に埋もれ、地元の方の案内がなければわかりにくくなっている。また、蛇や虫、特にマムシが多く生息するらしく、訪れたいならなるべく地元の方に案内をしていただくことをお勧めする。

(倉石あつ子)



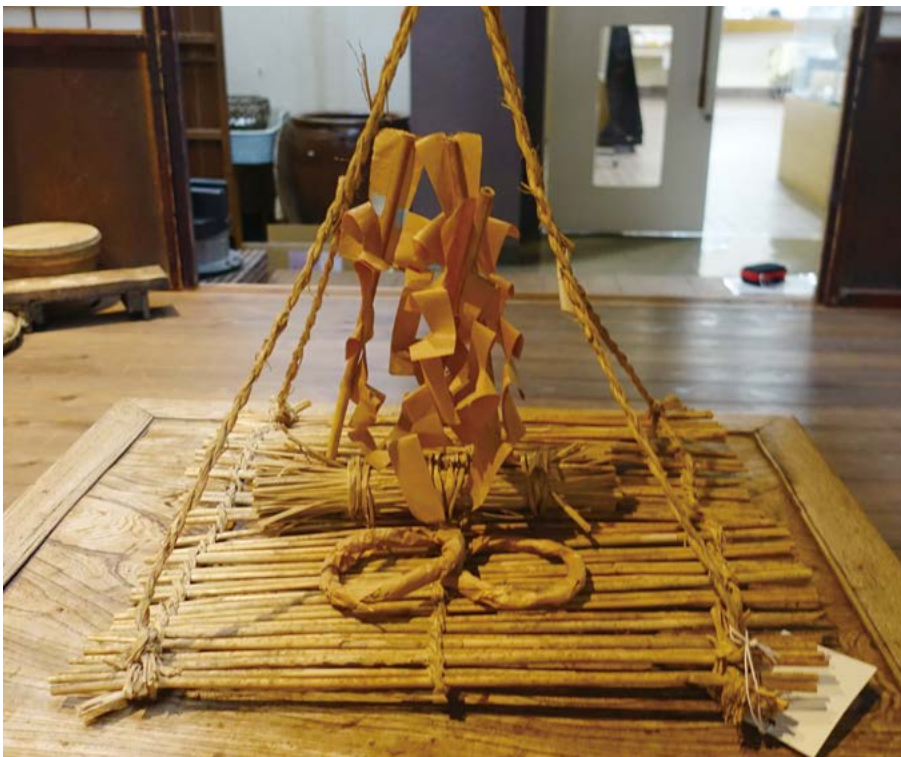
にぞこは、現在国営公園の敷地内にある

5 疱瘡と駒形神社

田尻の駒形神社は、蚕の神様あるいは馬の神様として祭られているが、その境内に、疱瘡神ほうそうじんが合祀されている。

疱瘡はその名の通り罹ると発疹の痕がかさぶたになる。その痕が残ったりすることから、「見目さだめ」などともいわれてきた。種痘のおかげで、昭和三〇年（一九五五）に根絶した病とされている。子どものかかる病気（稀に大人もかかる）としては、もう一つ麻疹（はしか）があり、疱瘡よりも感染力の高い病気であるために、「命さだめ」ともいわれていた。現在では麻疹は予防接種ができるようになったとはいえ、やはり重症化しやすく「命さだめ」であることに変わりはないと、医療関係者は忠告している。

かつては疱瘡にかかった子供がいますと、軽くすむようにと、すすきの茎で四角い簀すのこを編み、その中央に赤紙の御幣を立て、簀の四隅を縄につけて長さ二〇〜三〇センチぐらいにして中央で束ねて吊るせるようにし、疱瘡神にお供えをした。その際、ウツギを一五センチ程度に切ったものを二本束ねて白紙で包んで水引をかけ、ウツギの空洞にお神酒を入れてお供えしたものであった。これをウツギ樽と呼んだ。



ほうそうがみ送り

第二次世界大戦ごろまでは、子どもたちが三月の春休みに疱瘡神のお祭りをしていたという。ムラの各家から米を集め、一部を麴と交換し、甘酒を作ってもらう。この甘酒を疱瘡神に供えてお参りをしたのち、お参りに来たムラの人々・小さな子どもたちにこの甘酒を飲んでもらった。祭りが終わった夜は、子ども組の大将の家に米や野菜を持ち寄って、夕飯を作ってもらって食べたという。

麻疹についても「ほうそうがみ送り」同様に、赤い御幣を立てた飾りものをムラ境などに送り、罹患者の無事や地域の無事を祈ってきた。「はしか送り」は安曇野では伝承を聴くことはできないが、疫病の流行に対する人々の気持ちは変わることはない。恐れながらも防ぐ方法を考え、一刻も早く鎮静化するのを待つ。江戸時代末期に疫病がはやったときなどは、ムラの入り口に番人を立て、他村からくるものを制限して入れなかったと伝えられている。

令和二年（二〇二〇）初頭からの新型コロナウイルスの流行時も、人との接触を我慢し、仕事も制限し、三年近くかかってようやく、少し落ち着いたかに見える。ワクチン接種・マスク・消毒などかつてに比べれば予防方法も進んだが、私たちにできる基本的なことは共通していることも知ることができる。

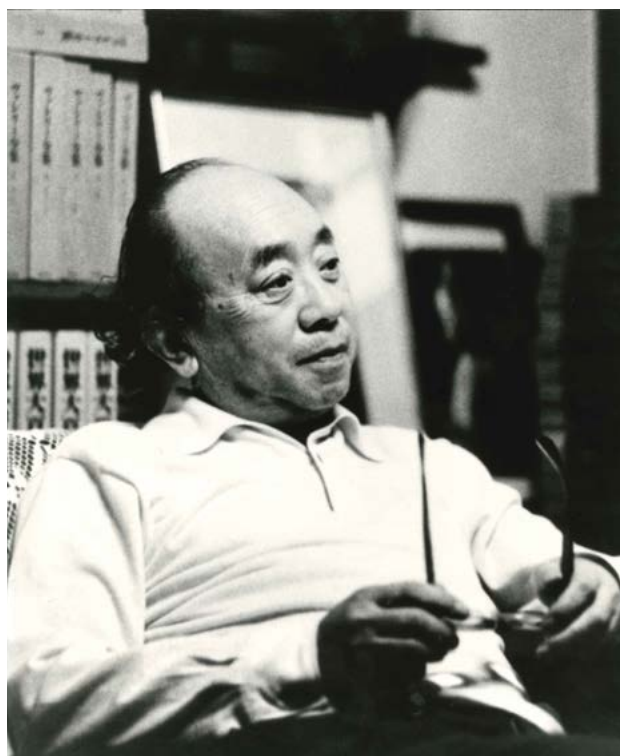
（倉石あつ子）



ウツギ樽。10cm位の長さに切って空洞になっている茎の部分に酒を入れて供える。頭の方は斜めに切りそろえる

1 出会いと対話に生きた臼井吉見

安曇野の名が全国に広まるきっかけとなったのは、臼井吉見（以下臼井）著、小説『安曇野』である。平成一六年（二〇〇四）、臼井生誕百周年の記念企画のひとつとして「ふだん着の臼井吉見」と題した座談会が六月一七日、臼井の長女、二女、三女を招いて開催された。姉妹から「父が優



臼井吉見

れていたのは、一番が教師、二番が編集者、三番が評論家、四番目が作家です」という話が出た。

四つの顔を持つ臼井

教師 臼井は三八歳まで、東京帝国大学在学中に赴任した上伊那郡中箕輪実業補習学校を含め、六校で教師として勤務している。平成三年（一九九二）七月一二日の臼井吉見文学館落成式には福島県双葉中学校（現双葉高校）や伊那中学校（現伊那北高校）の教え子が参列している。六〇年の時を経て来訪する教え子の姿に、臼井と教え子との親交の深さを知ることができる。

臼井が昭和一〇年（一九三五）から五年間勤務した現伊那北高校の同窓会館前には、昭和五三年（一九七八）臼井筆「伊那の谷 すでに日暮れて 仙丈は 明るきまゝに雪映えにけり」の邂逅の碑が建てられた。また、伊那北高校創立一〇〇周年記念事業のひとつとしてその碑の拓本が額装され、同窓会館一階和室「仙丈の間」に掲げられた。

臼井は、教え子はもとより、職場の同僚との交流も大切

にしている。昭和一五年（一九四〇）から勤務した松本女子師範学校、附属小学校の同僚とは、臼井が亡くなるまで交流を重ねた。同僚の一人である横沢正彦は、昭和二八年（一九五三）南安曇教育会において「荻原碌山研究委員会」を立ち上げ、碌山に関わる事績を整理し『彫刻家 荻原碌山』を刊行した。この研究委員会の取組は、昭和三三年（一九五八）の碌山美術館開館につながる。横沢正彦は、小説『安曇野』に第五部その一六に「良は一気に生気を取り戻したかのようで、睦子や和子を驚かせた。客というの



伊那北高校同窓会ホームページ

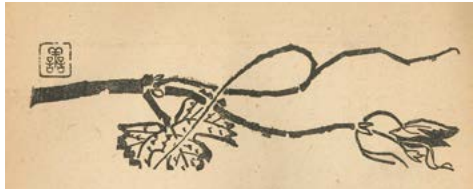
は、彫刻家の石井鶴三と芸大石井教室の助教授笹村草家人と、安曇教育会の碌山研究委員会の横沢正彦の三人づれであった」と登場する。五部後半の碌山美術館に関わる物語は、横沢正彦との交流が無ければ文章化することはなかったであろう。

臼井は、教師を終えた後、講演会の講師として多くの学校や研修会に呼ばれている。昭和四九年（一九七四）一月二二日、南安曇教育会の講演会において「およそ教育の中軸は、自己教育だと思いますが、その自己教育の中核は、自分と異質な人間との対話です。異質な人間といつも向き合っていること、反対意見をいつも対置すること、それ以外には、自分を反省する手はないでしょう。こういうことがなかったら、人間は人間でなくなってしまうのですが、どうでしょう」と述べている。五〇年前の講演だが、今耳にしても響く言葉である。

編集者 臼井が教師を辞めて編集者の道を選んだのは、昭和一八年（一九四三）、太平洋戦争真っ只中のことだ。都会に生活していた人たちの中で、田舎に親戚のある者は疎開といって都会を離れていく時代に、臼井は東京に出て行く。中学校、高等学校、大学と親友であった塩尻小野出身の古田晁が始めようとしている出版会社筑摩書房を助けるためである。その後、臼井は召集され、戦争に加わるこ

とになるが、九十九里浜で敗戦を迎える。戦後は、筑摩書房編集者として文化に飢えていた人たちのために多くの書物を発行したり、小説家を支援したりしていく。編集者としての臼井は、筑摩書房創業者である古田晁を別にして語ることはできない。松本中学一年先輩の哲学者、唐木順三は二人のことをこう記している。「臼井吉見はその（古田晁の）弔辞の中で『君と交はること五十五年六ヶ月』云々と言った。松本中学一年の時から今日にいたる長い年月、時に場所は距たつてゐても、心の通ひのない日は無かつたであらう。二人の關係は友情などといふものではない。互いに形となり影となつて相伴つてゐたといつてもなほ足りない。古田にとつて臼井は実に頼もしい男であつた。十二の時から六十七歳の急死まで常にさうであつた。若し臼井がゐなければ、古田は出版を始めなかつたであらうし、又若し臼井がゐなければ筑摩の存続はありえなかつた。」（『友臼井吉見と古田晁と』より）

評論家 雑誌「展望」には、臼井の評論が掲載されている。文芸、教育、社会など実に多方面にわたる。太宰治『人間失格』は、雑誌「展望」三〇号（昭和二三年六月）から三回の連載で掲載されている。第三二号は、太宰が亡くなつた直後である八月に出版された。その号には、太宰への追悼の意を込めた『人間失格』の評論が掲載された。



目次	
傳統と正統の問題	深瀬基寛
太宰治論	臼井吉見
世界的視圖の成立過程	和辻哲郎
小説人間失格	太宰治
小説道標（第十一回）	宮本百合子

カヅレ 筑摩書房 中山 蔵 中村 啓策

臼井が生涯に書いた評論、論筆は二九五本（『臼井吉見集第五集』による）にのぼる。そのうち、『安曇野』完結までに書いたものが二三九本である。臼井が『安曇野』に二〇〇〇人を超す人物を登場させ、明治三〇年代から昭和四〇年代までの長編歴史小説『安曇野』を、登場人物の対話を通して展開させることができた所以である。

作家 小説家臼井のデビュー作である『安曇野』は、執筆に五九歳から六九歳までの一〇年の年月を要した。その間、白内障手術、脳血栓での入院等をのりこえて『安曇野』を書き上げる。その原動力となつたのは何か。臼井の長男、高瀬さんは令和三年（二〇二一）七月一二日、臼井吉見



小説『安曇野』第1巻の表紙

文学館開館
三〇周年記
念講演会に
おいて「父
のあれこ
れ」と題し
てこう語っ
ている。「こ
の本（臼井
が東京女子

大での教え子たちのその後を取材した著書『十五年目のエンマ帖』のこと）を書くに当たって、改めて人間を書くおもしろさっていうのを再認識したのじゃないか。特にこの柴田蝶子さん（『十五年目のエンマ帖』の登場人物）の人生の邂逅と歴史との出会いっていったものに非常に惹かれるわけです。この本で柴田蝶子さんの邂逅と出会いを書いたことが、『安曇野』を書く一番の動機になっていったのじゃないかと、安曇野という地域の出会いとその中で邂逅を描こう、おそらくこの本を書いた後にそう自らを決めたのではないかという気は大変強くします。」

臼井は、七〇を超えてから『獅子座』の執筆にとりかかる。昭和五〇年（一九七五）一〇月二〇日、長野市「万佳亭」において執筆の動機を松本女子師範学校、附属小学校当時

の同僚に語っている。「幕末維新の歴史の資料を読んでも面白い。朝起きるのが楽しいし、夜寝るのがいたましい。『安曇野』は大体明治三十年頃から書き始めているが、その前を書きたくなる。嘉永六年、ペリーがやって来てから、明治の初め二十三年頃まで。藤村の『夜明け前』と同



『獅子座』の直筆原稿

じ時期の頃のこと、『夜明け前』は日本の近代文学の代表作であるが藤村は不運で気の毒な人。見ておくべき資料の大部分を見ていない。限られた資料、ゆがめられた研究しか見ていない。従来から『夜明け前』に不満であったが、明治維新のほんとの姿を書いていない。戦後資料が沢山出る。菊のカーテンが開かれ、宮家などからようやく出てきて見ることが出来る。私は幕末維新から呼びかけられている。歴史とは何ぞや。歴史とは呼びかけてくるもの。呼びかけぬものはただの過去。呼びかけられて過去は歴史になる。呼びかけられて答えるものが歴史である。後二十数年で二十一世紀、多分如何にして世界が国家というわくを脱しられるかが最大の課題、ようやく独立して来る国家、独立を脱しようとする国、独立の資格のない国、二十世紀の一番の問題であった。こうしたことを百年前の先輩は経験している。大久保利通と緒方孝明天皇を毒殺したと信じられる岩倉具視の日本人ばなれの大陰謀を中心にして、明治の元勳なぞちんぴらの青二才に過ぎぬこと、多くの幕末の偉人ともいふべき士が殺されたり切腹したりして相果てたこと。徳川慶喜こそ大偉人であり彼が明治の政治を引き受けて来たならその後の政治はもっと変わったものとなり、軍国主義的国家に墮することなく、民主主義が正常に発展して、今次大戦で三〇〇万という尊い血を流すようなことはなかったであろうということ、なお現代の日本の動きに

対する危惧の念も話された。(中略) 出会い幾つか書いている。元治元年(一八六四)九月十一日宿に海舟がいる。西郷逢いに来る。すばらしい人物が初めて逢うのである。海舟偉いことを言っている。隆盛は総参謀として長州征伐に行くというのに対して彼は長州征伐なんぞ何か。幕府なんぞ腐敗しきっている。今後の日本を救う道は薩摩と長州が手を握らないでどうする。今後は朝鮮、中国、印度と手を握らなくてはならない。イギリスと対抗しようという幕府など信用出来ない。統一日本をつくりアジア連盟を造れ。共和ということを言っている。さすがの隆盛もビックリしている。出会いがおもしろい。どきどきする。高杉晋作に書きながらじつくり逢って来た。(附属小学校雑記帳より)『獅子座』も出会いと対話の小説である。

記念館ではなく文学館に

文学館建設のきっかけは、平成元(一九八九)年九月の堀金村議会での猿田國夫村長の答弁からうかがえる。「臼井先生が亡くなられて、昭和六二年の九月、東京で偲ぶ会が催されました。筑摩書房さんが中心になって始めたんですが、筑摩書房の高橋さんと相談した経過があります。その他に二人おりました。観光の一環として使われることが多い『記念館』というより、臼井さんのことについて勉



開館当初の臼井吉見文学館

強する人が訪れる程度の『文庫』の方が非常に適切ではないかということを言われております。」

また、文学館建設の計画に係った元館長の青柳安昭さんは、『信濃教育二二六〇号』平成三年（一九九一）一月号で次のように語っている。「文学館の白壁土蔵作りは、穀倉地帯安曇野に多く見られる建物で、堀金中学校の校歌二番歌詞にもこの『白壁』があり、吉見をふるさと安曇野に迎え入れるのにふさわしいと考えました。建物の外観は二階か中二階ですが、内部は一階構造なのは、広い空間を取り、収納展示物のために通気を考慮しています。松丸太の梁や桁の木組は古色をわざと現し農家風を表現しようとしたものです。研修室を設けたのは、臼井文学の勉強をしてもらおうとしたものです。館名を『臼井文学館』とした理由もここにあります。」

平成三年七月一二日、臼井吉見文学館落成式において、長男高瀬さんは、「父の友人、知人、教え子の皆さんに大変感謝しております。私は疎開の時に三年位堀金村に住んでいたが父が非常に愛したこの土地、心のふるさとに父の遺品をお返し出来たことを大変うれしくおもっております。先年父の実家のお墓に分骨をした時「ほつと」したが、今はそれ以上に、すべてをお返し出来たことで、より「ほつと」しております」と語っている。

文学館友の会発足

臼井吉見文学館友の会は、平成一九年（二〇〇七）二月一日に設立され、今日まで、次の六項目を目的に様々な活動をしてきた。

- ① 多様に富む様々な会員を中心にネットワークをつくり、臼井吉見を多面的に検証しその中で知識・研究成果を蓄積し継承する
- ② 会員相互のコミュニケーションの場を提供する
- ③ 文学館の管理運営へ参加する
- ④ 文学館の諸活動を協働の下で支える
- ⑤ 文学による地域づくりを目指し、文学館の存在価値を高める
- ⑥ 会の透明性を確保し、民主的運営を行う

令和五年度現在会員は一五〇名余である。友の会だより「常念とれんげ」を年二回発行し、会員向けの単なる情報誌ではなく、様々な意見や感想・研究成果の発表と交流の場を広く提供することを目指している。友の会設立記念講演会には、「中央公論」元編集長粕谷一希さんを招き、「真の言葉は書物から」との演題で、講演をしていただいた。その中で粕谷さんは、「真の言葉、文章は書物からしか得られません。書物への愛情は深いものです。書物への愛着は人間への愛着でもあります」と、強調された。平成一七

年（二〇〇五）には、臼井吉見生誕一〇〇年行事が開催された。これが「臼井吉見れんげ忌」誕生のきっかけである。

現在六つの研修講座が毎月開催されている。「筑摩書房草創期を語る会」「『自分をつくる』を読む会」「『堀金村誌』を読む会」「『安曇野のひとびとを語る会』」「臼井吉見関連本を読む会」「臼井吉見と学ぶ会」である。当

時の猿田村長や青柳教育長が願った「この文学館を利用して臼井文学を通して住民が研修する場となつてほしい」という思いが、友の会の活動として現在実現されている。

令和三年に臼井吉見文学館開館三〇年を記念した記念誌「邂逅」が刊行（臼井吉見文学館ホームページから閲覧可能）された。教育長橋渡勝也さんが記された巻頭言の一部を紹介する。



臼井吉見文学館オープニングセレモニー

さて、安曇野市は、平成二九年四月から教育大綱の基本方針に「たくましい安曇野の子どもの育成」と掲げ、育てたい具体的な子どもの姿として臼井先生の「からだを動かす、頭で考え、心に感ずる」と引用させていただきました。これは、昭和四二年三月一二日に信州大学附属（長野）中学校開校二〇周年記念講演「中学生諸君にのぞむ」の中で、生徒たちに自ら語りかけた言葉の一つです。

（中略）

この講演で先生は、「自分のからだ・頭・心を使って『自ら考え判断し行動すること』が『人間の条件』である」と訴えています。そして、「判断力を高めるには、自分と違う考え、反対意見に耳を傾け、相手の立場を理解すること。人間をつくるには、子どもの時から常に自分の目で見、自分の心で感じ、自分のからだで受け取ることが重要だ」と、繰り返し強調されました。

現在、世界中が先の見通せない混迷のただ中にありますが、私たちが目指すべき理想の人間像を、臼井先生が当時熱く語られたこの「人間の条件」と定め、その実現に向けて邁進することが必要ではないでしょうか。

（平沢重人）

略歴

- ・明治三八（一九〇五）六月一七日、南安曇郡三田村（現堀金）田尻、に臼井貞吉、きちの二男として生まれる
- ・明治四五（一九一二）四月堀金尋常小学校入学
- ・大正七（一九一八）四月松本中学校入学 同級生に古田晁、一級上に唐木順三、二級上に青柳優。
- ・大正一二（一九二三）松本高等学校文科甲類入学
- ・大正一五（一九二六）東京帝国大学国文科入学
- ・昭和四（一九二九）東京帝国大学国文科卒業
- ・昭和五（一九三〇）二月、高崎連隊入隊 二月、少尉任官、除隊
- ・昭和六（一九三一）福島県双葉中学校へ国語教師として就職
- ・昭和七（一九三二）堀金下堀出身黒岩あやと結婚
- ・昭和一〇（一九三五）伊那中学校へ転勤
- ・昭和一五（一九四〇）松本女子師範学校附属小学校へ転任。古田晁、筑摩書房を創立する
- ・昭和一八（一九四三）松本女子師範学校附属小学校退職 東京女子大学に勤務しながら筑摩書房を手伝う 一〇月、松本連隊陸軍少尉として召集
- ・昭和二〇（一九四五）伐木隊長として九十九里浜に配置 終戦後、古田晁、唐木順三、中村光夫らと雑誌「展望」を企画、筑摩書房編集長となる
- ・昭和二一（一九四六）一月、「展望」創刊
- ・昭和二八（一九五三）堀金中学校校歌作詞
- ・昭和三五（一九六四）『安曇野』執筆 七月から「中央公論」連載
- ・昭和四九（一九七四）五月、第五部完結刊行「谷崎潤一郎賞」受賞
- ・昭和六二（一九八七）七月一二日死去、享年八二

佐藤嘉市は、明治一〇年（一八七七）六月に飯山市大字瑞穂（旧高井郡高野村）関沢に生まれた。長野県師範学校を卒業し、小学校訓導、校長、郡視学を経て、大正五年（二九一六）一月に南安曇郡堀金尋常高等小学校訓導兼校長として堀金に赴任することになった。この時、佐藤は三九歳だった。

堀金小学校に新しい校長先生がやってきた

佐藤校長は、

家族を伴って
常念岳の見え
る住居に落ち
着くと、自身
を常念山人と
称して、常念



佐藤嘉市校長の肖像
（堀金小学校蔵）

岳への想いを漢詩に表し、書にしたためた。また、「学校のあらゆる活動を常念を中心におくこと」を奨励し、常念岳を心の拠り所、教育の礎とする理念を貫き実践した。



安曇野のシンボル・北アルプス常念岳（2857m）

佐藤嘉市が38歳の時、筑北三山のひとつ聖山（ひじりやま）に登った。そこで眺めたアルプスの山々の中で、常念岳の美しい姿に強く魅かれたという。その後、望まれて堀金小学校に奉職することになると、「あの常念岳の麓にある堀金の教育の為に、全身の努力を捧げる決意をした」と語っている

臼井吉見、佐藤校長と出会う

安曇野市堀金出身の文芸評論家・作家等として活躍した臼井吉見は、明治三八年（一九〇五）六月に旧南安曇郡三田村に生まれた。臼井が一歳、堀金尋常高等小学校尋常

科五年の時、佐藤校長と出会い、大きな影響を受けることになる。このことを臼井は、文章や講演でたびたび述べている。

臼井吉見が語る佐藤嘉市校長

佐藤嘉市直筆の扁額「常念嶽」（堀金小学校蔵）

ここに、臼井吉見が語った肉声の録音テープがある。約七分間にわたる放送（年月日等不明）の記録で、佐藤校長のことを語っている。その一部を紹介しよう。「ところで、常念ということになりますと、僕は小学校の時の校長先生のこと

を思い浮かべざるを得ないわけです。この校長さんというのは、あごひげが胸のあたりまで垂れ下がっている、そういう校長さんでありまして、月曜日の朝礼の時間には、もう必ず常念の話をするんです。常念の話つきりほかに何もしないわけです。『みんな常念を見ろ、きょうは常念が晴れておつて機嫌がいい』、というようなことを言うかと思うと、その次の週には『常念を見ろ、今日はどうも常念が少し機嫌が悪いせいか、雲がかかっておつて残念だ』、また次の月曜日になりますと、『常念を見ろ』というわけで、年がら年中月曜日になると『常念を見ろ』という話しかされない校長で、高い山なんてものは、ぼくらの目につかなかったというか関心がなかったわけですから、盛んに『常念を見ろ、常念を見ろ』と言われて、僕らは自分のノートへ常念小学校なんて書くようなわけだったんです。」

臼井は代表作の小説『安曇野』第三部で、大正を時代背景とした物語を展開し、佐藤校長を藤山（雅号）の名で登場させた。そして、当時の教師や臼井自身と思われる人物も交えて、佐藤校長の言動や思想について語っている。

常念岳研究会の活動

佐藤校長は、常念岳の魅力を広く人々に知って欲しいと願った。そこで、常念岳登山を実現させようと春になると、

鳥川本流の奥に位置する堀金三股^{みつまた}から山頂への未開発ルート
の探索を試みた。その数は七回に及んだ。

そして、登山路の見通しが立つと、大正六年（一九一七）
七月二三日土曜日午後一時、学校職員全員による登山を決
行した。この時は快晴で、北アルプス連峰の向こうに夕陽
が沈む光景や、降るような星空、翌朝も雲海の上に信州の
金山を見渡すことができ、いたく感動したようである。こ
うして、職員一丸となった常念岳登山の成功が弾みとなり、
佐藤校長が組織した常念岳研究会の結束は一層強まった。

この研究会は、団体登山の実施、指導標樹立、石室^{いしむろ}建設
等を計画し、佐藤校長を先頭に堀金小学校の先生たちが農
休みに村内を駆け回って寄附を募った。その結果、有志に
よる多額の寄附金が寄せられ、計画を着々と実行に移した。

そして遂に、大正八年（一九一九）七月に前常念岳石室



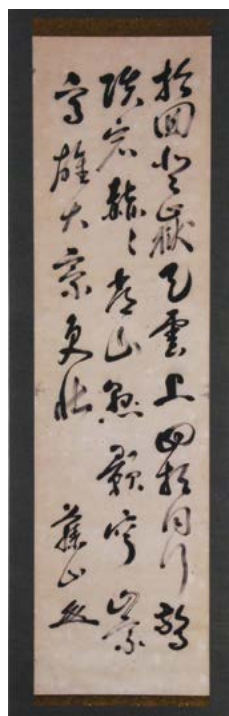
昭和 45 年再建の現在の前常念岳石室



佐藤校長も参加した石室完成団体登山
(市教育委員会蔵)

石柱には「堀金学校内常念嶽研究会建設
大正八年七月十日竣工」と刻まれている

が完成した。佐藤校長はすでに堀金小学校を去っていたが、
完成祝いの団体登山に駆け付けた。その時の感慨を詠んだ
「常念嶽第拾回登山」と題する漢詩の書が残されている。



佐藤嘉市作漢詩
(市教育委員会蔵)

拾回登嶽天雲上 四拾同行驚諸君
赫々常山懸顚穹 崇高雄大豪更壯

藤山

佐藤校長時代に行われたこと

佐藤校長は常念岳研究会の活動のほか、早起きを奨励し、
有志と体操場で剣道の朝稽古を始めた。また、有明原^{ありあけつばら}で
開かれた全郡連合大運動会で、佐藤校長の号令で作製され
た常念校旗の下に全校一団の氣勢を揚げ、各校対抗リレー
で優勝。校旗と優勝旗を掲げ帰校した際には、村民の大歓
迎を受けた。大正七年（一九一八）九月二三日には、堀金
学校創立三〇年記念事業を実施。『創立三十周年記念学校沿
革誌』を刊行し、村立図書館の創設、理科展覧会等も行った。
この頃、堀金小学校の校歌が出来上がった。佐藤校長の
もとで常念岳研究会の幹事を務めた輪湖卓三^{わこたくさくぞう}首席訓導が作

詞し、音楽を得意とした折井満訓導おりいみつるがそれに曲をつけた。この校歌は、現在まで百年を超えて歌い継がれている。

スペイン風邪の襲来

大正七年の秋、全国的に大流行したスペイン風邪に、堀金学校も大変悩まされたことが、学校日誌に記されている。この猛威により、不幸にも佐藤校長夫人が亡くなるという悲惨事が起きた。佐藤校長は、乳呑児を含む六人の子たちを郷里の母に預け、単身勤務を続けた。

しかし、翌年の大正八年（一九一九）三月を限りに、堀金を去る決意をする。「堀金学校こそ永年奉職して自分の教育的理想を実現せんものと自ら誓いしものが、一身上の止むを得ざる事情の為に、郷里に帰らねばならない事になった」——こう語る佐藤校長の心中はいかばかりだったか。

堀金を去った後の佐藤嘉市

佐藤嘉市は、その後、郷里の下高井郡瑞穂尋常高等小学校長をはじめ郡下の小学校長を歴任。その間、昭和六年（一九三二）からは下高井教育会長を務めるなど下高井郡の教育界に多大な業績を残した。昭和十三年（一九三八）には堀金小学校五〇周年記念式典に招かれ、白いひげを

蓄えた豊饒かくしゃくとした姿を見せた。昭和三四年（一九五九）一月永眠、享年八二歳。法名「慈光院釋藤山居士じこういんしゃくとうざんこじ」。写真は生家近くの墓地にて撮影（平成二六年八月）。

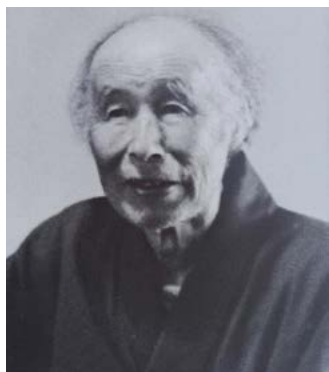
安曇野市での佐藤嘉市の顕彰

安曇野市では、公式ウェブサイト「安曇野市ゆかりの先人たち」で佐藤嘉市の人物紹介をしている。また、平成二八年（二〇一六）三月、安曇野市堀金図書館リニューアルオープン記念として、企画展「常念校長・佐藤嘉市と大正期の常念岳登山」を穂高交流学習センター「みらい」で開催した。展示では、佐藤嘉市の安曇野にしろした足跡の紹介のほか、関係者の協力により佐藤が愛用した着物、羽織・袴はかま、帽子なども初めて公開された。来場者から「稀に見るスケールの大きい校長先生だ」、「怖こわそうな風貌ふうぼうだが情味深い人でした」など、在りし日の佐藤嘉市に思いを馳せる多くの声が届けられた。



佐藤嘉市の墓
（飯山市）

（橋渡勝也）



斎藤茂（井口喜源治記念館蔵）

斎藤茂（以下斎藤）の残された蔵書には、四六五冊の原書がある。英語・ドイツ語・ラテン語等多岐にわたる。その内容も哲学・宗教倫理を始め教育・政治・歴史・文学等々、斎藤の語学力と多くの分野にわたる知識の豊かさを物語る。『誤られたるニーチェ』（大正五年日本評論）、『カントとルツソウ』（大正一三年信濃教育会）等々、哲学に関する評論も多数著した。中でも、大正六、七年に翻訳した『普魯西亜勃興史』（ハインリッヒ・フォン・トライチュケ著）は、今も多くの研究者らに読まれている。斎藤は、明治三八年（二九〇五）、一八歳にして信濃毎日新聞に小文を投稿する。翌年には『万朝報』に掲載された「雨の夜」が懸賞一等に入選する。以後、長野新聞、読売新聞、信濃毎日新聞等に論文・評論・創作などが掲載される。斎藤は、これら多くの研究、著述を日常の農作業と並行して行っていたことから『野の哲人』と称された。

井口喜源治の研成義塾に学ぶ

斎藤は明治二〇年（一八八七）、鳥川村（現堀金）扇町に生まれた。斎藤の名は、井口喜源治きげんじの開いた私塾「研成義塾」の明治三四年（一九〇一）入塾者の記録に見える。同期生には、シアトルに移民し、後に帰国、ワシントン靴店の創始者で知られる東条鱗たかし、老人施設を経営して老人福祉に貢献した平林利治など二十七名がいる。修学期間は三年（明治三四・三五・三九年）であったが、井口喜源治の教えを真摯に実践し体現した。多くの義塾卒業生の中でも、その生涯に於いて最も井口の教えに近づいたのが斎藤であろう。

「天籟」てんさいは、斎藤と西澤本衛（研成義塾正式認可前の明治三二年（一八九九）入塾）が編集人となり、明治三八年五月に創刊した雑誌である。塾生たちが、井口の教え「天賦を伸ばす」の方針により、文才を発揮し、学問への傾注を深めてゆく歩みを見ることができると。

昭和二八年（一九五三）七月二一日、昭和一三年に亡くなった井口の忌日に『井口喜源治』が発行される。井口の

遺稿一八編と研成義塾に学んだ教え子らの回想記を編集したものである。その編集者を斎藤が務めた。この書籍はその後、平成六年（一九九四）までに四刷を数える。

哲学の道を追求する

斎藤は、「カント小考〈国家と教育〉」全七回を、大正元年（一九一二）に雑誌「信濃教育」に寄稿した。その内容は、臼井吉見の小説『安曇野』第四部の中で、清澤洌に語りかける形で触れられている。

カントが恐れたのは教育の仕事が国家もしくは君主の手にあることだ。教育が宗門の道具であってはならぬこと、その弊害の極まるところは誰でも知っているとおりが、教育は更にまた国家や君主の道具となってはならない。文化の生まれるのはある個人を中心としてそのまわりに発光するのだから、高い人格を抜きにした教育の仕事は無謀であり、冒険だ。カントは、こう考えて、私立学校の発達を願った。私立学校においてのみ教育の目的が追求され、その効果を上げることができると信じた。

斎藤が記した多くの執筆は、「わが八十年の想い出を古き日の文殻に拾っておこがましくも世に送る」と序で自身が評した『わが日わが道』（全四巻、昭和四一から四三年、山上社）にまとめられている。昭和四九年（一九七四）、八七

歳で亡くなった斎藤が、生涯にわたって何を考え、何を大切にしてきたのかを知ることができる。大正九年（一九二〇）の「よろず短言」四二編から一編を紹介する。

トルストイ流の悪に対する無抵抗の福音は結構なものといっても、それは真の平和主義と云うことは出来ぬ。事実

としてそれは平和主義を回避

する―むしろ拒絶をもするものともいうべきである。平和主義は決して武断主義のお情けの許にあって生きるものではない。また、われ自ずからが先ず丸腰になることでも、丸裸になることでもない。かれ剣を帯びたらば、われこれに銃をも加うる気概を以て、追んで説いて聴かざれば、横面の一つも張り飛ばす戦闘的気魄に平和主義の神髄はあるのだ。信念・信仰、即ち精神の啓発と高揚を閑却にして武備撤廃を急ぐのは、事実において消極的あるいは退嬰的平和主義であって、畢竟平和そのものの自殺に外ならぬ。世間自分独りの平和に籠って快しとなし能事了れりなす主我独善は人道の敵だ。



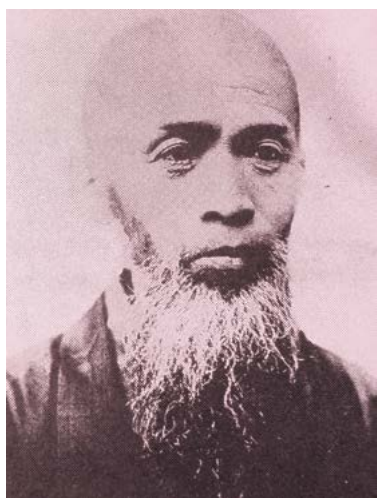
「わが日わが道」

（尾臺頼一、平沢重人）

日本産業革命の一翼を担った臥雲辰致

暮らし向きの向上を願って 横山栄弥

臥雲辰致はわが国の紡績業界に多大な貢献をした発明家である。天保一三年（一八四二）八月一日、横山儀十郎の二男として小田多井に生まれ、幼名を栄弥といった。生家は江戸末期、農家の副業としてこの地方で一般的に行われていた足袋底織の問屋をしていた。栄弥は農家に綿を配り、それを紡いだ農家から綿糸を回収して家業を助けていた。その中で、労働の割に生産性が低い農家の人々の暮らしを目の当たりにし、何とか豊かにできないかと常に考えるようになった。



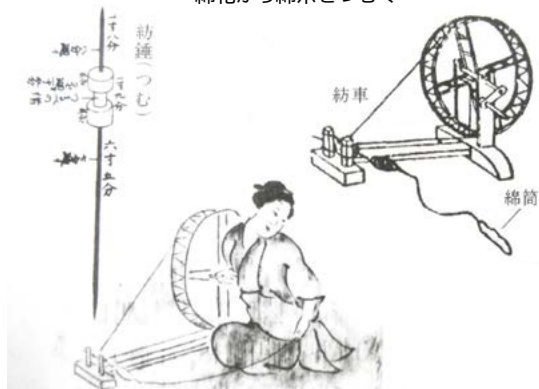
臥雲辰致

そうしてたどり着いたのが、「綿から糸をつむぐ手間のかかる作業を何とかして効率よくできないか」ということだった。

そのヒントは、小さい頃の「遊び」の中にあった。火吹き竹の中に入れた綿が穴から飛び出し、火吹き竹が転がることで綿が撚れ、糸状になったのを見たのである。家業の手伝いの傍ら、栄弥はこの仕組みを使って糸紡ぎの機械を考案する。一四歳のときのことだった。

栄弥は更に改良を加え、数年後には完成に近い形の機械へと発展させた。ところが、夢を膨らませて実用化に向け、近くの大工に依頼して試作を重ねたものの、なかなか思うように作動

綿花から綿糸をつむぐ



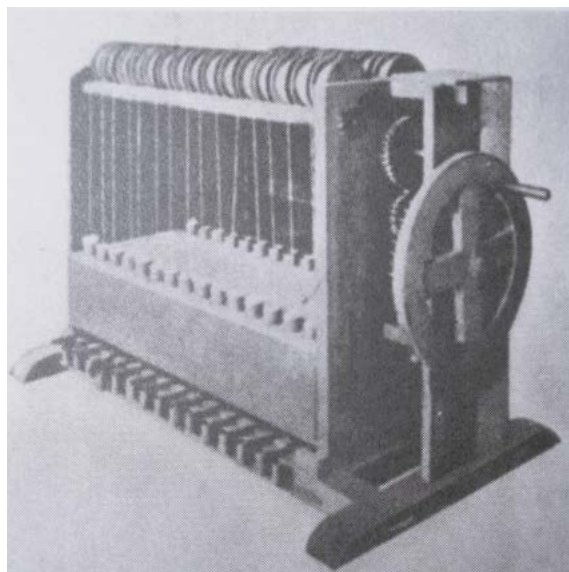
つむぐ：十分に打ち上げた綿を細い竹管に巻き付けて綿筒（しのまき）にする。これを糸車にかけて糸にする。

糸車を用いた手作業での糸紡ぎの様子

してくれない。そのうちに思い入れの大きかった試作機は見かねた家人の手によって焼かれてしまった。しかしあきらめの悪い栄弥は、必ず実用化することを固く誓った。実用化に向け考え込む栄弥は、発明に専念するあまり、終日腕を組み、思案にくれる日々を過ごし、やがて家業も怠るようになってしまったという。

安楽寺僧侶 〔栄弥〕

栄弥二〇歳、文久三年（一八六三）の春、心配した家人は安楽寺の智順和尚に依頼し、僧侶として弟子にしてみらうことにした。紡績機の研究が続けられなくなった栄弥は悔しさのあまり、自分のまげを切り投げて憤りを表したと伝えられている。それでも結局は、法名を「智栄」とし、仏門に入ることとなった。元来勤勉な栄弥は、その後僧侶智栄として精進した。しかしその間にも地域の人々の暮らしを豊かにしようと綿糸を効率よく紡ぐ方法は常に考えていたのではないだろうか。やがて精進を重ね、僧としても信頼を得るようになった智栄は、二六歳の時に安楽寺の末寺である臥雲山孤峰院こほういんの住職として抜擢され、その後四年間のお勤めすることとなった。



初期のガラ紡機
内国勧業博覧会出品の器械

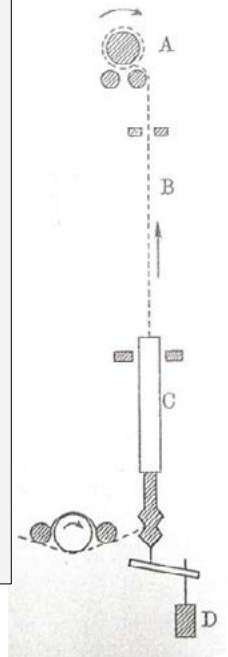
環俗し再燃する夢 〔臥雲辰致〕

時代は明治に入り大きく変化する。明治四年（一八七二）の廃仏毀釈により安楽寺や孤峰院が廃寺となったのである。住職であった智栄は環俗し、俗名を臥雲辰致と名乗るようになった。開国により国内産業が外国の波に吞まれていた現実が辰致の目にはどのように映っただろう。少年時代に「豊かな地域」を願い機械作りに没頭した年月が再燃した。諸外国の糸より優れたものをつくり出し、地域のみならず日本のために産業を支えていこうとする強い意志

初期のガラ紡機の構造

- ①直径3cm長さ15cm程度のブリキの筒Cを垂直に立て、この中に綿を詰めしておく。
- ②中の綿に糸口をつけ、糸Bを静かに上へ引き上げる。
- ③筒Cは回転しているのでBはよりがかかり綿糸となりAの糸車に巻き取られる。

※Dの重りを調整し、回転数を加減することで綿糸の太さを決める。



「堀金」文化財調査報告—第1号—より作成

で、紡績機の完成に心血を注ぐ。そしてついに、明治三六年（一九〇三）、足袋底に用いる太糸紡績機の完成に至ったのである。辰致三二歳の時であった。

この発明は外国製に対して「和式」または「臥雲式」と呼ばれ、糸を紡ぐ時にでる独特の音から「ガラ紡」と呼ばれた。この製作費が安く太糸を紡ぐことに適したガラ紡はその後日本全国を席卷していくのである。

波田川澄家から松本そして全国へ

辰致は結婚後、妻の実家である波多村（現松本市波田）

の川澄家に逗留した。そこで同村の武居美佐雄や波多腰六佐、倭村の青木橋次郎らと知り合い、綿糸紡績機のさらなる改良とその販売を計画して「連綿社」を設立、波多村から松本に移り紡績機の製造を始め、新しい小型のはた織機も発明している。さらにこれらの機械を連設して水力を動力とした機器の販売も手掛けた。

一度に何本もの糸を紡ぐ紡績機は世の中を驚かせ、紡績の作業効率の向上は日本の産業を発展させた。明治一〇年（一八七七）には東京上野で開催された「内国勧業博覧会」に出品するに至った。そこでガラ紡は「本会第一の発明品」と激賞され、博

覧会最高の名誉である「鳳紋褒賞」を受けたのである。細い糸は紡ぐことはできなかったが、その優れた性能は欧米の機器に劣ることはなかった。これを契機としてガラ紡は全国に普及し、辰致らは東京はじめ他県にも支社を設立した。

ところがやがて危機



内国勧業博覧会鳳紋褒賞（明治10年）



現在でも使用されている臥雲式足ふみ脱穀機



辰致が記載されている国定教科書

が訪れる。特許の規制が整っていない当時、ガラ紡の模造品が出回り、連綿社は経営難となってしまうたのである。苦境の中、辰致は「更に細い優れた糸」を求め何度も改良を重ねた。「発明し模倣され改良する」を繰り返す辰致の礎には「競争は進化の基」の心意気があったからだ。

こうしてガラ紡は洋式紡績機普及の中で、優れた性能で日本産業に偉大な功績を残した。そして明治一五年（一八八二）、勅撰の「藍綬褒章」を賜り彼の偉業は不滅の名誉を得たのである。

小田多井に生まれ、家業を手伝い、地域の暮らしを見つめ、人々の生活を豊かにしたいと願い続けた臥雲辰致。その志は現在の先端技術の中でも活かされているに違いない。

（千村裕一）

○コラム

「臥雲辰致」の名前は何と読めばよいのだろう。現在は一般に「たっち」が多く使われているようだ。

一方明治九年（一八七六）の信飛新聞では「此機械ノ発明人ハ臥雲辰致（フスマタツチ）…」とルビをつけて報じている。

また明治一〇年（一八七七）、第一回内国勸業博覧会の英文の出品目録にはローマ字で「GAUN TOKIMUNE」と記されている。明治一八年（一八八五）繭糸織物陶漆器共進会のととき発刊された「共進会大意」にも「信濃の人臥雲辰致（がうん・ときむね）」というものの…のルビがつけられている。

他にも「たつむね」「たつとも」などの名称が見られる。

もし、博覧会に自分で登録した読み方が「ときむね」だとすれば、正式には「ときむね」が妥当なのかもしれない。

（旧堀金郷土資料館掲示より）

5 山口蒼輪

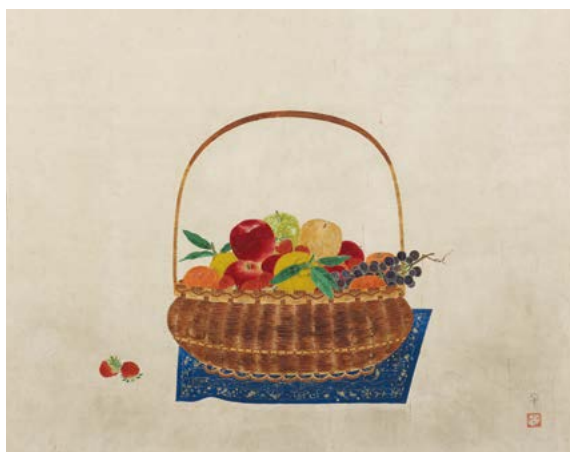
山口蒼輪^{そうりん}は、大正二年（一九一三）、堀金烏川に生まれた。山口家は三〇〇年以上の歴史をもつ旧家で、かつて大庄屋であった（六〇頁参照）。蒼輪は、本名を肇といい、村立堀金尋常高等小学校を経て、松本女子師範学校附属小学校に進む。身体が弱かったために、中学校へは進まず、浅井洌に書、修身、国語、漢文を、松本の日本画家・赤羽雪邦^{せっぽう}に絵を学んだ。絵の才能を見出されて上京し、日本美術学校・予科に入学。同校で教鞭をとっていた中村岳陵^{がくりよう}の内弟子となった。

岳陵の主宰する蒼野社画塾に入塾後、「蒼輪」の雅号を与えられる。昭和五年（一九三〇）、一七歳で第一七回日本美術院展覧会に《草》が初入選した。院展四回、試作展三回入選、昭和十三年（一九三八）に院友に推挙され、画塾のホープであった。

昭和二〇年（一九四五）、戦禍を逃れて郷里に戻る。疎開していた石井柏亭^{はくてい}の呼びかけにより始まった全信州美術展に参加、後の長野県展開催にも尽力した。中央画壇への思いを懐に強く抱き帰郷した画家にとって、地元的美術運動は、自らの立ち位置を確かにし前進する重要な礎であつ



《草》（昭和 5 年・個人蔵）



《果実》(昭和7年・個人蔵)

初期の作品《草》は、広く取った空間に一匹の虫が飛び、画面を生き生きとさせている。緑の色彩を見事に駆使し、何気ない叢(くさむら)を繊細に描き込んだ傑作である。《果実》の、籠や果物の細部まで観察し色彩のバランスを考慮した構図や、《菊》の支柱に茎を結びつける紐の描写などは蒼輪ならではの意匠である。帰郷

た。昭和二三年(一九四七)日本画家の野本文雄、石曾根貞亀、齋藤達雄、日比野霞徑、小島貞観とともに「銀嶺会」を結成し展覧会を開催する。彼らは頻繁に書簡をやりとりしながら、会の結成にかけた想いを共有した。研究会を開き、相互に批評しあうことで己を高めようとしていた。やがて昭和二五年(一九五〇)蒼輪は体調の悪化により入院、三六歳の若さでこの世を去った。画友らの衝撃は大きく銀嶺会は打ち切りとなった。



《檜》(昭和23年・個人蔵)



《菊》(昭和6年・豊科近代美術館蔵)

後に制作した《檜》は、大きくカーブしながら上へと伸びていく樹木の生命力を力強く表現している。中央での緊張感から解放された、大らかさをも感じさせる。自然と向き合いながら、厳しい眼差しで筆を走らせ、極限までに表現を追究した画家の作品はまさに宝である。

(塩原理絵子)

6 不屈の農民文学者 山田多賀市

安曇野の小作農家に生まれた山田多賀市（以下山田）は、日本の農村社会の変貌をとらえようと、全国に先駆け、雑誌甲府版『農民文学』（昭和二六年（一九五二）創刊）を発行する。その創刊号編集後記に「私は、文学的ものの心がつきはじめた頃から、農民文学だけを取り上げる月刊雑誌がひとつくらいあっても悪くないだろうという考え方を持っていたが、（略）当分こんな形で雑誌は出し続けるので、賛成のできる範囲で御声エンと御協力をおねがいしたい。」と記している。山田が生きた明治末期から平成初期は、日本の近現代史の中で激動の時代である。「不屈の農民文学者」と呼ばれた山田の生涯を紹介する。

農民解放への情熱

山田は昭和三年（一九二八）頃より、山梨県での生活を始めた。日本農業組合青年部に属し、北巨摩郡全域を活動の場と



山田多賀市



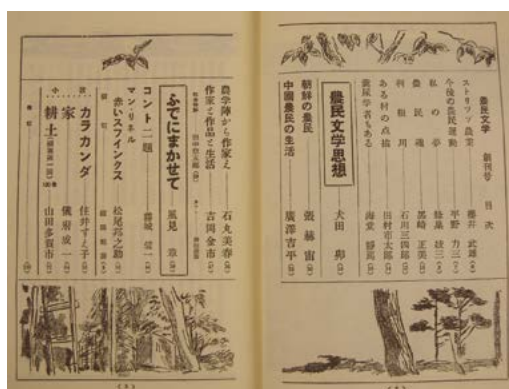
『耕土』文字碑

し、地主制の下であえぐ小作農を救うための農民解放運動に参加する。この運動に対する特高警察の弾圧は厳しく、韮崎警察による検挙を繰返した。

昭和一五年（一九四〇）農民解放運動で知りえたことを、小説『耕土』に書き上げる。

その後、山田は徴兵から逃れるために、偽造した死亡届を提出した。

『山梨の文学』に次の記載がある。



「農民文学」創刊号の目次

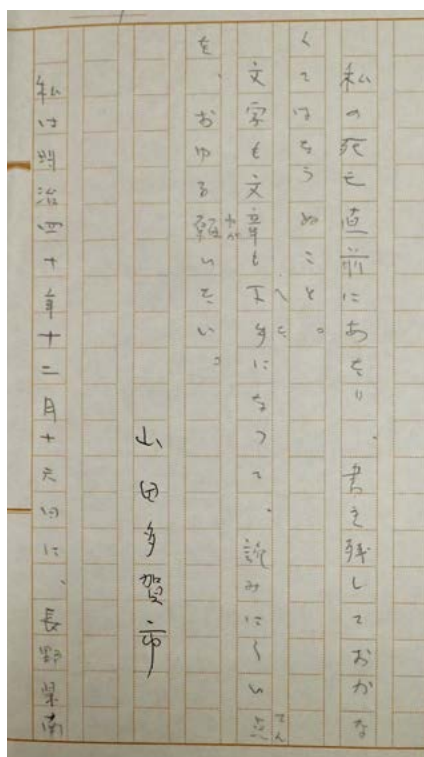
一九四三年、友人の医師から白紙の死に診断書ともらい、肺結核で死にたと記入して堀金村役場へ送った。一九四五年の甲府空襲があった七月六日付で除籍。発覚したら銃殺という不退職の決意であった。

昭和五二年（一九七七）日本社会党山梨県本部、山梨県作家の会、竜地旧友代表杉原卯吉により『耕土』文学碑が建立（現在の甲斐市龍地）され、某ドラッグストアの隣地に現在もその存在を示している。

ふるさとへの思い

昭和二二年（一九四七）四月、学制改革により堀金中学校が堀金小学校に間借りする形で開校する。昭和二三年（一九四八）に山田は、中学校校舎設立の資金にと一五万円の寄付を申し出ている。

昭和四七年（一九七二）には、『雑草』が全線文学賞を



自筆原稿（山梨県立文学館）

受賞する。その受賞の喜びを当時の堀金村長にあて、「堀金村は私の郷里です。故郷を出て五十年とも角にも小生は生きて居ます。この度、文学賞を得ましたので、ご報告いたします」と手紙に書いています。

昭和五五年（一九八〇）八月二二日に第七回堀金村夏期大学講座が開催され、山田は「農民解放と農民文学に生きて」と題して講演を行った。「どうぞこれから努力してこんな立派な文学（小説『雑草』）を生む作者となった山田さんは、私どもの村の誇りである」と第一五一号「公民館報」に記されている。

山田は、明治四〇年（一九〇七）堀金田尻の生まれで、臼井吉見と同郷の二歳年少である。小学校時代は、佐藤嘉

市校長（一一〇頁）から「常念を見よ」という言葉をかけられた児童の一人だった。

山田は、安曇野を「私は、信州日本アルプス山麓の寒村で、貧しい農民の子に生まれ」（「耕土」碑除幕式あいさつ文）と表現している。一方で、臼井吉見は「安曇野がれんげの花で埋まるころ、雪の消え残った常念や鍋冠山が、すぐうしろにひかえてさ、こんな美しいところは、どこにもないよ」（小説『安曇野』第二部）と表現している。

同じ時代に、同じ郷里で育った二人であるが、この受け止めの違いは何であろうか。

山梨県立文学館では、常設展「ゆかりの作家」一〇四人の中で、山田を紹介している。関係する書籍や生原稿、書簡などが収蔵（目録がWEB公開）され、閲覧も可能である。

（平沢重人）



小説『耕土』

略歴

- ・明治四〇（一九〇七） 一二月、三田村（現堀金）に山田市之助、八ゑの長男として生まれる
- ・大正 三（一九一四） 堀金尋常小学校入学
- ・大正 九（一九二〇） 農家兼大工の家に子守奉公、名古屋の陶器工場で画工見習い、以降瓦焼き、土木作業などの職に就く
- ・昭和 三（一九二八） 頃 山梨での生活を始める 農民組合運動に参加する
- ・昭和 七（一九三二） 農民運動弾圧を受ける 結核に罹患する 本庄陸男（作家）と出会い作家活動を始める
- ・昭和 一五（一九四〇） 『耕土』発刊
- ・昭和 一六（一九四一） 中込暉子と結婚 長男繁彦誕生
- ・昭和 一八（一九四三） 小説が反戦的理由で検挙 徴兵を逃れるために死亡診断書を三田村に送る
- ・昭和 二〇（一九四五） 七月、甲府空襲で死亡とみなされ除籍
- ・昭和 二三（一九四八） 堀金中学校建設のために一五万円寄付
- ・昭和 二六（一九五二） 甲府版「農民文学」創刊、九号まで発行
- ・昭和 四六（一九七二） 『雑草』発刊 翌年全線文学賞受賞
- ・昭和 四九（一九七四） 『農民』発刊
- ・昭和 五二（一九七七） 『耕土』文学碑建立（現甲斐市龍地）
- ・昭和 五五（一九八〇） 八月、堀金村夏期大学で「農民解放と農民文学に生きて」を講演
- ・平成 二（一九九〇） 九月死去 享年八二

ウォルター・ウェストン

常念に魅せられて

須砂渡溪谷の入り口にウォルター・ウェストンの胸像がある。ウェストンが明治二七年（一八九四）八月六日、岩原を訪れ、外国人としては初めて常念岳に登頂したことを記念して建立されたものである。「日本アルプス」の名称や魅力は彼により世界に広く知れ渡った。ウェストンは当



ウェストン胸像（岩原）

時、烏川村長を務めていた山口吉人氏を頼り、一夜の宿と常念岳登山の協力を求めた。

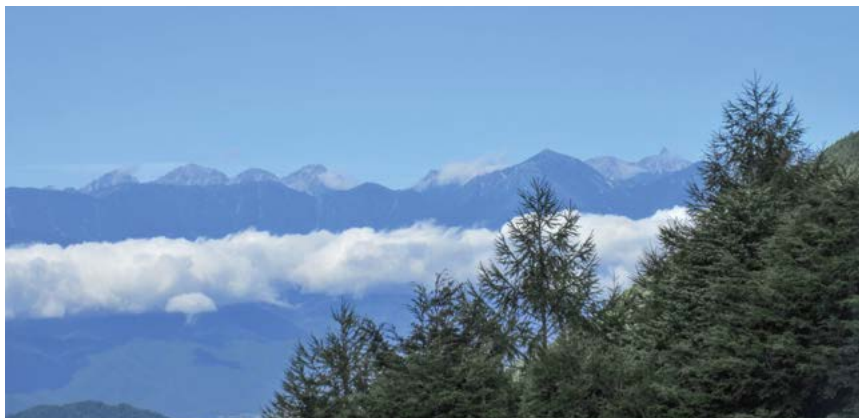
ウェストンの来日は近代日本の世界情勢の大きな流れの中にある。英国は、産業革命により発展した近代工業の市場を求め、世界各地の発展途上の国々を従属国としたり、植民地にしたりと帝国主義へと突き進んだ。やがてアヘン戦争（一八四二）により香港を得た英国は東アジア進出の拠点を獲得、勢力を拡大していくこととなった。日本は欧米各国から開国を迫られ、ペリー来航（一八五三）・日米和親条約（一八五四）・日米修好通商条約（一八五八）に代表される条約の締結により、諸外国の勢力が堰を切った水のように流れ込み、欧州キリスト教会は日本への布教活動を強化していった。

来日までの経過

ウェストンは一八六一年、英国のダービーにある織物工場の経営者の六男として生まれ、ダービースクール、ケンブリッジ大学、リドリーホール神学校に学び、聖職者の

道を歩き始めることとなった。この頃の欧州は登山の黄金時代。登山家たちがこぞって名峰を極め、初登頂、壁制覇などを競っていた。最中、ウエストンも登山に魅せられ、兄とともにヨーロッパの名峰を踏破してきた。

日本への布教活動が盛んに行われる中、英国聖公会伝道協会から通達を受けたウエストンは日本に赴くことになる。そして日本で宣教師としてしばらく活動したが、眼病のため継続が困難になり職を辞している。時間にゆとりができたウエストンは日本アルプスをはじめ、多くの山々と出会うこととなった。



保福寺峠より北アルプスを望む

ウエストン松本平へ

ウエストンが松本平を目にしたのは明治二四年（一八九一）八月のことであった。当時松本には鉄道路線が無く、最寄りの駅は信越線の上田ということになる。ウエストンは居留地の神戸より上田まで鉄道で、さらに上田から人力車を使い、保福寺峠を越え松本に入った。そこで見たのは夕暮れに近いシルエットの北アルプスだった。保福寺峠から眺める槍・穂高連峰、常念山脈は登山家ウエストンの気持ちをかき立てたに違いない。ウエストンは山岳専門誌「アルパインジャーナル」に「昨年夏、私が松本から山に登ったとき、上田から松本を結ぶ保福寺峠から初めてこの山脈、連峰を眺めたが、日本にこれほどの山脈があるとは思ってもいなかった。乗鞍は馬の鞍の山、三角峰の常念岳はペニン・アルプスの女王、無類のヴァイスホルンの容姿を思わせる。さらにまた槍ヶ岳の先鋒は露岩の壮大さといふ日本のマッターホルンだ。これらの峰が他の無数の山々と連なって、松本平の向こうで一つの絵を描き出す。この絵は私の中から消えることはなく、最高の財産のひとつとなって残ることだろう」と記している。常念岳に登ったのは三年後の明治二七年（一八九四）だった。

常念登山

明治二七年八月六日、ウェストンはH・J・ハミルトン、浦口文次を伴い松本から豊科を経由し岩原にやってきた。村長山口吉人氏を訪ねると手厚く迎えられ、案内と荷物持ちの獵師三名が手配された。更に村長の長男も同行することとなり、一行は八月七日早朝、烏川を遡行し、険しい道を登って行った。山頂付近の鞍部で一夜を明かし、翌朝八日、目指す常念山頂に立った。村長宅に帰り着いたのはその日の夕方、一泊して岩原を後にしている。手記には明治中期の世相をはじめ山岳事情や自然環境など克明に描かれ興味深い。

令和五年（二〇二三）にウェストン常念登頂一三〇年の記念式典が行われた。宿と案内に尽力した山口家をはじめ、安曇野市、銅像製作の関係者、教会関係者、常念岳研究会の皆さんがウェストンの功績や心情、常念岳と堀金の深い結びつきを後世に伝えることを確認した。

「日本アルプス」の名称はウィリアム・ガウランドにより初めてとなえられたといわれているが、ウェストンがロンドンで出版した「日本アルプスの登山と探検」により広く世界に知られることとなった。堀金をはじめ、松本市上高地、糸魚川、天竜峡などにもレリーフや像、碑がありウェ

ストンの功績をたたえている。また、上高地梓川右岸にウェストンのレリーフがとりつけられたのは昭和一二年（一九三七）、ウェストン祭は昭和二二年（一九四七）から日本山岳会により実施されている。

（千村裕二）



ウェストン常念登頂130年記念式典

1 堀金村ができるまで

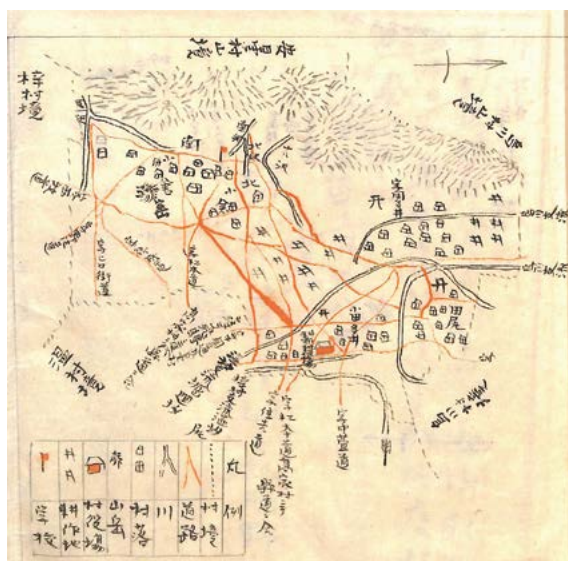
堀金村は、昭和三〇年（一九五五）に烏川村と三田村が合併し誕生した。

烏川村の発足

烏川村は、明治七年（一八七四）九月五日、岩原村・上堀金村・下堀村・中堀新田村の四ヶ村が合併して誕生した。明治二二年（一八八九）に町村制が施行されるが、烏川村は一村のまま十分に独立に堪え得るものと認められたことから他村との合併もなく、同年四月一日からそのまま新村として発足し、堀金村となるまで存続した。

科布村から三田村へ

烏川村が誕生したのと同じ日、小田多井・新田村・田尻村・田多井村、そして小倉村の四ヶ村が合併して「科布村^{しなの}」となった。村名の由来ははっきりとはしないが、『南安曇郡誌』に「村名は村々によって種々考案され、（中略）安曇・科布・倭の如く郡国名をつけたところ」とあり、「信濃」の国名



科布村略図（安曇野市文書館蔵）

なった。田多井・田尻・小田多井は比較的その地域がままとまっていたが、小倉だけが他の地域から隔絶された位置であったこと、学校はそれぞれ独立しており、水利系統も別であったこと等が分離の大きな原因と考えられる。

そして、明治二二年の町村制施行により、科布村と小倉村は再び合併することになった。両村とも合併には反対で

にちなんだ
ものと考え
られる。

しかし、
この合併は
あまり長く
続かず、明
治一三年
（一八八〇）
八月、小倉
耕地が分離
し科布村と
小倉村と

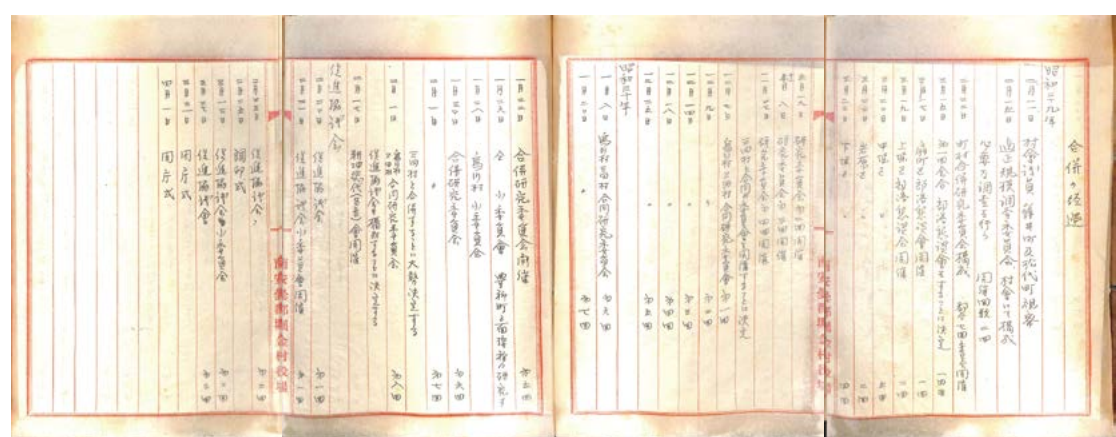
あったが、小倉村は戸数が標準に達しない等で独立が難しかったため、県令の命令により合併した。

その後、明治二五年（一八九二）四月に小倉村民が知事に対して分村を陳情したことに端を発し、明治二六年（一八九三）五月一七日に小倉が分離して小倉村となり、同時に科布村は村名を三田村と改称し、ここに「三田村」が誕生した。

烏川村と三田村の合併

烏川村と三田村は、昭和二八年（一九五三）の町村合併促進法施行前からすでに県において町村の規模適正化に関する指針で取り上げられていた。

三田村では、昭和二七年（一九五二）二月二二日に安曇地方町村適正規模調査委員会による研究会が開かれ、次のように説明された。「本村の場合は長い間組合学校を経営し、又今度両村の努力により新制中学も出来上っている。同じ教室に学んで来た間柄、お互いが相方を知り合い、理解し合つて居ることは地理的、経済的好条件と相まつて最も合併に適した村と云うべきである」（『三田公民館報 第一九号』より）。研究会では活発な意見が出されるとともに、全村一致して合併の実現を図るべく、村民に合併問題を理解してもらうため懇談会を開くこと、促進準備委員会を作



烏川村合併の経過（安曇野市文書館蔵）

ることなどが決められた。そして、同年四月一七日、三田村適正規模推進委員会委員一五名と村長は烏川村へ合併を申し込んだ。

一方、烏川村は当初合併に対する関心が薄く消極的であったが、適正規模調査委員会や合併研究会が組織され、さらに地域ごとに懇談会が開かれた結果、村民の合併に対する関心が高まり、大勢は合併に賛成していった。しかし、中堀区においては豊科町に近いこと、通学の利便、経済の利得、文化の進展等を理由に豊科町への合併が強く主張されていた。そのため、豊科

町についても合わせて研究する必要が生じた。また、豊科町でも三田村・鳥川村との合併が検討されており、昭和二年（一九五四）二月に交渉が開始され、三月には両村へ正式に合併を申し入れていた。

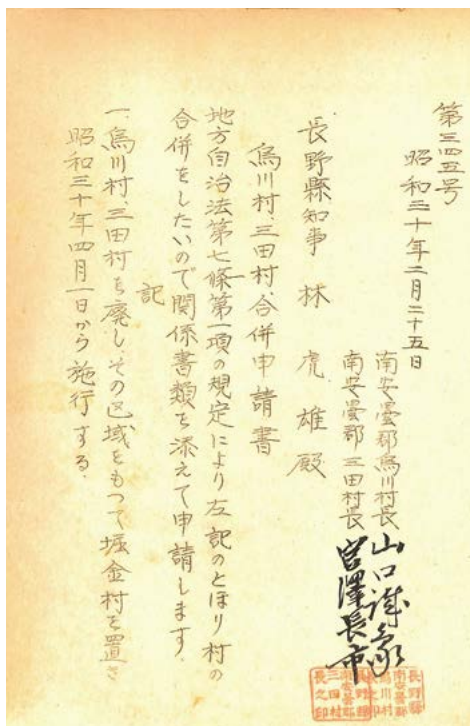
昭和二年一月、鳥川村三田村合併研究委員会が設けられた。この委員会は合計八回の会議を重ね、鳥川村・三田村の合併を可とし、将来の情勢に伴い豊科町への合併を促進するという結論に達した。またこの間に小委員会も作られ、豊科町との合併の研究が進められた。その結果、小委員会の結論として、豊科町との合併の結果による教育・文化・財政・経済その他村政全般における利害得失を具体的に発見することは不可能である、という報告が委員会に対して行われた。

そして昭和三〇年（一九五五）二月、鳥川村三田村合併協議会が組織され、新村建設計画の策定等がはかられていった。この間においても中堀区に対する説得が続けられたが、中堀区では分村してでも豊科町へという動きとなり、関係方面への陳情が繰り返された。このような状況であったが、鳥川村では同年二月二三日の村議会において三田村との合併が一四対一で議決された。また同日、三田村でも全員一致で議決された。

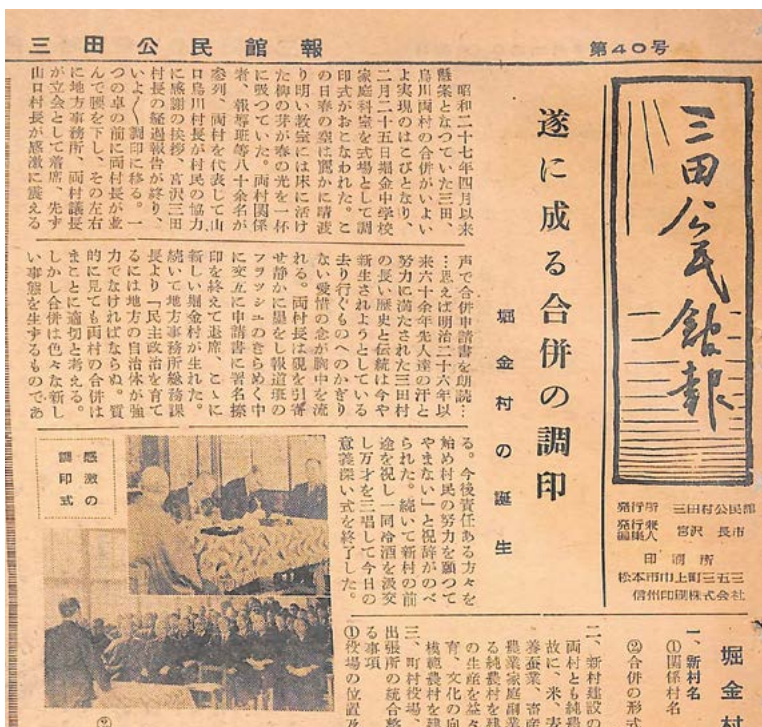
堀金村の誕生

そしてついに、昭和三〇年二月二五日、堀金中学校家庭科室において合併の調印式が行われた。中堀区に対しては調停者を立て、鳥川村・三田村は合併し、同時に新村において民主的な委員の選出により豊科町を目標とする合併研究委員会を組織し、村民に福祉をもたらすことが明らかとなった場合には直ちに豊科町へ合併することを条件とする、との約定書をもつて調停が行われた。

そして、同年四月一日に堀金村が誕生した。四月一日に開庁式を行い、四月三〇日には初代村長に山口誠象氏が就任した。「堀金村新村建設計画」には、村名を「堀金」と



鳥川村三田村合併申請書
（安曇野市文書館蔵）



調印式の様子を伝える『三田公民館報（第40号）』（安曇野市文書館蔵）

堀金村合併五〇周年 そして安曇野市へ

平成一七年（二〇〇五）に、東筑摩郡と南安曇郡の五町村が合併し「安曇野市」が誕生し、堀金村が誕生して五〇年という節目の年に大きな変貌を遂げることとなったのである。また、中堀区にとっては五〇年越しに「豊科町との合併」の願いが成就した瞬間でもあった。「堀金村に関わった人々が築き上げた時代の成果は、堀金の大地に、そして私たちの内に息づき、これからも引き継がれてゆくことでしょう。」（『広報ほりがね 第二七五号』）

（松澤果穂）

◆堀金村の歴史

年	月	できごと
昭和30年	4月	烏川村と三田村が合併し、堀金村となる
昭和31年	4月	堀金村消防団、8分団で発足
昭和36年	1月	小学校北校舎 竣工
昭和36年	4月	堀金村保育園 開園
昭和38年	4月	既設簡易水道 統合
昭和40年	3月	三田、烏川 両財産区統一
昭和45年	6月	堀金村役場庁舎 竣工
昭和45年	9月	県営ほ場整備 着手
昭和46年	5月	「ゆめ山荘」開設
昭和51年	4月	堀金村保育所 開設
昭和54年	4月	堀金公民館、歴史民俗資料館 竣工
昭和56年	6月	三田工業団地 竣工
昭和58年	4月	堀金村消防団、3分団で新規発足
昭和59年	3月	堀金中学校北校舎 竣工
昭和59年	12月	堀金中学校南校舎 竣工
昭和60年	1月	倉田区、上堀区から分離
昭和61年	11月	人口17000人到達
平成元年	6月	総合体育館 竣工
平成2年	5月	烏川工業団地 竣工
平成2年	8月	都市計画区域に指定
平成3年	5月	中央公園 竣工
平成3年	6月	老人福祉・保健センター 竣工
平成3年	7月	臼井吉見文学館 開館
平成4年	12月	公共下水道工事 着手
平成7年	4月	安曇野地域広域排水事業 着工
平成7年	7月	「ほりてーゆー四季の郷」オープン
平成7年	9月	神奈川県真鶴町と友好提携
平成7年	10月	人口18000人到達
平成8年	5月	「ゆめ山荘」オープン
平成11年	5月	総合福祉センター「堀金郷いの里」開設
平成12年	4月	道の駅「アルプス安曇野ほりがねの里」完成
平成14年	4月	県営烏川溪谷緑地 開園
平成14年	5月	人口19000人到達
平成14年	6月	新役場庁舎 業務開始
平成16年	7月	「国営アルプスあづみの公園」一部開園
平成17年	2月	安曇野地域合併協定調印式
平成17年	4月	小学校新校舎 入校式
平成17年	9月	堀金村開村式 開催

堀金村の歴史（堀金村閉村式パンフレットより）

2 常念岳の観光

登山ブームにのって

江戸時代に、北アルプスに登るのは、播隆^{ばんりゅう}上人に代表されるように信仰のためであった。これが明治時代になると学術目的や探検のためというように変化し、さらに中頃よりスポーツ登山も始まった。北アルプスの中でも常念岳は、比較的安全な登山ルートで登れることから初心者にも好評であり、喜作新道ができる以前は槍ヶ岳への最短登路としても利用された。

大正時代の好景気は登山ブームを加速し、多くの登山客が訪れるようになる。登山客に便宜を図るため、大正八年（一九一九）に常念口には本沢烏川案内人組合が、常念岳研究会の指導の下に結成された。事務所は、「堀金町大和屋」に置かれた。その後登山客の増加に伴って、大正一四年（一九二五）に組合を統一して日本アルプス案内人組合ができあがり、本部が豊科警察署の中に置かれた。



松筑自動車沿線案内（部分 松筑自動車株式会社発行）。バス路線を赤く太く記す。田沢駅から豊科駅、さらに須砂土（須砂渡）停留場を結んでおり、小さなバスが描かれる

観光パンフレットから

『松筑自動車沿線案内』（昭和五年（一九三〇）頃発行）には常念嶽登山口（須砂渡）とあり、「豊科より西を仰げば日本アルプスの前衛としてピラミット形の山容を望む、是れ即ち常念岳（二七五七）にして此連峯の覇者たる観がある」と紹介している。常念に至るルートとしては、田沢駅前または豊科より乗合自動車（バス）で須佐渡まで乗車し、登山路を徒歩で登る、とあり、所要時間は田沢豊科間一五分、豊科須佐渡間三〇分とある。

時代が昭和へと移ると、山岳観光はより身近なものになっていった。そんな中で、北アルプスが昭和九年（一九三四）に国立公園に指定される。このときに刊行された『中部山岳国立公園と信濃鐵道株式会社』は、鐵道が通る平地を小さく、背後に常念岳をはじめ山々をかなり大きく描いている。人々が山を見る意識が、変化していったことの証左であるといえよう。

（原明芳）



中部山岳国立公園と信濃鐵道株式会社（部分 信濃鐵道株式会社発行）

烏川の水力発電所

電力需要をまかなった安曇野の水力発電



烏川第1発電所。手前の建物が発電所。背後に水圧管路が見える

水力発電は、高い所から低い所に水を落として、そのエネルギーで水車を回し、さらにそこにつながる発電機を回して、電気を生み出す。安曇野市内の水力発電所は、川の上流に小さな取水口をつくり水を取り入れ、本来の川の流れよりもゆるい勾配の長い水路（導水路）を通して導いた水を貯め（水槽）、適当な落差が得られるところで鉄製の太い管（水圧管路）で水を落とし発電する方式である。この方式は、水を貯めるダムが必要なく、建設のコストが抑えられるメリットがあるが、渇水期には発電量が減少するというデメリットもある。

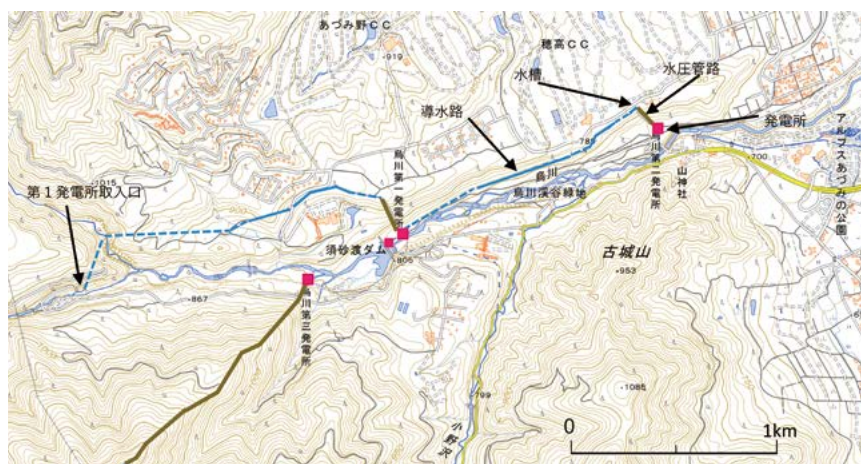
安曇野の地形は、北アルプスから流れ出る烏川や中房川が年間を通して十分な水量を持つほか、勾配も大きく、水を落とす十分な高低差を得ることができる。そのため、この方式による水力発電には適しているといえよう。

烏川発電所の設置

明治二六年（一八九三）以来、大阪造幣局から硫酸製造の技術を払い下げを受け、硫酸製造により発展してきた大

阪アルカリ株式会社（本社大阪）は、大正六年（一九一七）に同業他社を合併し、肥料や化学工業製品等を手がける本格的な総合化学メーカーとなった。そして工場を、名古屋、坂出、川之石、大阪市外大野のほか、松本にも新規に設けることとなったことから、必要な電力を得るために、烏川を流れる水と烏川が造り出した河岸段丘の高低差を活用した水力発電所を計画する。

大阪アルカリ株式会社は、大正七年（一九一八）二月二日、発電所建設の許可が下りたため、同年八月一九日に、地元有力者等一二〇人を集めて、烏川北岸で盛大に発電所地鎮祭を挙行し、烏川第一、二発電所の建設に着手した。そして大正一〇年（一九二一）



烏川の水力発電所の位置

一〇月に烏川第一発電所、同年十二月には烏川第一発電所が運転を開始した。

ところが、新たにスタートしたこの事業は、長くは続かなかった。第一次大戦による空前の好景気の反動からくる不況で業績不振に陥ってしまったのである。いくつかの事業を休止して改善をはかったが好転せず、結局大正一五年（一九二六）に大阪アルカリ株式会社は解散してしまう。

諏訪電気と安曇電気

大阪アルカリの解散後、完成していた烏川第一、二発電所は、諏訪電気が継承することになる。当時の諏訪電気は諏訪一円に電力を供給していたが、製糸工場の旺盛な電力需要に応えるため、自社の発電所を諏訪郡以外にも求め、



大阪アルカリ株式会社関係資料
右『大正拾年一月廿八日 アルカリ会社使用料配当金 下堀耕地』発電所用地が下堀の入会地であり、それを貸し付けた配当金と思われる。
中『大正拾年度 アルカリ会社貸付地域皆伐立木調査書』
左『アルカリ会社貸付地立木競売落札者』（安曇野市文書館蔵）



烏川第2発電所の水槽（上）と水圧管路（下）



小さな電力会社の買収、合併、受電などの対策を講じていた。その一つが烏川の発電所の買収であった。

それに対して同様に西山山麓に発電所を持ちながら地元
に電力を供給していたのが安曇電気である。安曇電気は、
明治三五年（一九〇二）に本社を大町に置いて設立され
た。明治三七年（一九〇四）に中房川に宮城第一水力発電
所完成させ、九月一五日に送電を開始した。さらに大正七
年に第二水力発電所、大正九年（一九二〇）に第三水力発
電所、大正一四年（一九二五）に第四水力発電所、昭和二
年（一九二七）に第五水力発電所の運用を開始する。途中、
大正一二年（一九二三）には取水のための犀川ダムを建設



宮城第一発電所のタービン。1903年にドイツで製造され運ばれてきた。現在も活躍中

し明科発電所の運用も開始した。電気の供給範囲は、設立
当時は大町、池田町、東穂高村、豊科村であったが、やが
て南安曇郡、北安曇郡、筑北地方、さらに更級郡の一部と
広範囲となったほか、松本市周辺も営業エリアとなり、発
電容量が不足していた松本電灯への電気の供給も行ってい
た。

安曇電気は、安曇地域に供給するには大きすぎる発電能
力を持つため、需要開拓に努力したが電灯収入は少なく、
苦しい経営状態が続いていた。さらに昭和三年（一九二八）
以降の金融恐慌と世界恐慌によって、長野県内の製糸業が

衰退、それに伴う農村不
況によって電力需要が落
ち込み、経営不振に陥っ
た。そんな中で昭和六年
（一九三一）に中央電気
（松本を中心に電気を供
給していた松本電灯の後
身）の社長であり、片倉
グループの今井五介が経
営に携わることになる。
そして同じように経営不
振に陥り片倉グループの

支援を受けていた、烏川水力発電所を所有する諏訪電気と同年に合併し、信州電気となり、片倉財閥による経営となった。

しかし、日中戦争が激化すると、法律によって配電事業の国家統制が始まり、広域において配電事業を独占する大規模事業者が九社設立された。信州電気は、愛知県・岐阜県・三重県・静岡県・長野県を管轄する中部配電株式会社に吸収されることとなり、太平洋戦争敗戦後の昭和二十六年（一九五二）に中部電力株式会社へと継承された。

中部電力は、烏川本流のほか、支流の一ノ沢・二ノ沢・東沢にも取水口を設けた烏川第三発電所の運用を、昭和六〇年（一九八五）一〇月に開始した。有効落差が四八五・三五㍉（第一水力発電所は一〇三・六七㍉）と大きく、発電量が当時の穂高町で消費される一年分に相当する規模であった。

須砂渡水力発電所

中部電力は、烏川第一発電所に隣接した、既存の砂防えん堤（長野県が建設）の高さ二〇㍉の落差を利用して発電する須砂渡水力発電所を建設し、平成二二年（二〇一〇）に発電を開始した。本来発電に使用しない砂防えん堤を利用した発電所は、電力会社としては初めてである。

安曇野の豊かな水資源は、明治時代以来、発電への利用が盛んで、生活の向上、産業の発展に貢献してきた。

水力発電は、自然の水の力によって生み出されるため、二酸化炭素の排出がなく、風力発電、太陽光発電と比較してもエネルギー変換効率が高い。純国産であり、自然環境の中で繰り返し使うことができるエネルギーである。水力発電と聞くと従来のような大きなダム建設が思い浮かぶが、近年は、河川の流水を利用する以外にも、農業用水や上下水道を利用する動きもあり、今後の電源開発が期待される。

（原明芳）



須砂渡水力発電所。砂防ダムの右側に短い水圧管路、その下の発電所が見える

4 戦争を記憶するもの

戦争に明け暮れた時代

明治時代以降は、国家間のトラブルの解決のため、時には国家の存亡をかけて戦争をする時代であった。国民は、国家を防衛するのが義務となり、兵士となって戦場に向かった。兵士になると、死を覚悟しなければならない。日清戦争（一八九四・九五）から昭和二〇年（一九四五）に敗戦を迎える先の大戦まで、堀金地域からも多くの人々が戦場に向かい、二四七名の戦病死者を出すこととなった。かれらの死は、国家にとっては必要であっても、自ら望んだものではなく、家族にとっても、受け入れがたい死であった。一方で国としては、戦死者をどのように葬り祀るかが大きな課題となった。

兵士を送り出した地域も、大切な仲間の死を何らかの形で追悼、顕彰しようとした。そこで、戦争があったこと、戦死者を忘れないという誓いを込めた石碑が、多くの人々が目にするのできる道ばたや神社の境内に建てられることとなったのである。

日清・日露戦争の戦争記念碑

堀金の賀茂神社境内に「明治廿七八卅七八年戦役紀念碑」と正面に刻まれた石碑が建つ。明治二七・二八年（一八九四・九五）の日清戦争と三七・三八年（二九〇四・〇五）の日露戦争を忘れないために建てられた碑である。文字を書いたのは「希典」、日露戦争の旅順攻撃の司令官として有名な陸軍大将乃木希典である。裏面には「出征軍人諸氏芳名 いろは順」に続けて、地元、旧三田村から二つの戦争に出征した二九名の氏名が記されている。側面には「明治四四年四月三日建立」と刻まれ、日露戦争が終わって六年後の建立であることがわかる。またその下に「主催者」として二名の氏名、さらに石工名がはいる。

堀金支所の西には、「明治三十七八年戦役記念碑」がある。文字を書いたのは松本出身の陸軍大将福島安正、側面に「烏川村恤兵会長」の氏名が入る。正面台石には「故・・」から始まる戦死者四名の氏名が入り、その下の台石には少し小さく出征者の氏名が刻まれている。出征兵士や留守家族の支援を目的として設立した烏川村の恤兵会が、戦死者の



堀金支所西の白露戦争記念碑



賀茂神社の石碑

顕彰と出征記念を兼ねて建立した、白露戦争を記録した石碑である。

忠魂碑

小田多井の集落の西、植え込みの中に、「忠魂碑」と刻まれた大きな碑がある。文字を書いたのは、当時在郷軍人会長であった陸軍大将一戸兵衛である。裏には、「大正十五年三田村分会」と入る。そ

の年に在郷軍人会三田村分会が建立したことが分かる。白露戦争勝利二〇周年を記念したものだろうか。通常、戦死者の氏名が裏面に入るが、この碑には刻まれていない。国のために戦って死んだ兵士たちの「忠義」の魂をほめたたえる碑でもあり、人々に対して、戦争を続けるために命さえも国に捧げる教育を進める役割を果たした碑でもある。

昭和二〇年の敗戦後、日本を占領・管理した連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）は、軍国主義や極端な国家主義を宣伝する施設であるという理由で、忠魂碑の撤去を命じた。それを受けて各地にあった忠魂碑は、倒され埋められたり、撤去されることとなった。その後昭和二六年（一九五二）にサンフランシスコ講和条約が結ばれると、忠魂碑は改めて掘り起こされたりして再建された。三田村の忠魂碑はどうであったかわからないが、同様の経緯があったものだろう。



三田村忠魂碑



平和之瑞垣

平和之瑞垣

中堀神明社の境内には、参道の西側に「平和之瑞垣^{みずがき}」と正面の上に刻まれた碑が建っている。その下には、「今次の大戦乱は五年の長い年月にわたる戦いで世界を驚かせた」「連合国の国々の努力によって平和となった」、最後に「今後も内外の平和が長く続く」ことを願うという内容が刻まれている。建てられたのは大正九年（一九二〇）であり、「今次の大戦乱」が示すのは、建てられる二年前に終わった第一次世界大戦である。短期間で終わると予想された戦争は、欧米諸国が参戦して四年以上続いた。それも、経験したことのない「総力戦」になり、兵士たちだけの戦争ではなく、国民をまきこむ戦いとなった結果、一五〇〇万人の死者を出した。日本はイギリスと結ぶ同盟に基づいて、ドイツに宣戦布告して植民地であった中国の青島に攻めこみ、戦勝国に名を連ねた。

裏面に刻まれた「寄附人名」から、神社の氏子の寄附によって建てられたことがわかる。中堀の人々が、遠く離れたヨーロッパの悲惨な世界大戦を忘れないため、そして今後の平和を願って、建立した石碑である。

殉公碑

堀金支所の前に「殉公碑」と刻まれた大きな石碑が建っている。「殉」は、自分の生命を投げ出すこと、すなわちこれは公に自分の命を投げ出した人を忘れないための碑という意味である。碑文の下には銅板のプレートがはめ込まれ、大正十一年（一九二二）のシベリア出兵から、日中戦争、太平洋戦争までの合計二四〇名の戦病死者の氏名が記される。裏面には「昭和卅三年戊戌十一月吉日建立」とあり、昭和三十三年（一九五八）十一月に建てられてことになる。

少し離れて、大きな長方形の石が置かれて、銅製のプレートが表裏にはめ込まれている。表には旧堀金村の地区ごとに、戦争からの「帰還者」がイロハ順に、続いて裏にかけて「平和記念殉公碑一般寄附者芳名」、そして「平和記念殉公碑遺族寄附者芳名」が刻まれている。この碑が、戦死者の追悼だけの碑ではなく、「平和記念」、すなわち大戦が終わって一二年後に平和への思いを新たにすることも込め

日輪舎

満蒙開拓青少年義勇軍の志願者が訓練を受けた内原訓練所（茨城県）の宿舎は、円錐の屋根が載った円筒形の建物であった。その形状から日輪舎と呼ばれ、訓練所や義勇軍を象徴する建物であった。材料も統一でき、経験がなくても短期間で容易に建設でき、大人数収容できるという特徴を持っていた。これを模した建物が、全国の主に農業学校で建設され、直接的でないにしろ、国の満州移民政策を視



殉公碑

て、人々の寄附によって建てられた石碑であることがわかる。
先の大戦が終わって八〇年近くになる。これらの石碑は、戦争を直接感じとることのできる地域の歴史的遺産である。身近にある戦争を記憶する石碑から、戦争を知り、平和を考えてみてはどうだろうか。

覚的に伝える役割を果たした。

南安曇農業高校（当時は南安曇農学校）は、昭和八年（一九三三）から堀金村の開墾を進めていたが、農家との連携を密にするため、昭和十八年（一九四三）一月に内原訓練所の日輪舎の形状を模した生徒宿泊施設を起工し、昭和二〇年五月に完成した。

直径一三呎で、上から見るとほぼ円形の木造であり、吹き抜けの内原訓練所とちがって、天井がつき二階建てである。内原訓練所と比較すると、地元の篤志家の寄付を受け良い材料を使用しているのが特徴である。

この日輪舎は、平成二年（二〇〇九）に国の登録有形文化財に登録されている。戦争に直接関わるものではないが、これもまた戦時下の地域の様子を今に伝える遺産であるといえよう。

（原明芳）



日輪舎

戦禍からの入植 新たな開墾地

新たな居住地を求めて

昭和二〇年（一九四五）八月一五日の終戦を迎えて、人々の生活は変化していった。特に戦前・戦中に中国大陸・朝鮮半島・台湾に移住していった人々には、生活の基盤を再生させるという新たな課題が課せられることになった。政府は、一月九日に「緊急開拓事業実施要領」を閣議決定し戦後の復興方針を定めている。その方針には「終戦後ノ食糧事情及復員ニ伴フ新農村建設ノ要請ニ即応シ大規模ナル開墾、干拓及土地改良事業を実施シ以テ食糧ノ自給化ヲ図ルト共ニ離職セル工員、軍人、其ノ他ノ者ノ帰農ヲ促進セントス」とある。ここには戦争により農地を離れた人たちに、再び農業へ復帰してもらおうとする国の政策が読み取れる。

南安曇郡では、旧穂高町域の有明演習地跡地である豊里を中心に開拓地が点在していた。堀金地域では烏川村域の如蔵林・大原・北部・下堀の四地区が開発された。

昭和二五年（一九五〇）の「烏川開拓農業協同組合台帳」によると、開拓農家三一軒のうち、戦争関連で入植し

たのは二〇軒にのぼる。そして、戸主の年齢別では二〇代・三〇代が過半数を占める。家族構成を見ると、夫婦とその子どもがいる世帯が一九世帯である。すなわち、戦前・戦中に他所で生活の基盤を築いていた人たちが、終戦により基盤を失い、入植に頼らざるを得なかったということである。

開拓の成果とその後

入植は決して一世帯の力では実現できない。入植した人たちは「烏川村開拓農業協同組合」（のちに烏川開拓農業協同組合）を設置した。組合員から理事六人、監事三人を

入植者の前歴・戸主年齢・世帯構成

前職	世帯数	戸主年齢	世帯数	世帯構成	世帯数
引揚	13	10代	0	単身世帯	4
満蒙開拓	5	20代	11	兄弟世帯	1
復員	2	30代	10	夫婦	5
社員	8	40代	3	夫婦＋子供	19
農業	1	50代	6	三代世帯	2
なし	1	60代	0		
不明	1	70代	1		
合計	31		31		31

堀金村317「烏川開拓農業協同組合台帳」（安曇野市文書館所蔵）より作成



個人蔵（一部加工あり）
居宅を建てた時の写真。後方には
拓かれた土地が見える

選出し、事務所は如蔵林に置かれた。
昭和三四年（一九五九）に、組合は農協法に基づく組織となり、組合長には百瀬章が選出された。この時には六軒が組織を離れ、二五軒となっていた。その中でも入植者の努力や地元集落の協力により、下堀・大原では一戸当たり平均一町歩の開田を行った。傾斜地に位置する如蔵林では飲料水や電気の整備が困難で、受益者の負担も大きかった。当初は地形を生かし酪農が行われ、五戸が組合を結成し経営を行っていたが、昭和四〇年頃には稲作に転じた。組合全体でも兼業農家も増え、その後の産業の転換に伴い、昭和四七年（一九七二）に開拓農協は解散となる。戦禍から逃れた人たちの生活の基盤を取り戻すために行われた開拓は、現在では市域の風景の中に溶け込んでいる。

（青木弥保）



国土地理院空中写真（昭和五二年一〇月二二日撮影）より作成
如蔵林は斜面を切り開き、農地とした様子が分かる。大原・北部・下堀は既存の農地の中に入植者が入っていったため、開拓地は一見すると分からない。如蔵林の一部は現在国営アルプスあづみの公園の敷地となっている

6 須砂渡修練所から啼鳥山荘へ

堀金岩原の砂渡山神社前にある公衆トイレの近くに「須砂渡寮跡」と書かれた標柱がある。「須砂渡寮」とは小中学生の宿泊学習の場として使われた施設で、後に場所を変え「啼鳥山荘」となる施設である。その啼鳥山荘も「安曇野市マウンテンバイクコース」の受付施設とするため、令和四年度に宿泊施設

としての営業を終了した。時代とともに、名前や場所が変わってきた施設だが、宿泊学習の場として、堀金地域はもちろんのこと、市内の多くの小中学生が同施設を利用してきた。ここでは、宿泊学習の場となった施設の歴史をたどってみたいと思う。



須砂渡寮跡

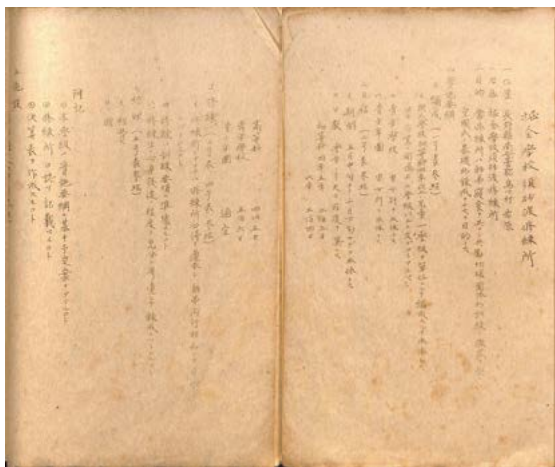
「アルプスクラブ（倶楽部）」の発足

須砂渡寮の始まりは、「アルプスクラブ（倶楽部）」の発足にある。アルプスクラブは、当時の烏川村岩原の尾日向勘次郎氏が主唱して創立されたもので、砂渡山神社前に小屋を建てて登山者の休憩、宿泊等の利便をはかった。この小屋は株式の形で近郷の人たちから資金を集めて建てられ、第一回の株主総会が大正一四年（一九二五）に開かれている。

アルプスクラブでは、入浴ができ、酒の持ち込みや料理もできて一時は客足も多く、格好の憩いの場となっていたようである。しかし、昭和二、三年頃から経済的な不況が押し寄せ、また昭和一〇年（一九三五）頃からは戦争の影響でアルプスクラブの経営維持ができなくなった。そのためアルプスクラブは立ち消えとなり、昭和一六年（一九四一）にほとんど寄付の形で烏川村へ引き渡されたのである。

「須砂渡修練所」の開設

その後、小学生が笹の実や菓草を採り、その売上金に村の予算を加えてアルプスクラブの補修を始めた。そして昭和一七年（一九四二）に「須砂渡修練所」が開設された。また同年に実施要綱が定められ、宿泊訓練をする目的や炊事・清掃などの各班の業務内容、修練所での心得、訓練要綱などが書かれている。実施要項によると、この修練所の目的とするとところは「教師と生徒が寝食を共にし、互いに切磋琢磨するため宿泊訓練する」であった。また、宿泊訓練は五月中旬から一〇月下旬まで行われていたように、



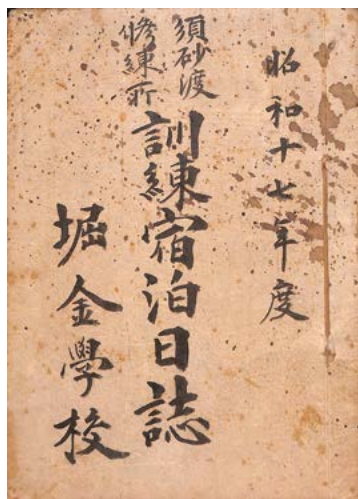
須砂渡修練所実施要綱（安曇野市文書館蔵）

初等科四、五年が二泊三日、六年生が三泊四日、高等科が四泊五日、青年学校が五泊六日となっている。

宿泊訓練の際は宿泊日誌が書かれており、そこからは「大平作業場ニテ馬鈴薯ノ中耕・除草・追肥」といっ

た作業の内容や「男子ノ炊事デ危フマレタルモ炊事指導ノヨロシキヲ得テ美味ナ食事ヲ摂ルコトが出来テ幸ナリシヲ喜ブ」などの食事の様子、「夕飯迄自由時間、ボールを行ふもの、炬燵にて唱歌をうたひ楽しむ女子、須砂渡山に登り滑りに興じたりしい男子、子供は實に無邪気で毒の無いもの」といった子供たちの楽しそうな様子をうかがい知ることができる。

また、青年学校の生徒にとっては修練道場であって、奥



須砂渡修練所訓練宿泊日誌（安曇野市文書館蔵）

地大平原に修練農場一ヘクタール余を開墾して高冷地に適する作物を試作し、戦時における食料増産を果たした。

須砂渡修練所はこのようにして昭和一九年（一九四四）まで続いた。



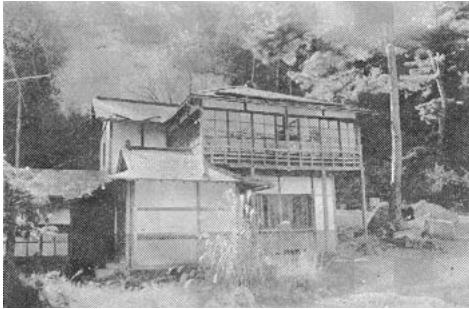
疎開児童の受け入れ

昭和二〇年（一九四五）になると、須砂渡修練所は疎開児童の宿舎として提供された。堀金国民学校では、同年四月一日に東京都塚戸国民学校の児童一一五名の受け入れを決定し、五月九日に児童らが疎開してきた。疎開児童は修練所と岩原公民館に分かれて生活。五、六年生が通学し、他の児童は修練所で学習した。

昭和二〇年八月に終戦を迎えると、疎開児童達は順次帰京していった。一一月九日には塚戸校児童全員が帰郷した。昭和二〇年の職員会誌によると、一一月七日には送別式が堀金国民学校の体操場で行われ、九日の帰郷時には豊科駅まで全校を代表して高等科二年生が見送りをし、校長他職員は村はずれまで見送りをした。

「須砂渡寮」としての再開

戦時中は疎開児童の受け入れ先として利用されたが、戦後の昭和二十一年（一九四六）には「須砂渡寮」と改称し、



須砂渡寮（『堀金 第4号』より）

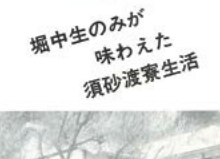
宿泊訓練が再開された。

須砂渡寮の宿泊は、小学校では五年以上の児童が行い、二泊三日、年一回実施された。昭和二三年（一九四八）からは小学校四年以上となった。昭和二八年（一九五三）からは四年生一泊二日、五年生以上は二泊三日となり、昭和三三年（一九五八）からは四年生以上は全部一泊二日に改められた。

中学校では当初は年二回（春は二泊、秋は一泊）行われたが、昭和三八年（一九六三）からは、五月から八月にかけてクラスごと一泊二日から二泊三日の行程で行われるようになった。堀金中学校『三十周年記念誌』によると、宿泊訓練を行うことの意義は「校内では出来ない学習体験を



今、どこで空で？ 寮を背に記念撮影 昭24



堀中生のみが
味わえた
須砂渡寮生活

堀金中学校『三十周年記念誌』より

させる事にある」と書かれており、計画準備、しおりの作成、食事、清掃など生徒の自主的な活動にもとづき行われたようである。

このように須砂渡寮での宿泊訓練は、建物の老朽化により使用中止となる昭和四五年（一九七〇）まで、二五年間行われた。

「啼鳥山莊」の誕生



啼鳥山莊起工式の様子

昭和四六年（一九七一）、現在の場所に啼鳥山莊が建設された。総工費一〇〇〇万円を投じて新設され、その後、昭和五一年（一九七六）と五二年（一九七七）に増築された。大小八つの客室があり、収容人数一六〇名、炊事場、食堂、ラドン浴場を備えていた。

啼鳥山莊は、児童の宿泊学習として利用されるだけでなく、グループや会社の研修、また家族の憩いの場として幅広く利用された。

『堀金小学校百年誌』には、啼鳥山莊での宿泊学習について次のように書かれている。「本校の伝統的な学校行事

であり、子どもと子ども同士の心の輪を広げ、豊かな自然の中で、自主的な生活を営む学習である。また、この学習は、教師と子どもたちにとって、人間同士がぶつかり合いながら、そこで自分の生き方を探求していく場ともなっている。」堀金小学校にとって啼鳥山莊での学習は、重要な位置を占めていたことが伺える。



「啼鳥山莊」の看板は今もそのまま残されている

そして令和四年度、「啼鳥山莊」は宿泊施設としての営業を終了した。現在は「安曇野市マウンテンバイクコース」の受付施設として活用されている。「子ども達の思い出が詰まっている施設なので、啼鳥山莊の名は残していきたい」と、指定管理者の（一社）MSJ代表理事の小林可奈子氏が話してくれた。

施設の利用方法は変わったが、今後も多くの人たちを迎え入れてくれるに違いない。

（松澤果穂）

7 新たなる時代の夜明け 堀金学校

「新たなる時代の夜明け おのずから湧き出ずるもの」とは、昭和二八年（一九五三）一月一日、堀金中学校で披露された臼井吉見作詞による校歌の歌い出しである。校歌制定の喜びを当時のPTA会報では「歌詞は三田村出身の我が国屈指の文学評論家臼井吉見先生の、郷土愛と、若き学徒の成長を念願する熱意に燃えて、多年想を練られ、流麗^{りゅうれいかつた}豁達^{かつた}な筆に成る大作であります」と伝えている。明治維新、敗戦を経て、新時代の教育制度がスタートした。新たななる時代の夜明けを、堀金がどのように迎えたのかを述べたい。

三田村烏川村組合立堀金小学校の開校

明治五年（一八七二）、学制発布により堀金地区に六校が開校する。明治一九年（一八八六）、六校は、三田村烏川村組合立堀金小学校となり、現在の小学校の場所に本校が設立された。校庭北東には一本の松が見える。由来を記したプレートには「この松は、初め今の西門あたりに植えられていた。明治三八年木造二階建てガラス窓の校舎が建



今も校庭に残る老松

てられた時、その玄関脇に移植された。昭和三六年の校舎ができた時、現在の所に再び移されたが、百年以上にもわたる堀金小学校の歴史を知っている松ともいえる」とある。堀金小学校の卒業記念写真の背景には、この老松を配しているものが多い。

明治三三年（一九〇〇）、小学校令の改正により、組合立学校は分離する方針が出された。堀金学校解散の危機である。『堀金小学校百年誌』によると、こうした折に偶然帰省した烏川村出身の京都帝国大学教授青柳栄司が県当局に対し、この方針の不合理を指摘したり、文部省普通学務局長や大臣を説得したりすることにより当局の了解を得て、従来通りの組合立堀金小学校が存続することになった。その後、堀金小学校は、幾度となく増改築を行っている。また、周年記念事業の際にも、教育環境の充実を図り、樹

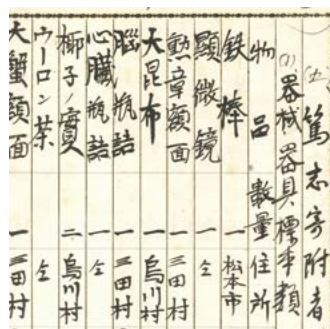
の文部省給食実験校の指定を受け、地元農協と連携した取組によって、その年の九月から県下で初めて週二回の米飯給食が開始された。中学校の米飯給食は昭和五一年（一九七六）からである。地元食材を取り入れた地産地消給食の考え方は、現在でこそ一般となっているが、その取



全国学校給食優秀校の表彰状

給食に始まった学校給食は、昭和三十一年（一九五六）に週六日の完全給食となる。中学校の完全給食は、昭和三十九年（一九六四）である。

小学校は、学校給食の施設や運営、指導が優れているということで、全国学校給食優秀校として、文部大臣表彰を受ける。昭和四五年（一九七〇）には県下で唯一



創立 30 周年の寄附者の記録

木や学習教具など地域からの支援を得ている。


食育・地産地消の先駆け

堀金小学校において、昭和二十一年（一九四六）の味噌汁

堀金中学校の開校

組は、堀金小学校が発端であるといえよう。

昭和五九年度「職員文集」（三師会）に「昭和二二年四月一日からは、学制改革により、いわゆる六三制の実施となり、堀金小学校と堀金中学校となった。堀金中学校は、小学校に同居の形で発足した。新しい中学校はどのようなであつたらよいか、種々の指示が次々とあり、又職員の研修も数多くあり、目まぐるしい時期を過ごしたが、学習では、「話し合いによる授業形態」そして自治会（後に生徒会）がつくられ、活発な活動が行われるようになった」とある。



景

運動会は戦前、鍛錬教育のひとつとして位置づけられていたが、戦後は、競技力の向上だけでなく、集団への所属感や連帯感、大会運営に参画する力、調整力など総合的学力を身に付ける教育活動として位置づけられた。しかしその後、教育活動の精選の中で



堀金中学校開校当時の授業風景



全国大会に出場した堀金中学校男子陸上部

運動会やクラスマッチは、廃止や縮小の方向である。陸上クラスマッチが市内七校の中で最後まで行われていた学校は、堀金中学校である。ここに陸上競技を大切に育ててきた地域性を見ることができ

る。
堀金中学校男子陸上部は、令和四年（二〇二二）、長野県大会において優勝し、全国大会に出場した。全四八チー

ム中一〇位という輝かしい成績だった。

「自分をつくる」自治活動

昭和二二年の中学校開校と同時に、生徒の自治活動の育成が学校目標の基盤に据えられ、生徒会活動が活発に行われるようになった。

昭和四六年（一九七一）生徒会費の軽減が決議され、会員全員が薬草採集を行うこととなった。また、昭和五二年（一九七七）には耕作委員会が新設され、ギンナンの収益を生徒会活動に役立てるようになる。この薬草委員会と耕

作委員会は、昭和五六年（一九八一）に生産委員会に統合され、現在に至る。

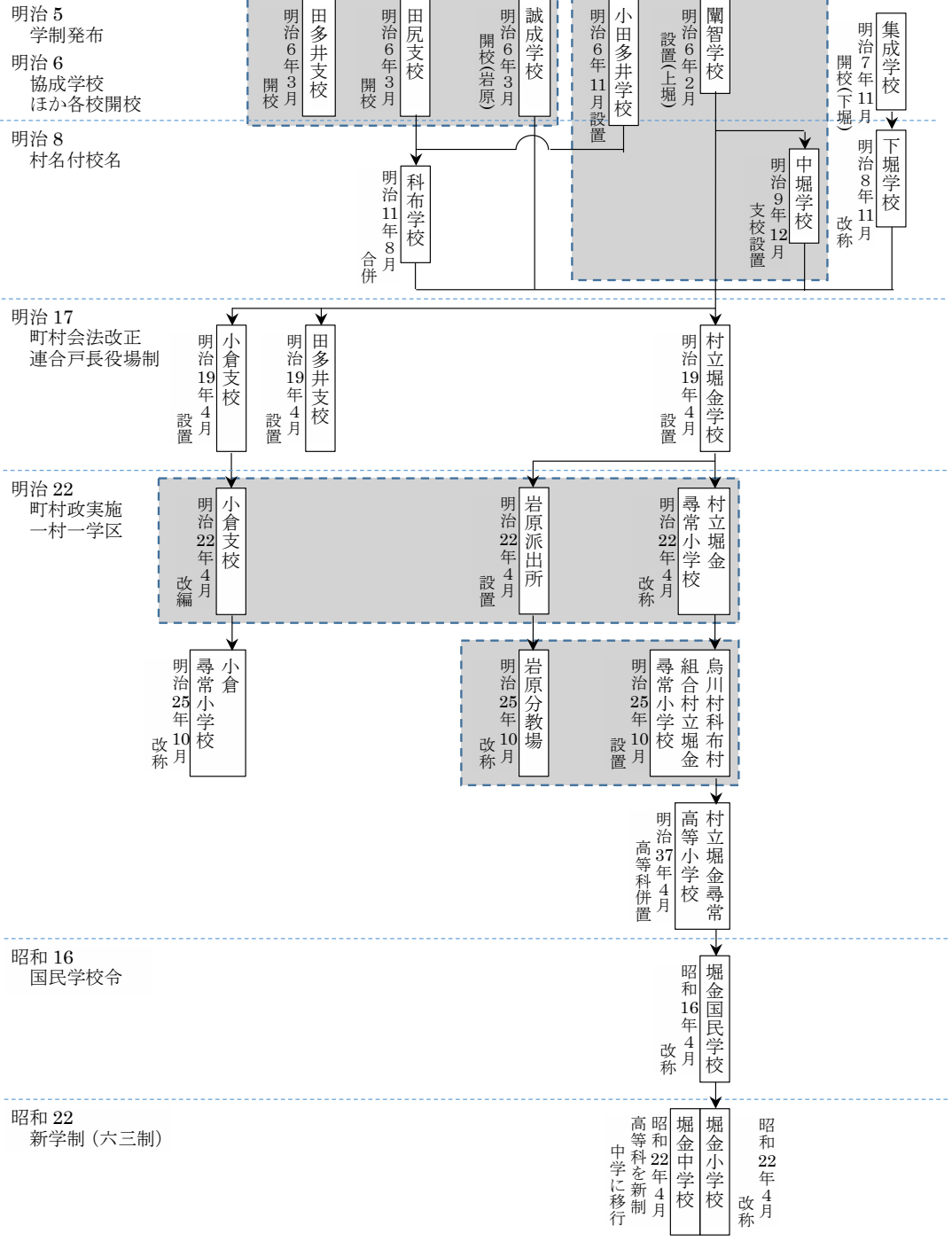
さらに現在、夏休み中には、「トマト収穫作業」が行われている。JAやゴールドパックスの協力により長年続いている取組である。この収益は生徒会費に充てられている。堀金中学校は、生徒会費を各家庭から徴収していない。このトマト収穫や薬草採集、ギンナン収穫により、自分たちの手で活動資金を得ているのだ。

この「自分をつくる」自治活動は、臼井吉見の講演にある『自分をつくる』に通じる。臼井は、自分をつくる上で大切なことは、「からだを動かし、頭で考え、心に感ずる」であるとし、「何ごとによらず、できるだけ自分のからだを動かし、何ごとによらず、できるだけ自分の頭で考え、何ごとによらず、できるだけ自分の心で感ずる。それを徹底的に続けることによって、暮らしむきの実際生活の真只中に、それとはちがった、独立した、純粹で、真実にみちた精神世界が、諸君の中に確実に成立します。これが中学時代で一番だいじなことだと思います」と述べている。

この言葉の実践が、堀金中学校の生徒会活動の姿である。臼井吉見は、昭和四〇年代、堀金中学校を訪れ、生徒たちに語りかけた。もし今の生徒たちの姿を見たら、どう答えてくれるだろうか。

（逸見大悟、平沢重人）

堀金地域の学校変遷図



1 堀金から日本の食卓へ 安曇米

米どころ・安曇野

日本人の食卓に欠かせない米。その生産量をみると、新潟県や北海道、秋田県などが毎年ランキング上位に位置するが、長野県も一〇万あたりの収量、及び一等米比率において全国トップとなっている（令和四年（二〇二二））。すなわち、米の質でみれば全国有数の産地なのが長野県だと言える。



田植えを終えた堀金の水田

そしてその長野県の中でも、安曇野市は作付け面積、収穫量ともに一位（令和四年）。つまり、安曇野市は全国に誇る「良質な米どころ」なのだ。

実際、安曇野の景観を語る上で、水田の存在は欠かせない。田植えの時期の水鏡に映る北アルプスや、秋の訪れとともに黄金色に色づく一面の稲穂は、安曇野市を代表する景色といえるだろう。なかでも堀金から穂高にかけての水田地帯は、米どころ安曇野を代表する産地となっている。

烏川扇状地の扇頂（扇央）にあり、昔は水利に苦勞した堀金地域だが、拾ヶ堰をはじめとした多数の堰が開削されてからは多くの田が開かれ、人々の生活を支える米が作られてきた。記録によれば、明治十二年（一八七九）の時点で烏川村内の全ての家が何らかの農業を営んでいるとある。農業は生活のために欠かせないものであり、米や野菜を作ってそれが食卓に上るのが当たり前だった。

一方で、この頃の農業技術はまだ拙く、長野県の米も決してよい品質のものではなかった。実際、明治三〇年（一八九七）に新潟県で開催された一府一県連合共進会（地方博覧会）において、長野県の米は、「良品に乏しく、

色沢・乾燥共に不良、素質亦從て脆弱……」と酷評を受けたとの記録がある。これは種籾の質が悪いうえに狭い苗床に多量に籾を撒くことで成長不良を起こすことや、肥料の効率が悪いこと、苗の植え付けが不規則で間隔が狭い、等が問題であると指摘されている。

しかしそれから徐々に農業技術が進歩するに従って、長野県、あるいは堀金地域の米作りも改善が図られてきた。種籾の選別方法や苗代の改良による苗の質の向上、さらに品種改良も進み、大正時代頃には面積あたりの収穫量も二倍にまで上昇したのである。

紫雲英と白壁

明治期から昭和期にかけて、米作りにおける肥料としては、主に下肥（人糞尿）と草木灰、そして緑肥をあわせて使うことが一般的だった。このうち緑肥というのは刈り取った雑草等の草のことであり、緑肥として利用するために紫雲英（別名・レンゲ）を冬季間に田で育てるというやり方がよく見られた。

春になると、田に紫雲英の花が一面に咲き乱れる。この風景を、臼井吉見は小説『安曇野』の中で、「これら残雪の高い山々がうしろにひかえた、いまごろの安曇野ほど美しいところを良は知らなかった。見渡すかぎり、紫雲英

の花で埋もれ、そこかしこに土藏の白壁がちらほらする（中略）れんげ田がまもなく鋤かれて、代かきがはじまり、たちまち水田に化してしまふ」と描写している。

この地方では、紫雲英の生育がよかったようで、緑肥として紫雲英を使用するこの方法は、広く一般的に取り入れられていた。やり方も繰り返され、やがて昭和三〇年代前半に化学肥料がメインとなるまで、米作りを支えることとなる。

臼井の目に映った故郷の田は、紫雲英と稲という二つの側面をもって見る者の心を打つ風景を作り出していたのである。



かつてはあちこちで見られた紫雲英畑

昭和から平成へ

日本が高度経済成長期を迎えた昭和中期頃、農業は様々な問題に直面していた。安曇野においてもそれは同様であり、兼業農家の激増や他産業との所得格差の拡大等、根幹である農家の存続を脅かす問題が持ち上がっていたのだ。

そんな中で昭和四一年（一九六六）に南安曇郡下の一五農協が合併し、あづみ農協が誕生する。また昭和四四年（一九六九）には拾ヶ堰下の地区が第二次農業構造改善事業の調査計画地区に指定され大区画圃場になるなど、堀金に農業近代化の波が押し寄せることとなった。村と農協は、「均質でうまい米を、低コストで生産することで、産地間競争に打ち勝つ」ことを目標に掲げ、各種の事業に邁進した。

この構造改善に関連した事業としては県営圃場整備や大規模農道整備等があったが、中でも目立ったものとして、昭和四五年（一九七〇）に烏川に建設されたカントリーエレベーターが挙げられる。一基に二五〇トの籾を収納する巨大サイロが八基、見渡す限りの田園風景の中に突如としてその威容を現したのである。

建設当初は、利用する米農家が少なく、稼働率も悪かった。それは、これまで農家が行ってきたハゼ掛けや落穂拾いといった丁寧な収穫のやり方から、大きな機械を入れて

一気に収穫するという方法への変化に、農業者たちの気持ちが付いてこなかったということがあったようだ。しかし圃場整備が進むにつれ、徐々に機械化は浸透し、カントリーエレベーターの利用率も向上していった。

その後、昭和四六年（一九七一）には減反政策が打ち出され、世の中は米が余る時代へと変化していった。すなわちこの昭和四四から四六年という年は、まさに堀金における農業近代化の潮目となったのである。



遠くからもよく見えるカントリーエレベーター

未来へ繋ぐ米作り

昔から連綿と続いてきた米作りも、近年の社会情勢の変化により、また新たな局面を迎えつつある。農業者の中には、この変化に対応すべく、従来なかった取り組みを始める人も出てきている。

地域を代表する農業法人、株式会社あづみのうか浅川では、農産物を通じて安曇野を知ってもらい、消費者との繋がりを大切にしたいという思いから、収穫したものの一部を精米し消費者へ直接販売する方式をとっている。これには白米を小分けで売ることと単価が上がるという経営上のメリットもあるが、何より「安曇野」というブランドを最大限に生かせることが大きいという。また、有機農業や無農薬米にも積極的に取り組んでおり、より安全で安心できる「質」を追求した農業と言えそう。

「農家にも多様性があつていいんじゃないか」と代表の浅川氏は語ってくれた。「農業もまた安曇野の自然や生態系の中の一員。そういう考え方は有機農業とマッチする。そうしてこの田園風景を次の世代に繋いでいくことが我々の使命だと思う」。

安曇野の根幹ともいえる田園とそこで営まれる農業。取り巻く環境は決して楽ではないが、新たな景色もまた見え始めている。

(幅拓哉)



収穫を目前に控えた「あづみのうか浅川」の圃場

2 安曇野を水害から救う排水路

洪水災害から堀金を守る

安曇野は用水路について語られることが多い。その代表が奈良井川から取水し、梓川を越えて安曇野に水を届けている拾ヶ堰だろう。他にも梓川・烏川・高瀬川・犀川など各地の川の水を使い張り巡らされた用水路がある。用水路は雨が降ると排水路として水の受け皿となり、余分な水を川に流すようになっていく。

扇状地を構成している地

質は水が浸み込み易く、河川によつては途中で水が枯れてなくなってしまう。黒

沢川や鳴沢川はその典型であり「尻無川」となっている。

黒沢川流末とあづみ野排水路

そしてこういった河川は、激しい雨が降ると今度は濁流となつて流れ下る。過去にはそういった災害も数多く発生したが、流路が整備されたり、護岸整備が進んだりして少なくなった。そ



昭和58年(1983)
田多井付近「新堀堰」の洪水災害

れでも豪雨が安曇野を襲うと、排水機能が追い付かず、水が溢れる災害となる。

堀金を守るあづみ野排水路

昭和五八年

(一九八三) 九月の

台風一〇号や平成

一一年(一九九九)六月の豪雨では、安曇野市は多くの場所で土砂災害や洪水災害が発生した。特に堀金では黒沢川や鳴沢川の水を受ける新堀堰が溢れ、三田地域を中心に多くの被害が出た。この災害を機に、農地や生活環境を守るために排水路整備の機運が高まり、国営安曇野農業水利事業が始まった。予備調査は昭和六二年(一九八七)から実施され、平成七年(一九九五)に着工、平成一八年(二〇〇六)に完成となった。これにより完成した、三郷・堀金地域に





拾ヶ堰の水位調整ゲート

拾ヶ堰は三〇〇〇分の一（一万分の一）と緩やかな勾配の用水路であり、ひとたび大雨が降れば十分な排水ができず溢水災害となることが多かった。そこで農業水利事業では「拾ヶ堰排水路」として従来の用水路に十分な排水能力を担わせるため、流路の断面を広げた

拾ヶ堰も排水路

またがる「あづみ野排水路」は、黒沢川流末から万水川まで途中鳴沢からの排水を合流させ二・九段をつないでいる。大雨の際には黒沢川や鳴沢川その他、梓川からも排水を入れ、直接万水川に放流する仕組みになっている。これにより、堀金地域は長年悩まされてきた溢水災害から、解放されることとなったのだ。



あづみ野排水路

のである。そのため、拾ヶ堰は深く掘られることとなり、用水路としての機能を保つため、水位を上げる水位調整ゲート（ウォッチマンゲート）が設置された。また堀金小学校前「大曲」^{おおまがり}から排水施設監視所までのわずかな区間は水を逆流させ万水川に放流する仕組みになったのである。

国営安曇野農業水利事業は、安曇野の農地を守るための利水だけでなく、治水により住民の安全を守っている。そのため、流域全体を地域としてとらえ、水の流れを考えることで域内の水をコントロールし、それぞれの水路が役割を果たすことで、災害を防いで農地や暮らしを守ることができるのだ。地域を俯瞰する目の重要性を感じる。

（千村裕一）

排水路施設と概要

（計画基準雨量：最大日雨量 103.8mm 1/10 年確率）

水路名	延長 (km)	受益面積 (ha)	排水河川	備考
本 神 排 水 路	2.6	320	梓川	
梓 橋 排 水 路	2.5	320	梓川	
あづみ野排水路	2.9	1320	万水川	
中信左岸排水路	3.4	(230)	万水川	() はあづみ野排水路内数
三 田 排 水 路	2.5	(70)	万水川	() はあづみ野排水路拾ヶ堰排水路内数
拾ヶ堰上流排水路	1.8	2400	万水川	
拾ヶ堰中流排水路	0.7		万水川	
拾ヶ堰下流排水路	6.0	2400	烏川	
勘左衛門堰排水路	2.6	(200)	万水川	() は拾ヶ堰排水路内数
新堀堰排水路	1.8	(170)	烏川	() は拾ヶ堰排水路内数
豊科南排水路	3.7	820	万水川	帯広川経由
有 明 排 水 路	1.5	990	穂高川	天満沢経由
合 計	32.0	6170		

安曇野農業水利事業所『安曇野』より

3 ほりがね物産センター

昭和六二年（一九八七）六月、堀金村のある地区に直売所「無人市」が産声を上げた。最初はちよつとした無人販売所だったのが、その安さや新鮮さが評判となり、「新鮮市」と名を変えて他の地域にも広がりを見せ始める。

当初、この立ち上げに携わったという下堀地区のYさんは、「私と新鮮市」と題して、公民館報に以下のように寄稿している。

初めは下堀の空き家となった消防団の詰め所を区から借りて、無人市の名の通りナスやキュウリなど家で余ったものを並べて売ったのが初めでした。採りたての新鮮なものがそろっていて、しかも安いなどと口コミで伝えられ、名称も新鮮市に代わりました。

その新鮮市も、下堀の成功を機に、扇町や岩原などと次々に生まれ、特に上堀の堀金新鮮市は大規模農道の端にあり、駐車場も十分など地の利もあって、下堀に負けない盛況を見せております。

やがて平成三年（一九九一）五月には、堀金地域全域で

の直売所「堀金新鮮市」として現在の場所にプレハブでの営業がスタートした。その後、村からの支援もあり、「堀金新鮮市」を母体とした「旬の味ほりがね物産センター組合」が平成八年（一九九六）五月発足する。そして平成一五年（二〇〇三）三月、「農事組合法人 旬の味ほりがね物産センター組合」となり、安曇野市の誕生を経て現在のほりがね物産センターとなった。

今日では、市内外から多くの客が訪れ、農産物をはじめとした特産品を買い求め、また名物料理に舌鼓を打っている。



ほりがね物産センター

営業の三本柱

センターには直売、加工、食堂の三つの柱がある。

物産部（直売所）では、堀金産を中心に安曇野中からの新鮮な野菜を取りそろえている。生産履歴等が提示され、消費者が安心して購入できるようになっている。また、商品知識は従業員全員が共有し、消費者の問い合わせに対応できるような取り組みがみられる。

加工部では、地元の食材や旬の食材を活かすことを第一に考え、年間三〇〇種類の加工品を生産し、作りたてをすぐに直売所で販売して消費者から好評を得ている。地元の原料にこだわり、地域の学校給食への提供もしている。

また、「かあさんのおむすびの店」と名付けられた食堂部では、直売所の食材をふんだんに使った田舎風メニューが提供される。ここでしか味わえない数々のメニューが、訪れる人に人気を博している。



にぎわう店内



様々な加工品も並ぶ



人気の食堂メニュー

努力の結晶とこれから

センターでは、これまでの努力により、様々な賞を受賞してきた。

- ◆平成一〇年 園芸特産功労者表彰（県知事賞）
- ◆平成一一年 豊かなむらづくり優良集団表彰（農水大臣賞）
- ◆平成二〇年 地産地消優良活動表彰・地域振興部門（農水大臣賞）
- ◆平成二二年 「信州道の駅ホットインフォーメーション大作戦！」
食の祭典食コンクール銀賞（おにぎり定食）
- ◆平成二三年 「信州道の駅ホットインフォーメーション大作戦！」
食の祭典食コンクール銀賞（常念天丼）

センターでは少子高齢化が進む中で、世代交代を見据えて新規組合員を募集している。現在、堀金地域が主である農産物の供給を、今後は安曇野市全域に広げる検討もしており、地産地消を推進し、消費者への安心・安全な農産物の提供を切に願っている。今後も堀金地域の中心的な施設として、人と人が触れ合い、地域コミュニティが豊かになる大事な場でありつづけることだろう。

（山田賢一）

新たな観光資源の開発

長野県内でも有数の、と形容して差し支えないであろう観光地、安曇野。その特徴として、特定の施設や名所が単体で名を馳せているのではなく、市域全体に及ぶ豊かな自然と景観が観光地となることが挙げられるだろう。

北アルプスの麓に広がる田園風景や湧水に由来する豊かな水を求めて、全国のみならず海外からも観光客が訪れる。しかし一方では、強力な誘因力のある施設や名所をあまり持たないがゆえに、これまで観光誘致やブランディングの面では苦勞が絶えなかった。それは堀金地域においても同様であり、昭和期以降、地域を挙げてブランディングに取り組んできた歴史がそこかしこに垣間見える。

国営公園と県営公園

堀金地域の観光の中心を担っているのは烏川渓谷一帯であろう。この周辺には国営アルプスあづみの公園の堀金・穂高地区と、県営烏川渓谷緑地が連なり、周辺の宿泊施設やスポーツ施設が一体となって訪れる者を楽しませる。

昭和後期に日本中で巻き起こったリゾート・観光ブーム



開園直後の国営アルプスあづみの公園



県営烏川溪谷緑地

園面積を五〇〇
 畝として計画し
 ていたが、財政
 上の理由から
 三五〇畝へと修
 正した。これを
 受けて堀金・穂
 高地区に隣接の
 一五〇畝が県営
 公園として整備
 されることが決
 定された。折し
 も平成一〇年

により、堀金村においても様々な観光振興策が検討されることとなった。中には村の予算九二年分を費やして、蝶ヶ岳山頂までロープウェイを設置しようという構想まであったようだ。

一方で、国で検討していた新たな国営公園の設置について、堀金を含めた南安曇郡では烏川溪谷一帯を候補地として誘致する動きが積極的であった。この活動は平成元年（一九八九）に実を結び、堀金・穂高と大町・松川の二地区に公園が設置されることとなる。

（一九九八）の長野オリンピック開催に向けて全県で機運が盛り上がっている頃のことだった。

堀金村の総合計画の中では、観光に関する構想として、「国営公園・県営公園の建設に伴う周辺開発として、（中略）滞在型保健休養地づくりを推進する」としており、村としてもこの両公園を観光振興の中心に据えていたことがわかる。

その後、平成一四年（二〇〇二）には県営公園が、同じく一六年（二〇〇四）には国営公園が、それぞれ一部開園となり、何期かの工事を経て完全開園に至っている。

二つの公園の基本理念はともに、「自然と文化に抱かれた豊かな自由時間活動の実現」となっており、互いに機能を補完しあいながら、自然と文化の融合や新たなリゾート文化の確立を目指している。

公園では自然に親しんだり各種のアクティビティを楽しんだりすることができ、年間を通して老若男女を問わず多くの客で賑わっている。とりわけ国営アルプスあづみの公園においては、園内の自然を生かした様々なイベントや、子どもたちに向けた自然観察会、更には冬の夜を彩る大規模なイルミネーションなど、季節を問わず楽しめる催しが多数開催されている。年間で約三〇万人が訪れるこの公園は、名実ともに安曇野市の観光産業の中心を担っていると言えるだろう。

ほりでーゆ〜四季の郷

村内に多くの農家を抱える堀金村では、農業者の高齢化や世の中の流れの変化に伴い、農業振興を図るうえで農業者の福利厚生は必須であった。また同時に、村内に大きな宿泊施設がないことから、観光振興の面でも宿泊施設の整備は喫緊の課題となっていた。

そこで、前述の国営・県営公園の整備がスタートしたのと時を同じくして、農業と観光の拠点となり、また観光に訪れた都市住民と地元住民の交流の場とするため、「堀金村農村コミュニティセンター ほりでーゆ〜四季の郷」が整備され、平成七年（一九九五）にオープンした。場所は公園からほど近い烏川溪谷の中である。約二〇億円をかけた大事業であった。

出来上がった施設は延床面積三七〇〇平方メートル、四階建てで堀金村内でも特に大きな建物だった。宿泊室と温泉施設、食堂に加え、会議室やビデオシアター室といった研修施設も備え、農業者や子どもたちの交流・研修の場としての活用を想定したものである。温泉には蝶ヶ岳温泉を引湯し、日帰りでも宿泊でも楽しめる大浴場となっている。時代とともに農業振興の側面は薄れてきてはいるが、現在でも安曇野市内屈指の大規模宿泊施設として、観光の拠点となっている。



オープンを抑えたほりでーゆ〜四季の郷（上）と、現在の様子（下）



自転車と観光

昭和から平成にかけての観光スタイルは、時代の流れと共に少しずつ変化してきた。画一的だった観光客は多様化し、ただ名所旧跡を見るだけの旅行から、より「体験」や「癒し」を求めるようになる。

そんな中で、身近で手軽に楽しめるアクティビティや、健康や環境にいい移動手段として徐々に人気が高まっていったのが自転車であった。平成の後半から世間に巻き起こった自転車ブームの高まりとともに、スポーツタイプの



アルプスあづみのセンチュリーライドの参加者たち
(アルプスあづみのセンチュリーライド実行委員会 /
cyclowired 提供)

自転車の販売数は増加し、令和に入っても堅調である。
安曇野市は元々適度に起伏のある平坦基調の土地であり、サイクリングには向いている地形だ。それに加えて特に堀金から穂高を中心として延びる県道、通称山麓線は、ちょうどよいアップダウンと信号の少なさから、競技自転車のコースとして愛好家からは親しまれてきた。近年では、この山麓線をメインのコースに据えた「アルプスあづみのセンチュリーライド」というサイクリングイベントも開催され、毎回大勢の参加者で賑わっている。

また安曇野市では令和三年度から、サイクリングと観光を組み合わせ、貸自転車で安曇野をたつぷり堪能できるように、市内にサイクリングコースを設定した。堀金の中心部にあ

る「道の駅ほりかねの里」をスタート・ゴール地点として、市内全域を巡る三つのコースは、安曇野の魅力を手軽に味わえる新たな観光として人気を博している。

更に令和四年（二〇二二）には、啼鳥山荘周辺にマウンテンバイクコースが設置された。市内在住のマ

ウンテンバイク元オリンピック日本代表である小林可奈子氏監修の三コースはバラエティに富み、須砂渡溪谷の自然の中を駆け抜けることができる。

市内の自転車アクティビティの中心となった堀金地域。今後も新たな時代の観光振興を進める上で、欠かせない存在であることは間違いない。



MTB コースのオープニングイベント

（幅拓哉）

過去を紐解き、未来へ活かす

安曇野市文書館

安曇野市文書館はどんな施設？

安曇野市文書館は、平成三〇年（二〇一八）一〇月一日に開館した。文書館とは、安曇野市に関する歴史的・文化的に重要な公文書や江戸・明治時代など古い時代に書かれた文書などの地域資料を収集・保存して、広く利用してもらうための施設である。

文書館は、安曇野の「過去」と「現在」を伝える重要な文書を継続的に受け入れている。保存年限が経過した安曇野市役所の資料や文書、民家に眠っており大切に保管されてきた古文書や写真、映像資料等の中で、歴史的・文化的に価値あるものを選別し、保管していく役目を持つ。単に「過去」を集めるだけではなく、安曇野市



安曇野市文書館全景

の歴史を知ること、より安曇野市への理解が深まる。「過去」を知り、よりよい安曇野の「未来」へ繋げることができるのだ。

文書館開館までの動き

安曇野市では、平成二二年（二〇〇九）一〇月から市内の民家に保存されている古文書資料の収集と整理作業を本格化させた。当時は、特定の保管施設を持たなかったため、資料の多くを借用し、撮影するという手段で情報収集を進めてきた。

また、平成二四年度からは本庁舎建設の動きに伴い、江戸時代から昭和四〇年代までのすべての文書と、昭和五〇年代から合併までの選別した公文書を、穂高会館内に設けられた公文書整理室に運び込み、整理を行った。

市の政策の中で「文書館」がはじめて言及されるのは、平成二五年（二〇一三）に策定された「第一次文化振興計画」である。計画では、進められてきた文書の整理作業を受け、「歴史的価値ある行政文書の保存と活用」の一環として「収

集・保存並びに調査研究、普及啓発活動を行う文書館機能をもった施設の整備」が挙げられた。平成二十七年（二〇一五）には「新市立博物館構想」をまとめ、この中でも博物館とは別の施設として「文書館」を整備する方針が打ち出された。こうした事前の準備を経て、平成二十八年（二〇一六）から文書館開館に向けた動きが本格化した。廃棄される公文書に対しても歴史的公文書として残す意義を全庁に呼びかけ、選別基準の周知に努めたのである。このように開館以前から、安曇野市となつてからの公文書についても将来的に残していく取り組みを行ってきた。

平成二十九年度には、文書館業務検討委員会が設置され、文書館の業務に関する検討がなされた。その提言書には、安曇野市における公文書や地域資料の管理の状況、公文書館法や公文書等の管理に関する法律の趣旨等を踏まえ、文書館のあり方や業務内容について書かれている。これを受け、条例・施行規則の整備が進められた。

平成二十九（二〇一七）七月には旧堀金公民館・図書館の改修工事に着手。工事は平成三〇年（二〇一八）三月に



文書館業務検討委員会

完了し、四月には条例・施行規則が施行され、館長が着任した。このようにして、安曇野市文書館は開館を迎えた。

文書館の業務

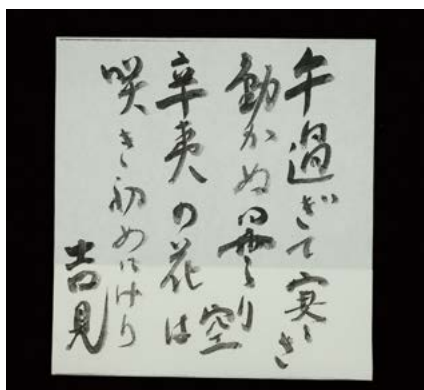
ここでは、文書館の大まかな業務内容を四つ紹介したい。

① 収集

公文書や家に大切に保管されてきた古文書や写真、映像資料などを集める。収集前の調査も大事な仕事である。

② 保存・整理・利用

収集した資料の中で、歴史的・文化的に価値ある重要文書を選び分けて保存している。保存する資料はデータベースに登録し、資料のタイトルや内容に関する情報を入力して検索しやすくする。また、重要な資料がいつでも利用できるように整理を行っている。整理した資料は、市民や研究者など必要な方に利用してもらっている。



白井吉見色紙（午過ぎて寒さ動かぬ雲り空辛夷の花は咲き初めにけり）

③調査・研究

集めた資料がどういったものか、調査・研究を行っていい。また、調査・研究をした成果を本にまとめたりする。

安曇野市には、自由民権運動で活躍した松澤求策や『暗黒日記』を綴った清澤冽、特攻出撃を控えた知覧基地で「国を愛しても、操縦桿を採る器械となつてはいけない」と記した上原良司、堀金三田に生まれ小説『安曇野』を執筆した作家臼井吉見ら、安曇野市にゆかりのある人物に関連した資料が寄贈・寄託されている。これらの資料を使って、過去には、講座や講演会、企画展を行ってきた。資料を通して、先人たちの信念や地域の理解へ繋げることができるのである。

④普及・啓発

公文書や保管資料を知ってもらうため、企画展示や講座、講演会などを開催する。安曇野市文書館の仕事や保存している資料について調査・研究し、その成果を広くお知らせする。その他に、初心者向けに古文書解読講座を行ったり閲覧などの利用促進も行ったりしている。

また、安曇野市誌編さんに向けた取り組みも挙げられる。安曇野市は、旧町村時代にまとめられたそれぞれの町村誌（史）があるものの、どれも刊行から数一〇年が経っており、また市全体のことを知るには、何冊もの資料を重ね合わせて見る必要があった。さらに市内には、近年失われつつあ

る自然や民俗風習が多くあり、それらの情報を次世代に残していく必要がある。そのために、古文書や区有文書などを調査・整理し、そこで得られた情報を活用して、市誌編さんを進めている。文書館は調査資料のデータベースとしての役割を担っているのだ。

さらに、博物館・図書館・公民館などの公共施設との連携も重要な業務だ。これらの施設と文書館は、安曇野市についての知識・記録・文化資源を扱う公共機関という点で共通している。そこで公民館へ出向き出前講座を開催したり、逆に文書館の講座や講演会の会場に図書館が出張して、講座や講演会のテーマに沿った本の貸し出しを行う「お出かけ図書館」を開いたりしている。これらの施設と連携することで、安曇野市の記録・資源の共有化を図り、市民の学びを豊かにすることができる。

学校資料と学校連携

文書館の代表的な資料に、市内一七小中学校の「学校資料」がある。

かねてから、安曇野市文書館業務検討委員会では学校資料の重要性が指摘されていた。これは、学校資料から当時の社会情勢を分析することができると考えられるからである。そこで平成三〇年（二〇一八）から学校資料

の調査が始まり、令和元年（二〇一九）にはその大半が安曇野市文書館に移管された。移管したことにより、資料の散逸を防げるだけでなく、新規採用教員や各学校職員の研修にも活用できるようにになった。

また、文書館を子どもたちにも知ってもらい、調査学習などに利用してもらうために、子ども向けパンフレットを制作した。これを活用するため、令和四年（二〇二二）からは、文書館から市内の学校に赴き、出前講座を実施している。講座の中では、子どもたちに文書館の役割について説明するとともに、資料の保存・保全などの重要性や、地域の文化遺産を尊重する大切さを伝えている。



堀金中学校での出前講座の様子

区有文書の調査

文書館では、令和二年度からの市誌編さん事業の開始に伴い、区が保有している文書（区有文書）の調査を進めてきた。区有文書には区の運営に関する会議録や会計簿などがあり、近現代の安曇野市を知るうえでの大切な資料であ

る。そこには公文書から分析することのできない、市井の人々の活動の様子が克明に記されている。

現在、文書

館に収蔵されている区有文書の内訳は、上長尾区一四五点、下長尾区九六九点、上堀区八点、下堀区九五一点、等々力町区二九七点、七日市場区二八点となっており、日誌や記念誌、古写真なども寄贈・寄託されている。受け入れた区民の財産である文書は大切に保管され、今後展示や調査研究、市誌編さんに活かされていくことだろう。

これからも文書館では、市の教育、学術、文化及び生活の発展に寄与するため資料を収集・保存し、利用に供していく。

民家や施設に古文書や古写真、映像資料が眠っていたら、文書館にぜひ声をかけてほしい。

（高橋真史）



議事録 上堀区
（皇紀 2601 年、昭和 16 年度）

6 脈々と受け継がれる学校林

堀金といえは、拾ヶ堰によりもたらされる豊富な水脈によって築かれた県内有数の米どころとして、豊かな田園風景を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。そして、その西側には北アルプスの峰々、常念岳や蝶ヶ岳を抱えている。しかし、その田園地帯と北アルプスの奥山の間をつなぐ山腹、里山の学有林が、明治時代からの教育の礎の一翼を担っていたことは、あまり知られていない。そして、その学有林は、途切れることなく現在も受け継がれ、子どもたちの良き学びの場であり続けている。

堀金と森林

堀金は、昔から烏川流域を中心として林業が盛んで、伐採された丸太は烏川の水流を利用し里へと運ばれた。藩有林、入会林、社寺林、個人有林があり、現在も生産森林組合や共有林として地域住民により管理されている山林が多く残っている。元禄時代には、烏川山から大規模な伐り出しが行われ、善光寺本堂や松本藩江戸屋敷の御用木として搬出されたと記録されている。森林面積は、安曇野市全体

が約六一割であるのに対し、堀金においてはそれより一五割近くも多い。現在、安曇野市の管理する市有林もその多くが堀金地域に存在し、木材生産と造林が行われている。

堀金学有林の経過



生徒による間伐材搬出の様子

学有林とは、学校が所有または管理している山林のことである。堀金地域における学有林の始まりは、今から約一二〇年前の明治三八年（一九〇五）四月に、烏川村小野沢において、一〇〇町歩（約一〇〇畝）が設置されたことによる。現在とは異なり、山林

学校と村との間で研究協議され三ヶ所の学有林が設定された。牛首沢と、もう一ヶ所を鳥川村岩原、三田村田多井などから買い受け、残りのこうもり沢は鳥川村中堀外一八部落より贈与された。その後、昭和三年（一九二八）四月一日日から児童らにより植樹、補植、手入れがなされ、カラマツ、スギ等合わせて昭和十三年（一九三八）までに一万一〇〇〇本が生育していたと記録されている。昭和二十二年（一九四七）、新学制による堀金中学校の開校に伴い、



巣箱かけをする生徒の様子（昭和 37 年）

が富の象徴であった時代である。明治 四 〇 年（一九〇七）の学校日誌には、五月一二日に堀金尋常小学校の児童一二八名により植林が行われたことが記録されている。造林するも複数回の山林火災により焼失したが、その後大正一〇年（一九二一）頃から

している。さらにこの生徒らによる学有林活動に先立ち、学校、村役場職員、教育長が現場下見を行い、PTAの多数が、地拵え（植林するための準備作業）など学有林作業に参加し、その活動を支えてきた。その後も保育作業は年二回続けられ、昭和四八年（一九七三）以降は年一回下草刈りや、枝打ち、間伐作業が続けられてきた。間伐された木材は、林間学習におけるキャンプファイヤー等の野外活動で活用されてきた。安曇野市への合併後も形を変えな



PTA による地拵え作業の様子

生徒による植林および保育作業が年二回実施されるようになり、昭和四〇年（一九六五）の最終的な植林本数は一〇万本近くに達していたとされる。そして、昭和 二 九 年（一九五四）には、長野県学校林経営コンクールにて第三位に入賞し、その後も多数入賞を

がら、森林組合、市耕地林務課、学校など地域の人たちに支えられ、現在は堀金中学校一年生が、牛首沢において平成六年五月に植林されたヒノキの間伐を行っている。かつての堀金中学校の先輩が植林したカラマツは、直径五〇センチメートルを超える大木へと成長し、伐倒実演やその木材活用など後輩たちの大切な学習教材として生かされている。

植林コンクール受賞歴

昭和二九年	長野県学校林経営コンクール	第三位
昭和三三年	長野県学校林経営コンクール	第二位
昭和三七	長野県学校林経営コンクール	第三位
同 年	長野県学校林経営コンクール 南安曇地区	第一位
昭和三八年	長野県学校林経営コンクール	第一位
昭和三九年	全日本学校植林地方予選	第二位
昭和四〇年	全日本学校植林地方予選	入 選
昭和四一年	全日本学校植林地方予選	特 選
同 年	全日本学校植林地方予選 中央審査会	第二位
昭和四一年	全日本学校植林地方予選 地方予選	特 選

現在の学有林と森林学習

令和四年度からは、森林・林業について学び、森林を育てる学習に加え、育てた木材を日々の学校生活で使い体験することを目的として「木づくえプロジェクト」が開始された。このプロジェクトは、子どもたちが「木」に触れる機会を増やし、地元

の里山で育った「木」と共に学習する体験をさせたいと願う堀金中学校出身者が発起人となり立ち上げられた。市里山再生計画のプロジェクト「さとぶろ。」の取り組みとして、地域の企業や市民、



森林組合の指導により、間伐材に取り組む様子（令和4年）

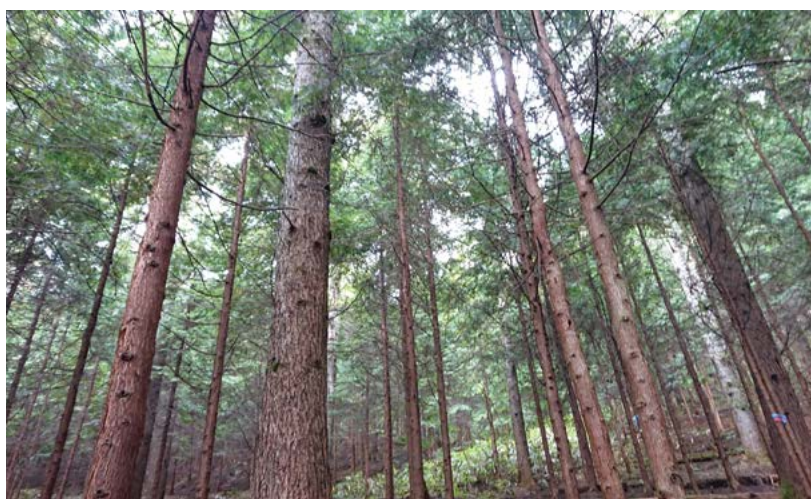


協力しながら学習機の天板を付け替える様子（令和4年）

多くの人々に支えられ、形を変えながら引き継がれている、かつて小さな苗木だった学有林は、堀金地域の景観と環境を担う存在となっている。

木を植え、森に育て、木材を収穫し、

学校や市が協力することで実現した企画である。この企画は、安曇野の里山の課題を学習しながら、合板ではなく、節や杢目、温もりといった「木」本来の良さを子どもたちに日々の学校生活で感じてもらいたいという思いが込められている。地元の里山から伐り出されたアカマツの無垢材を剥いで作られた、ひとつとして同じものはない自分だけの学校机の天板を、生徒自らの手でクラスメイトと協力しながら付け替え、卒業するまでの三年間その机で学ぶのである。



カラマツとヒノキが混在する学有林（令和4年）

しれない。これまでの一二〇年を次の一〇〇年に繋げられるよう、堀金の宝として、今回この学有林の歴史についてご紹介できればと思う。

（田原佳世子）

暮らしに生かす。林業が堀金地域の暮らしを支える重要な産業であった明治時代から受け継がれる学有林は、一〇〇年以上も子どもたちの学びの場、人と自然が交差する空間となっている。一〇〇年単位で生きる木の時間軸の中では、この学有林の歴史もまだ始まったばかりなのかもしれない。

〈堀金小学校〉

南安曇農業高校生とのリンゴ栽培体験交流学習

堀金小学校児童と南安曇農業高校生（グリーンサイエンス科三年フルーツコース専攻生）とのリンゴ栽培体験交流学習は、今から二三年前の平成一三年度に始まった。平成一三年（二〇〇一）一月七日の市民タイムスにこんな記事が紹介されている。「豊科町の南安曇農業高校と堀金村の堀金小学校のリンゴ栽培体験交流は六日、最終回を迎え、同村烏川の同高校第二農場で児童がふじの収穫を楽しんだ。交流は同校園芸科果樹専攻の生徒を中心に、地域交流を図り、栽培を教えながら、指導方法や技術の学習を深めようと、今年から始めた。三、四年生の児童が参加して、六月の摘果から七月の袋掛け、一〇月にはデザインシール張りをしてきた。この日は生徒手作りの紙芝居で、活動をクイズ形式で振り返った。生徒と児童はすっかり打ち解けた雰囲気、真つ赤なふじがたわなに実った畑では、摘果しなかった実の成長具合など実験の結果を確認。生徒がお

いしいリンゴの見分け方を教えた。児童たちは自分のデザインアップルをもぎ取り、シールをはがして文字や絵が浮かび上がると大喜び。一人一〇個収穫し、三年生の女子児童は『いろいろな優しく教えてくれて楽しかった』と笑顔で話した。同高三年の中原始君は『教える立場になると、しっかり勉強しなければならず、とてもいい体験になりました。地域と交流できたことが何よりうれしい』と語っていた。」

以来、堀金小学校三年学年の大切な学習として、年間五回の体験交流学習が実施されてきている。ここ数年は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、この学習は中止されてい



第1回「事前説明会」



第2回「リンゴの一輪摘果」

だが、令和四年度に再開することができた。ここでは、令和元年度の様子を写真と共に紹介する。

第一回は五月の事前説明会。堀金小学校に高校生たちが来校し、一年間の交流内容の説明や、班ごとに分かれての自己紹介、写真撮影が行われた。初め緊張していた子どもたちも互いに顔と名前を覚え、和気あいあいとした雰囲気の中での交流学习となった。

第二回は、六月のリンゴの一輪摘果。果実肥大促進及び安定生産維持のために、中心果を残して側果をハサミで摘み取る。中心果が「小さい」「無い」「形が悪い」場合には、側果の中で一番大きく、形のよいものを残すように教わった。また、実の柄が残っていると収

穫時に果実を傷付けてしまうために、果柄は枝についている基から切ることも教わった。「リンゴのえだにたくさんリンゴの実がついていたのをきれいで大きいのを一つえらんであとは、きりおとした。おとしたリンゴにハサミで顔を作った。かわいかった。」と書かれた子ども感想からは、高校生の指導がしつかり伝わり、子どもたちもきちんと理解しながら作業している様子がわかる。

第三回は、七月のリンゴの袋かけ。これは、リンゴの色の発生を防ぎ、デザインシールの模様を鮮やかに浮き出せるようにするために行った。袋かけでは、「お兄さんが『じょうずだね』と言ってくれた」「はりがねがじょうずにいかなかったとき、アドバイスをもらえてうれしかった」など高校生が小学生を褒めたり上手に助言をしたりと異年齢のいい関わり合いが多く見られた。

第四回は、一〇月のリンゴの除袋・葉摘み・シール貼り。リンゴを赤く色づ



第3回「リンゴの袋かけ」



第4回「リンゴのシール貼り」

慎重に貼った。そして、摘果したリンゴと摘果しなかったリンゴとの生育の差を観察した子どもたちは、なぜ摘果作業が大切なのかを実感したようであった。

第五回は、待ちに待った十一月のリンゴの収穫。デザインシールを貼ったデザインアップル二個ともう一個のリンゴを一人ずつ収穫。高校生が前もって収穫しておいてくれたリンゴをみんなで試食。笑顔あふれるひとときだった。リンゴ栽培をしている祖父の姿を見ている子が、収穫するリンゴをイメージして、赤色の服を着てきた。祖父とリン

かせるために袋を外し、果実周辺の葉を摘む作業を行った。「葉つみの時に葉があたっていた所だけ赤くなっていなかったのがおもしろかった」と子どもたちも葉摘みの必要性を体験を通して学んでいた。デザインシールを貼る部分のリンゴの表面を指で軽く拭き、シールのしわを伸ばしながら、一人二枚ずつシールを

ゴへのその子の深い思いが感じられ、子どもたちの心の成長にもつながっている大切な体験交流学習であることを改めて感じた。「いつも何をやるかをかみしばいでおしえてくれて、よかった」と子どもの感想にあるように、作業内容や手順を紙芝居でわかりやすく説明してくれる高校生にとっても、自分たちの経験や学習の成果を小学生にどのように教えたか伝えるのかなどいい学びの場となっているようだった。

リンゴ栽培が堀金の特色ある産業の一つであることを体験を通して学びながら農業への関心を深め、さらに異年齢である小学生と高校生が共に学び合うことで培われるものが宝のようにたくさん生まれる貴重な学習となっている。今後も大切に継続されていくことを願っている。



第5回「リンゴの収穫」

〈堀金中学校〉

SDGs In Horigane

堀金中学校の「総合的な学習の時間」では、一学年で福祉体験学習・学有林作業・職業調べ等、二学年で職場体験学習・キャリアフェスティバル等、三学年で自己課題解決学習、修学旅行学習等を行ってきた。ここでは、令和四年度一学年の学有林作業に関わる学習活動を紹介する。

一学年のテーマは、「SDGs In Horigane」。

学有林作業についても作業だけでなく、そのための森林学習や間伐材の活用と持続可能な森林の管理というSDGsの視点を大切に考えながら学習を展開している。

学有林作業事前学習

七月二一日、安曇野市林務課の職員による学有林作業事前学習を行った。環境に関する体験学習をするため学校が所有する森林のことを学有林ということ、学有林作業は昭和二年（一九二七）から九〇年以上続けられてきたこと、植林・下草



学有林作業事前学習

刈り・枝打ち・間伐・伐採を繰り返しながら森林づくりを行ってきたこと、人々の暮らしとの関わりのこと、木を使うことは森を育てること等多くのことを学ぶことができた。ある生徒は、「先輩たちが長い間受け継いできた学有林をこれからも受け継いでいけるようにしっかりと作業をしたいと思った。もっともっと未来につなげていきたい」と作業への意欲と継承への決意を誓っていた。

森林学習・天板交換体験

八月三〇日、SDGs学習の一環として森林学習・天板交換体験を行った。森

林や里山に関わる話では、森林での作業の様子を聞いて、森林や里山を良い状態で保つための大変さや多くの人たちが森林の維持に関わっていることを知ることができた。また、森林やそれを育む水と自分たちの生活とのつながりを知る中で、今まで見えていなかったことに気づき、驚く生



天板交換体験



学有林作業

徒の姿があった。机の天板の交換では、慣れない作業だったが講師の方々と友だちと力を合わせて一生懸命取り組んでいた。「アカマツでできた新しい天板を見ると前の天板より大きく、色が明るいので教室も明るい雰囲気になった。ただ、欠けやすいので大切にしていねいに三年間使っていきたい」と新しい天板を触りながら、安曇野の木ぬくもりを改めて感じていた生徒たちであった。

学有林作業

一〇月三日、無事に学有林作業を行うことができた。今回はのこぎりを使って班で一本の木を切る間伐作業を行った。初めての作業に最初は慣れない様子だったが、班で協力して木を切り、二桁程の長さに切りそろえることができた。生徒二人の感想を紹介する。

「班の人と協力して、木を切ったり枝打ちをしたりすることができた。また、木を直接触ったり切ったりすることで、木の大切さを改めて知ることができた。行きの登山はかなりきつく暑く、途中で心が折れそうになったが、それ以上に学有林の木を切る作業の方がきつかった。しかし、木を切る時は迫力があり、とても興味を持てた。」

「里山の木材を使うことが、これからも里山を守り続けていくために必要だということが分かった。先輩方が今まで整備してきた学有林なので、私たちが作業した後、来年も里山を維持するために学有林作業が続いて、その木材を



中庭プロジェクト

学有林作業で伐採してきた間伐材を使って、中庭をデザインしているというプロジェクトを実施した。九月にみんなで考えたアイディアやデザインを生かしながら学有林作業後から一ヶ月にかけて進めてきた。ウッドチップを中庭全体に敷き詰め、切り出してきた間伐材を短く柱状に切っ

有効活用できると良いと思った。」生徒たちは、この長年受け継がれてきた作業体験を通して、「持続可能な森林の管理」というSDGsの視点をしっかりと、そしてたくましく実践していることが分かる。

中庭プロジェクト

て花壇の周りに並べた。生の木はなかなか切りにくいように、一本の木に二〇〜三〇分程かかっていたが、交代しながら切ったり互いに木を押さえ合ったりして、笑顔で頑張って作業をしていた。生徒たちの感想は、「中庭でウッドチップをまいたが、なんとか無事に、楽しく任務を全うできて良かった」「穴を掘るのはすぐ疲れたけど、達成感があった。きれいに丸太が並んだときはとてもうれしかった」等であった。自分たちの学校の中庭を自分たちの力で整備・改善できたことは、学有林の存在を生かした実践的な環境学習となり、まさに「SDGs In Horigane」に相応しい有意義なものとなった。

学有林を所有している学校は、全国的に見ても少数である。今後も学有林を学校の宝として、生徒たちの探究的実践的な学びに大いに生かしていつてほしいと願って止まない。

これら堀金小学校、堀金中学校の子どもたちと学びの実践こそが、「堀金の宝」である。子どもたちはきっと、自らの手で未来に向かって、安曇野・堀金の宝を見つけ、さらに磨きをかけていつてくれることだろう。楽しみである。

(窪田尚幸)

○主な参考文献（五十音・年代順）

- ・会田貢 1923『信濃不二 166号』信濃不二社
- ・あづみ農業協同組合 2006『JA あづみ 40年のあゆみ』
- ・あづみ農業協同組合 1985『あづみ農協二十年史』
- ・安曇野市豊科郷土博物館 2016『安曇野市豊科郷土博物館紀要 第3号』
- ・安曇野文化刊行委員会 2023『安曇野文化』第48号
- ・安曇野文化刊行委員会 2023『安曇野文化』第49号
- ・安曇野文化刊行委員会 2024『安曇野文化』第50号
- ・安曇村誌編集委員会 1997『安曇村誌 第二巻 歴史上』
- ・市川本太郎 1986『長野師範人物誌』信濃教育会出版部
- ・臼井吉見 1970『安曇野 第2部』筑摩書房
- ・臼井吉見 1972『安曇野 第3部』筑摩書房
- ・臼井吉見 1973『安曇野 第4部』筑摩書房
- ・臼井吉見 1986『自分をつくる』筑摩書房
- ・臼井吉見文学館 2022『臼井吉見文学館開館30周年記念誌』
- ・臼井吉見文学館友の会 2021『講演録 父のあれこれ』
- ・小穴喜一 1987『土と水から歴史を探る ―古代・中世の用水路を軸として―』信毎書籍出版センター
- ・柏原成光 2013『友 臼井吉見と古田晁と』紅書房
- ・上條久枝 2018『ウォルターウェストンと上條嘉門次』求龍堂
- ・環境省自然環境局 生物多様性センター 2020『モニタリングサイト1000 高山帯調査 2008-2017年度とりまとめ報告書』
- ・北山曜 2022「ミヤマモンキチョウ浅間連山亜種 (*Colias palaeno aias* Fruhstorfer) に及ぼすモンキチョウ (*Colias erate poligraphus* Motschulsky) の交尾干渉」『蝶と蛾』73巻 (2022)2号
- ・郷土出版社 1995『長野県美術全集 第5巻』
- ・窪田雅之 2021『松本平 安曇野 仁科の里 観音札所百番めぐり』信濃毎日新聞社
- ・斎藤茂 1966『わが日わが道』山上社
- ・笹本正治 2013『安曇野風土記Ⅰ 水で結ばれたふるさと』安曇野市教育委員会
- ・笹本正治 2017『安曇野風土記Ⅲ さくら サクラ 桜』安曇野市教育委員会
- ・佐藤春夫 1988『佐藤藤山追憶集』信濃教育会出版部
- ・産業技術総合研究所地質調査総合センター “活動セグメントの概要とパラメーター代表値”
活断層データベース
https://gbank.gsj.jp/activefault/segment_param?SearchTYPE=&fval_type1=094-01&segment_id=094-01&topic_list=2&search_mode=2#TopOfMap
- ・産業技術総合研究所地質調査総合センター “シームレス地質図”
地質図表示システム 地質図 Navi
<https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php#13,36.24904,137.86637>
- ・三師会 1984『堀金中学校職員文集』
- ・自然観察資料集作成委員会 1984『松本盆地のおいたちをさぐる（改訂版）』電算印刷株式会社
- ・信濃教育会 1991『信濃教育 1260号』
- ・信濃史学会編 1993『信州の山城』信毎書籍出版センター
- ・信濃史料刊行会 1972『新編信濃史料叢書 第二巻』
- ・竹下光士、原山智 2023『地学ノート 地形を知れば山の見え方が変わる』山と溪谷社
- ・田淵行男 1981『山の紋章・雪形』学習研究社
- ・田淵行男 1959『高山蝶』朋文堂

- ・田淵行男 1983『安曇野の蝶 山の絵本』講談社
- ・長野県安曇野建設事務所編 2011『烏川溪谷緑地ガイドブック』長野県安曇野建設事務所
- ・長野県開拓四十周年記念誌編集委員会 1989『長野県開拓四十周年記念誌 拓友』
- ・長野県総務部地方課・長野県 1965『長野県市町村合併誌 市町村編下巻』長野県
- ・長野県土地改良史編集委員会 1999『長野県土地改良史 第一巻 歴史編』長野県土地改良事業団体連合会
- ・長野県歴史大年表刊行会 1987『長野県歴史大年表 下巻』郷土出版社
- ・農民文化協会 1951『農民文学 創刊号』
- ・農林水産省関東農政局安曇野農業水利事業所 2000『水土記』
- ・公益財団法人 八十二文化財団 2017『早逝の大器 山口蒼輪展』
- ・原山智、山本明 2014『『槍・穂高』名峰誕生のミステリー』山と溪谷社
- ・ふるさとを学ぶ堀金友の会 2012『あづみ野 堀金の民話と伝説』
- ・堀金小学校 1962『記念誌 校舎改築落成並びに創立七十五周年』
- ・堀金小学校百年誌編集委員会 1985『堀金小学校百年誌』堀金小学校
- ・堀金尋常高等小学校 1918『学校日誌・大正7年8月』
- ・堀金尋常高等小学校 1918『創立三拾年記念学校沿革誌』
- ・堀金中学校 1976『三十周年記念誌』
- ・堀金中学校 1938『五十年の歩み』
- ・堀金中学校 1987『四〇周年記念誌』
- ・堀金村誌編纂委員会 1991『堀金村誌 上巻 自然歴史編』堀金村誌刊行会
- ・堀金村誌編纂委員会 1992『堀金村誌 下巻 近現代・民俗編』堀金村誌刊行会
- ・堀金村教育委員会 1967『堀金 第1号』堀金村
- ・堀金村教育委員会 1971『堀金 第4号』堀金村
- ・堀金村教育委員会 1973『堀金 第5号』堀金村
- ・堀金村教育委員会 1974『堀金 第6号』堀金村
- ・堀金村教育委員会 1977『堀金 第7号』堀金村
- ・堀金村教育委員会 2005『堀金村の埋蔵文化財第2集 長野県南安曇郡堀金村 堀金小学校付近遺跡 - 小
学校の下に埋れていた平安時代のムラ - 』
- ・三郷村誌編纂委員会 2006『三郷村誌Ⅱ 第2巻 歴史編上』三郷村誌編纂会
- ・三島利徳 2016『安曇野を去った男 ある農民文学者の人生』人文書館
- ・南安曇郡誌改訂編纂会 1968『南安曇郡誌 第二巻下』南安曇郡誌改訂編纂会
- ・宮坂武男 2013『信濃の山城と館 7 安曇・木曽編』戎光祥出版
- ・宮下一男 2008『安曇野の宮大工・ふたりの豊八 - 大隅流と館立川流その作品と系譜』
- ・宮下一男 1993『臥雲辰致』郷土出版社
- ・山梨日日新聞社 2001『山梨の文化』

○協力者一覧（敬称略、五十音順）

㈱あづみのうか浅川、安曇野オオルリシジミ保護対策会議、安曇野市烏川土地改良区、生島足島神社、井口喜源治記念館、一志豊、岩原自然と文化を守り育てる会、臼井高瀬、臼井泰彦、内田秀子、（一社）MSJ 代表理事小林可奈子、国営アルプスあづみの公園、JA あづみ堀金地域営農センター、信州大学工学部建築学科梅干野研究室、中田信好、長野県烏川溪谷緑地、中村寛志、農事組合法人 旬の味ほりがね物産センター組合、堀金小学校、堀金城山勸帰寺、堀金中学校、松本城管理事務所、村上紀子、百瀬新治、山口裕、山田充彦、山梨県立文学館、横澤典利

○執筆者（五十音順）

青木 弥保（安曇野市市民生活部市民課市民担当）
臼居 直之（安曇野市文化財資料センター職員）
尾臺 鞆一（井口喜源治記念館長）
窪田 尚幸（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
倉石あつ子（安曇野市豊科郷土博物館職員）
斉藤 雄太（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）
塩原理絵子（安曇野市教育委員会教育部文化課文化振興担当）
高橋 真史（安曇野市文書館職員）
高山 裕司（安曇野市総務部財産管理課財産マネジメント担当）
田原佳世子（安曇野市市民生活部市民課市民担当）
千村 裕一（安曇野市文書館職員）
土屋 和章（安曇野市市民生活部環境課環境政策担当）
寺島 俊郎（貞享義民記念館長）
那須野雅好（安曇野市文書館職員）
橋渡 勝也（安曇野市教育委員会教育長）
幅 拓哉（安曇野市教育委員会文化課博物館担当）
原 明芳（安曇野市豊科郷土博物館長）
平沢 重人（安曇野市文書館長）
逸見 大悟（安曇野市教育委員会文化課博物館担当）
堀 久士（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）
松澤 果穂（安曇野市文書館職員）
松田 貴子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
丸山 潔（安曇野市文書館職員）
宮本 尚子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
山下 泰永（安曇野市教育委員会文化課文化財保護係）
山田 賢一（安曇野市堀金公民館長）

本書に掲載された写真及び図版の無断転載を禁じます。

『堀金の宝』

令和6年（2024）3月31日 発行

編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

発行 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289番地8 TEL 0263-72-5672

印刷 有限会社アルプス印刷

